

児童養護施設入所経験者の社会化過程に関する一考察
～被虐待児の準拠枠形成の要となる「意味ある他者」に注目して～

学校教育専攻 学校教育専修
山川 将吾

平成 25 年 2 月 13 日 提出

はじめに

児童虐待は重大な社会問題である。平成 22 年度中に児童相談所が対応した養護相談の内、「児童虐待相談の対応件数」は 55,154 件に上った。相談の種別にみると、「身体的虐待」が 21,133 件と最多で、次いで「保護の怠慢・拒否（ネグレクト）」が 18,055 件となっている。なお、「心理的虐待」は 14,617 件、「性的虐待」は 1,349 件となっている¹。1990 年代なかばから児童虐待相談対応件数が急増し、また「児童の権利に関する条約（子どもの権利条約）の批准（平成 6 年〔1994〕年）、児童虐待の防止等に関する法律（以下、児童虐待防止法）の制定（平成 12 年〔2000〕年）などが、児童虐待への関心を高めるきっかけになった²。

上記の児童虐待防止法はその目的を第一条に「この法律は、児童虐待が児童の人権を著しく侵害し、（中略）、我が国における将来の世代の育成にも懸念を及ぼすことにかんがみ、（中略）、もって児童の権利利益の擁護に資することを目的とする³」と明記している。ここで注目したいことは、「将来の世代の育成にも懸念を及ぼす」という点である。すなわち、児童虐待は、被害者である子どもの人生に多大な悪影響を及ぼすだけでなく、次世代を担う子どもたちの育成を担う大人にとって、将来の社会を支える一人前の成員を養成する上での阻害となる。

筆者は、このように多くの問題を抱える被虐待児と長年、直接的な関わりを経験してきた。児童相談所一時保護室で「一時保護対応協力員」として約 6 年間、被虐待児を含む家庭に問題を抱える子どもたちの一時保護の補助を行ってきた。また、児童養護施設でのボランティア活動を通して、家族と離れて生活する子どもたちの生活に直接触れてきた。これらの経験の中で、次のような事例に出会うことがあった。すなわち、「実際に関わったことのある被虐待児が犯罪を起こして少年院に行ったり、刑務所に行ったりすること」や「望まぬ妊娠をすること」や「親になって自分の子どもを虐待すること」などである。そのような事実を知るたびに筆者は、どうしてそのような結果になってしまったのかと思うと同時に、とても残念に感じてきた。この経験が原点となり、被虐待児が虐待を受けてからどのような環境で生活し、それらの経験が当事者の成長にどのように影響をもたらしているのかを知りたいと考えるようになった。

ただし、被虐待児がどのような環境下で生活し、大人になっていくかという過程を明らかにすることは容易ではないだろう。なぜならば、後にも述べるが、被虐待児の多くは被虐待後も

1 厚生労働省 社会福祉行政業務報告 2010 年 8-9 頁

2 庄司順一 被虐待児のためのサービス 『社会福祉学習双書 2010 第 5 巻児童家庭福祉論 児童や家庭に対する支援と児童・家庭福祉制度』 社会法人全国社会福祉協議会『社会福祉学習双書』編集委員会 編 2009 年 74 頁

3 児童虐待の防止等に関する法律 第一条 『児童福祉六法 平成 25 年度版』 中央法規出版 2013 年 1083 頁

家族のもとで生活を送っており、調査研究を行う上で接近可能性が非常に低いからである。そもそも、「家族のもとで生活できる」ということは、すなわち、家族内にまだ子どもを育てていく条件が整っている事を指す。他方で、問題が起りやすいと考えられるのは、家族や親に子どもを育てる条件が整っていない場合である。このような、家族と一緒に暮らせない被虐待児が生活する場は様々にあるが、日本では児童養護施設がその中心的役割を担っている。そこで、被虐待児の成長過程に焦点を当てる上で、児童養護施設で生活している、もしくはしていた被虐待経験を研究対象にすることが望ましいと考えた。

被虐待経験を持つ児童養護施設入所経験者の成長過程を明らかにする上で、その成長過程を「社会化過程」と置き換え、家族や児童養護施設を中心とした生活環境の中でどのような「社会化」を遂げてきたのか、その点に注目していきたい。被虐待児は虐待が起こるような家族の中で生活してきたため、標準的な社会化を遂げる事ができていないことが考えられる。しかし、児童養護施設への入所をきっかけとし、新しい環境での生活を送る中で標準的な社会化を遂げる可能性がある。標準的な社会化には、その手本となるような人物や集団などが存在すると考えられるが、特に影響を持つと考えられるのは、当事者が直接関わることになる具体的な人物、すなわち「意味ある他者」である。

被虐待児に関しては、この「意味ある他者」の中でも、親という最も基本的で重要な他者との関係を「虐待」という歪な形で経験しているばかりでなく、そもそも、被虐待経験によって「意味ある他者」獲得のモデルである親子関係を結べないままに厳しい現実には遭遇しているのである。だからこそ、そのような客観的条件にありながら、新しい環境の中で、施設職員や学校の教師などの大人が被虐待児にとって「意味ある他者」となり得るのか、もしも新たな「意味ある他者」として獲得できるのであれば、それはいかにして可能か、さらにはどのような条件や背景を持っているのかという点を明らかにしていきたい。

そこで本研究では、被虐待経験を持ち、かつ、児童養護施設での生活を経験した人々を調査対象とし、当事者の意味づけから「意味ある他者」との関わり（内容のみならず、「意味ある他者」獲得の有無を含む）を中心とした社会化の様相を明らかにしていく。

もくじ

はじめに	1
もくじ	3
第一章 問題の設定	5～16
第一節 被虐待児の社会化過程における問題	5～12
第一項 社会化の阻害要因としての児童虐待	5
第二項 児童虐待の概要と被虐待児が置かれている状況	6
第三項 被虐待児が抱える特有の問題	10
第二節 被虐待経験を持つ児童養護施設入所経験者の社会化過程	13～16
第一項 被虐待児の社会化における施設入所経験が持つ影響	13
第二項 本研究の目的	16
第二章 研究の枠組み	17～22
第一節 概念の説明	17～18
第一項 社会化	17
第二項 準拠枠	18
第三項 「意味ある他者」	18
第二節 理論枠組みと仮説	19～22
第一項 理論枠組み	19
第二項 仮説	22
第三章 調査の目的と方法	23～28
第一節 調査の目的	23
第二節 調査の方法	23～24
第一項 調査対象	23
第二項 調査の方法と手順	23

第三節	調査項目	24～25
第四節	分析対象の概要	25～28
第一項	インタビュー調査の詳細と分析対象の概要	25
第二項	質問紙調査の詳細と分析対象の概要	26
第四章	結果と考察	29～78
第一節	分析の手順	29
第二節	質問紙調査の結果にみる児童養護施設入所経験者	29～34
第三節	インタビュー事例に関する考察	34～74
第一項	ケース 1 A の社会化過程	34
第二項	ケース 2 B の社会化過程	42
第三項	ケース 3 C の社会化過程	50
第四項	ケース 4 D の社会化過程	62
第四節	総合考察	74～78
第一項	被虐待経験有群と被虐待経験無群の比較	74
第二項	被虐待経験有群と被虐待経験想定群の比較	75
第三項	仮説の検証	76
第五章	結論	79
	おわりに	80
	巻末資料	81～99
	質問紙	81
	事例表（事例 5～29）	88

第一章 問題の設定

本章では、以下の二節を以て問題提起を行う。第一節では、被虐待経験が個人の社会化を阻害する要因となることについて触れる。このことは、一方で、被虐待児特有の問題が他人との関係形成を困難にしつつも、他方で、具体的に被虐待児が社会化を遂げる可能性を生む転機として児童養護施設への入所を挙げる。続く第二節では、第一節で説明した、被虐待児にとっての児童養護施設入所が持つ社会化への影響力について整理し、最後に本研究の目的を提示して締めくくりたい。つけ加えて、筆者がこれまで経験してきた児童相談所一時保護室での被虐待事例や、児童養護施設でのボランティアにおける参与観察の中で得た、子どもたちの様子を参照しつつ問題提起を行っていききたい。

第一節 被虐待児の社会化過程における問題

第一項 社会化の阻害要因としての児童虐待

社会化は、個人が所属する集団や社会で一人前の成員となる過程である。社会化は社会の側が個人に対して、集団の成員として必要とされる「知識・技能・態度・価値・行動様式」を通してその集団が標準とする枠組の形成を要求するものである。個人はこれらの枠組みを「意味ある他者」との相互行為を通して内面化し、一般社会に通じる標準的な準拠枠を形成する。

個人が一番初めに所属する集団は家族である。家族の成員となるために子どもはまず、家族の成員としての準拠枠を形成する必要があるが、その準拠枠は主に親が示す態度などから学ぶことになる。親のように、個人が準拠枠を形成する上で必要となる人物を「意味ある他者」という。「意味ある他者」は、ライフコースに沿って個人が所属していく様々な集団において出会うことになる。例えば、出生家族では両親、仲間集団では親しい友達やリーダー格の者、近隣社会では親戚や近所の大人、学校では先生や級友やクラブの仲間や先輩、職場では上司や同僚、生殖家族では配偶者などが挙げられる。このように、個人が社会化を遂げるためには準拠枠形成の要となる「意味ある他者」との相互行為を必要とする。特に、個人が初めに獲得する「意味ある他者」としての親の存在は、当該個人の社会化においてきわめて重要である。なぜならば、親が「意味ある他者」であれば、子どもは親との相互行為を通してより一般的な他者との関係形成の基礎を身につけ、その経験をもとにして新たな「意味ある他者」をはじめとする準拠人物との相互行為を積み重ね、より複雑で広範な集団や社会に適応していけるようになると考えられるからである。

しかし、被虐待児においては、この最も基本的な親子関係を被虐待という形で経験すること

になるため、標準的な親子関係を通して一人前の社会人となる社会化を遂げることが困難になると考えられる。被虐待児と一括りにしているが、いうまでもなく虐待が起こった家族であっても、虐待が起きた時期や内容、虐待を行った人物や家族関係などの実際は実に多種多様で複合的である。ただし、被虐待児に共通していると考えられることは、本来「意味ある他者」であるはずの親から虐待を受けたり、そのように虐待を受けているにも関わらず他方の親から守ってもらえなかったりすることで、親が「意味ある他者」になり得なかったり、親が「意味ある他者」の時期があったとしても、虐待を受けることで「意味ある他者」でなくなったりする。すなわち、被虐待経験は子どもにとって「意味ある他者」を喪失する経験となるということである。同時に、子どもにとって社会化は社会参加の条件として否応なしに子ども個人に対して要求する課題であり、被虐待児の場合社会化への課題は被虐待という過酷な状況であっても標準的な行動様式が要求され続けることになる。すでに述べたように、被虐待児は被虐待経験によって「意味ある他者」を獲得する機会を失っているため、特徴を帯びた固有の社会化を果たすことになる。このため、他者との関係を築きにくい傾向がある。つまり「意味ある他者」を獲得すること自体がきわめて難しいという前提条件を指摘しなければならない。そのため、被虐待児が家族をはじめどのような環境において、どのような他者との関係の中で生きてきたのか、あるいは生きていこうとしているのかという彼ら自身の生活史に注目する必要がある。

そこで、被虐待児が虐待を経験した後、どのようにして新たな「意味ある他者」を獲得できるのかその有無も含め、その「意味ある他者」との相互行為においていかなる準拠枠を形成しつつ社会化をとげようとしているのかを明らかにしていきたい。その前提として、児童虐待に関する現行法的枠組みや児童虐待に関する概要など、被虐待児が置かれている客観的社会状況を整理していきたい。

第二項 児童虐待の概要と被虐待児が置かれている状況

児童虐待とは、児童虐待の防止等に関する法律（児童虐待防止法）の第二条にその定義が記されている。大きく「身体的虐待」「性的虐待」「心理的虐待」「ネグレクト」に四区分されており、それぞれ条文に内容が記されているが、それらはあくまで基準であって具体例が詳細に記されている訳ではない⁴。現在、日本では児童虐待を受けたと思われる児童を発見した者には通告義務が課せられている⁵が、あくまでも「思われる」であり、その子どもが虐待を受けている

⁴ 児童虐待の防止等に関する法律 第二条 『児童福祉六法 平成 25 年度版』 中央法規出版 2013 年 1083 頁

⁵ 児童虐待の防止等に関する法律 第六条 『児童福祉六法 平成 25 年度版』 中央法規出版 2013 年 1084 頁

か否かについては、児童相談所が判断を下すことになっている。つまり、被虐待児は児童相談所という専門機関の認定によってはじめて被虐待児になるのである。

虐待通告を受け付けているのは、市町の福祉窓口と児童相談所である。虐待通告を受けると、虐待事実の確認や家族の状況などに関する調査が行われる。そして、緊急性の高い事例に関しては児童相談所が介入し、場合によっては子どもを家族から引き離して一時保護をする場合もある。児童相談所が子どもを一時保護した後に、家族との協議が行われ、家庭復帰をするのか、里親や児童養護施設などの社会的養護（親などの家族に代わって、公がその責任において被虐待児などを養育すること）の担い手に子どもの養育を委託するのかを決定していく。

このように、被虐待児は虐待通告を出発点として児童相談所を通過した後に、家族の下に復帰して生活する者と、里親や児童養護施設等に措置される者へと大きく二分される。現状としては前者の方が圧倒的に多く、後者に関しては児童相談所が虐待事例として扱った件数の1割にも満たない⁶。つまり、被虐待児の中でも虐待の内容が深刻であったり、家族の養育能力が不十分であったりする約1割の事例が、社会的養護の担い手である里親や児童養護施設などに委託措置されるのである（表1、2）。

表1 社会的養護の現状（里親、ファミリーホーム）：「家庭的養護」

里親			ファミリーホーム	
登録里親数	委託里親数	委託児童数	ホーム数	委託児童数
7,669 世帯	2,971 世帯	3,876 人	145 か所	497 人

※厚生労働省 「社会的養護の現状について（参考資料）」⁷より抜粋。

表2 社会的養護の現状（児童福祉施設）：「施設養護」

施設	乳幼児	児童養護移設	情緒障害児短期治療施設	児童自立支援施設	母子生活支援施設	自立援助ホーム
施設数	129 か所	585 か所	37 か所	58 か所	261 か所	82 か所
定員	3,778 人	34,522 人	1,664 人	4,024 人	5,404 世帯	504 人
現員	2,963 人	29,114 人	1,178 人	1,548 人	3,850 世帯 児童 6,015 人	329 人

※厚生労働省 「社会的養護の現状について（参考資料）」⁸より抜粋。

⁶ 厚生労働省 福祉行政報告例 2010年 表8

⁷ 厚生労働省 「社会的養護の現状について（参考資料）」 2012年4月 1頁

ここで、表 2 に注目すると、児童養護施設は「施設養護」の中でも入所児童数が特に多く、社会的養護の中心的存在であることに間違いはないだろう。現在の日本においては、質的に重度で親子分離が必要であるケース、すなわち親と暮らせない子どもの大部分は児童養護施設によって支えられているということである。

児童福祉法において、「児童養護施設は、保護者のない児童（乳児を除く。ただし、安定した生活環境の確保その他の理由により特に必要のある場合には、乳児を含む。以下この条において同じ。）、虐待されている児童その他環境上養護を要する児童を入所させて、これを養護し、あわせて退所した者に対する相談その他の自立のための援助を行うことを目的とする施設とする⁸」と定義されている。どの児童養護施設もこのように法の定める通りの役割を担っているわけだが、実際には、各家庭の子育ての方針・方法が画一的でないことと同様に、各児童養護施設はそれぞれに養育理念をもっており、実践方法もそれぞれ異なっている。さらに、施設形態も大きく大舎制（1 舎当たりの定員数 20 人以上）・中舎制（同 13～19 人）・小舎制（同 12 人以下）の 3 種類に分類され、加えて地域小規模児童養護施設（グループホーム）という形態に分かれている。現状として、大舎制をとっている施設は全体の 75.8%、中舎制が 19.5%、小舎制が 23.4%となっている¹⁰。そのため、施設入所児が置かれている施設の状況は実に様々であり、それに加えて地域の環境も加わって、入所児への影響は多種多量である。

また、児童養護施設における施設入所児の家庭背景は、時代変化と共に変化してきたと言える。佐藤・鈴木（2002）は入所児の家庭背景を含めた入所理由を経年的に整理している¹¹。佐藤ら（2002）による施設入所理由の変遷について次頁の表 4 にまとめる。

佐藤らがまとめた年代による変遷に加えて、本研究の調査対象者の一人である D が語る当時の入所児の様子を見てみたい。D は平成 6 年から平成 15 年にかけて施設での生活をしていた女性である。D は語りの中で、「私が中三ぐらいの時からそういう子らが頻繁に入ってくるようになって」と表現しており、時期的には平成 10 年辺りということになる。児童虐待の急増に伴って児童虐待防止法が制定される 2 年前に当たり、この頃から確かに被虐待児の施設入所が増加していたことがうかがえる。また、厚生労働省「児童養護施設入所児等調査」¹²によると、平成 9・14・19 年度の 3 度の調査において児童虐待に該当する理由を持つ児童は、全体の 19.2% から 27.3%、そして 33.1%へと増加している。また、平成 19 年度の同調査によると、施設へ

⁸ 厚生労働省 「社会的養護の現状について（参考資料）」 2012 年 4 月 1 頁

⁹ 児童福祉法 第 41 条 『児童福祉六法 平成 25 年度版』 中央法規出版 2012 年 85 頁

¹⁰ 厚生労働省 「社会的養護の現状について（参考資料）」 2012 年 4 月 6 頁

¹¹ 佐藤秀樹・鈴木幸雄 児童養護施設入所児童およびその保護者の問題の経年的変容と相互関係性 社会福祉学 第 42 巻第 2 号 91・104 頁 2002 年 91・92 頁

¹² 厚生労働省 児童養護施設入所児等調査 平成 9 年度、平成 14 年度、平成 19 年度

の入所理由に関わらず実際に被虐待経験を持つ児童は全体の 53.4%に達している。

表 4 児童養護施設入所児の入所理由の変遷と時代背景

年代	時代背景	家庭背景を含めた入所理由と施設の役割
戦後	敗戦	孤児・浮浪児等「親のいない児童」の収容。
1950年代 後半～	高度経済成長 工業化 都市部への人口集中 家族形態や機能の変化	親の行方不明や離婚、長期入院等「親がいる児童」を親に代わって養育。
1973年	オイルショック	両親の不和、離婚、母親の家出、ギャンブル、出稼ぎ等による家庭崩壊、あるいは未成熟な親による養育不能等による養護児童の増加。
1970年代 後半	不況とインフレによる生活破壊	親の養育能力の低下、家族問題の複雑・多様化が養護児童の質的变化へと拍車をかける。
1980年代		児童に対する過干渉・過保護、離婚の増加、蒸発等。
1990年代		被虐待児の増加。複雑多様化したニーズもつ児童増加。

※佐藤ら（2002）の記述を基に山川が表にまとめた。

このように、児童養護施設においても被虐待経験を持つ者が増加する中で、施設職員も被虐待児への対応に困難を感じていることが明らかになっている。総務省行政評価局によると、「児童虐待ケースに対応する事について、他のケースに比べて特に困難だと感じることはあるか」という問いに対して、91.7%の施設職員が「ある」と回答している。また、その代表的な理由として「情緒的に不安定な場合が多いから」、「保護者への支援に困難が伴う場合が多いから」、「職員と児童との信頼関係を築くことが難しい場合が多いから」の3つが挙げられている¹³。つまり、被虐待児が他者との関係を築くことが難しく、家族分離が必要なほどの深刻な虐待事例に対応している施設職員から上記のような意見が聞かれるように、被虐待児にとって新たな「意味ある他者」を獲得して社会化を遂げる必要があるにもかかわらず、それが困難な状況にあると推察される。

そこで、被虐待児にとって新たな「意味ある他者」を獲得することや、社会化を遂げることなどに困難を抱えている要因として考えられる、被虐待児が持つ特有の問題を取り上げながら整理していきたい。

¹³ 総務局行政評価局 「児童虐待の防止等に関する意識等調査」結果報告書 2010年

第三項 被虐待児が抱える特有の問題

メディア等に取り上げられる児童虐待の増加とは異なり、被虐待児が抱える特有の問題というものは一般にあまり知られている訳ではない。しかし、先述のように施設職員が虐待事例の子どもへの対応に困難を感じているのと同様に、子どもと関わる機関である学校においても被虐待児への対応を巡って問題が出てきている。蓮尾・鈴木・山川（2012）¹⁴では、三重県内の保育園、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の教員を対象に、学級崩壊と被虐待児との関連性への見解を分析した。その結果、保育園で65.2%、幼稚園で48.2%、小学校で84.5%、中学校で88.0%の教師が被虐待児と学級崩壊とは関連があるという意見を持つ結果となった。学校種別によって多少の差はあるものの、小中学校に注目すると、ほとんどの教師が被虐待児と学級崩壊の関連性について危機を感じており、学級崩壊にまでは至っていないにしても、日頃の教育活動の中で被虐待児への対応に苦慮していることが読み取れる。被虐待児が学校や学級という社会への適応に困難を抱えている、すなわち、社会化を遂げることができていないと捉える事ができるだろう。このように被虐待児の社会化を阻害する要因として考えられる、被虐待児が持つ特有の問題について先行研究を挙げて整理していく。

西澤・中島・三浦（1999）¹⁵は、TSCC（Trauma Symptom Checklist for Children）を用いて施設入所児を対象に調査を実施し、子どもの被虐待経験とトラウマ反応の関連性について明らかにしている。西澤ら（1999）によると、施設入所児は一般の子どもと比較して、有意に「不安」、「易怒性」、「自尊心の欠如」などが高く、付け加えて被虐待児においてはそれらの傾向が一層強いという結果を示している。また、坪井（2005）¹⁶は、CBCL（Child Behavior Checklist）を用いて西澤ら（1999）と同様に施設入所児を対象に調査を実施し、被虐待児には「社会性」、「注意の問題」、「非行」、「攻撃性」について臨床的に何らかのケアが必要であると述べている。

以上の先行研究では被虐待児が持つ問題についてその内容を明らかにしてきた訳だが、西澤ら（1999）が用いたTSCCは自記式の心理検査であり、坪井（2005）は本来保護者が記入するCBCLを施設職員に記入させる、すなわち他者評価による調査を実施している。つまり、それぞれの研究では自己評価と他者評価とのいずれか一方のみを使って検証を行っているという

¹⁴ 蓮尾直美 学級社会における被虐待児発見と組織対応に関する教師の役割葛藤とその再定義 蓮尾直美・鈴木聡・山川将吾 学校組織における被虐待児の発見・対応と社会化をめぐる教師役割の再規定（2）—学校・児童相談所・児童福祉施設による連携の実際を手がかりに— 三重大学教育学部附属教育実践センター紀要 第32号 2012年 25-26頁

¹⁵ 西澤哲・中島健一・三浦恭子 養護施設に入所中の子どものトラウマに関する研究—虐待体験とTSCCによるトラウマ反応の測定— 日本社会事業大学社会事業研究所 1999年

¹⁶ 坪井裕子 Child Behavior Checklist/4-18(CBCL)による被虐待児の行動と情緒の特徴—児童養護施設における調査の検討— 教育心理学研究 53集 2005年 110-121頁

ことである。坪井・李（2007）¹⁷は、これらの自己評価と他者評価の両方を用いて被虐待児の行動と情緒の問題を明らかにした。坪井ら（2007）によると、「自己評価と他者評価いずれにおいても被虐待体験が、子どもの行動や情緒の問題に大きな影響を及ぼすこと¹⁸」が確認された。

ここで、先に述べた被虐待児の情緒・行動の問題である「易怒性」と「攻撃性」について、筆者が実際に児童養護施設で行った参与観察の中で得た実例を挙げる。

「易怒性」「攻撃性」についての事例

（平成24年7月5日木曜日 被虐待事例 小学生3年生男児T）場面はTが学校を終えて施設へ戻り、宿題を筆者に見てもらっているところ。

Tが宿題をやりたくないと言って外へ行こうとするので、筆者が「宿題まだやろ？先にやらな。」と言うと、突然怒り出し壁を蹴ったり、床に転がっている物などに当たりちらし始めた。説得をして、なんとか宿題をすることになったが、算数の宿題が難しく答えが分からないと、再び怒り出し机を蹴ったり、物に当たったりし始めた。このような行動は一度きりではなく、参与観察中に筆者が直接関わっている・いないにかかわらず何度か見られた。また、物に当たるだけではなく、時には施設職員や筆者、他の入所児に対して殴る、蹴るなどの行動に出ることもあった。

これは施設内で見られた現象ではあるが、学校においても、教師から注意された際などに同様の場面が見られると予測される。「易怒性」「攻撃性」などによって、施設で言えば職員や他の入所児との関係を、学校で言えば教師や他の児童・生徒との関係形成を、被虐待児が自らが無意図的に阻害してしまっていると考えられる。

先行研究が共通して証明してきたように、入所児の情緒・行動の問題には、「注意の問題」、「攻撃的特徴」、「非行的行動」、「社会性の問題」等があり、被虐待経験有の入所児は被虐待経験無の入所児よりも情緒・行動の問題が深刻であるということが明らかにされてきた。福榮ら（2009）はさらに、虐待タイプによって児童の行動特徴に差異があることを明らかにしている。福榮らの調査結果からは、ネグレクト群は対人関係の形成が未成熟で、非社会的な側面が強いことが示唆された。身体的虐待群は両価的な言動を示し（「しつこさ」「挑発的」のような他者

¹⁷ 坪井裕子・李明憲 虐待を受けた子どもの自己評価と他者評価による行動と情緒の問題— Child Behavior Checklist (CBCL) と Youth Self Report (YSR) を用いた児童養護施設における検査の検討— 教育心理学研究 55 集 2007 年 335-346 頁

¹⁸ 坪井裕子・李明憲 同上 342 頁

に関わることを強いる側面と、「うつ・虚無感」「固まる」のような他者から距離を置く側面がある)、複合的虐待群は反社会的傾向を示した。さらに、これらの行動特性と虐待タイプの関連から、虐待の再現性が推測された¹⁹。福榮ら(2009)の指摘にある「虐待の再現性」の内容ついてだが、これはつまり、西澤(1994)²⁰が被虐待児は施設や里親などの他の大人との間でも虐待を受けやすいと指摘しているように、被虐待児の行動特性が親だけではなく施設職員などの大人からの虐待行為を誘発しているということである。さらに、大人に限らず学校の級友や施設の他の入所児からの攻撃を誘発するとも考えられる。

以上から、被虐待児が持つ特有の情緒・行動に関する問題は、他者との関係形成においてそのきっかけを奪うことになったり、関係形成の中途段階で関係を悪化させたりするなどの問題に繋がるのが考えられる。特に、虐待の再現性のように大人からの虐待を誘発することから、被虐待児が「意味ある他者」を獲得することをも阻害することになり、それは社会化の阻害にも繋がるのがわかる。

しかし、被虐待児の全てが「虐待の再現性」を示したり、情緒・行動の問題によって他者関係、とりわけ「意味ある他者」の獲得ができず社会化を遂げられなかったりするわけではないと考えられる。そこには、施設入所を契機として、問題を抱えながらも新たな「意味ある他者」を獲得した上で準拠枠を形成し、社会化を遂げる者もいるはずである。また、被虐待児であっても、例えば父親からは暴力を受けていたが母親は必死に守ろうとしてくれた事例があるとすると、少なくとも母親だけは本人にとって「意味ある他者」である可能性が挙げられる。つまり、被虐待児であったとしても、親が「意味ある他者」である場合が考えられるということである。それゆえ、被虐待児の社会化にとっては、虐待の内容や背景と関わって、家族内における「意味ある他者」の存在の有無が大きな影響を持っているのではないだろうか。

ここまで、先行研究を挙げつつ被虐待児の情緒・行動の問題が社会化の阻害要因になると整理すると同時に、「意味ある他者」を獲得することによって標準的な準拠枠を形成し、社会化をとげる可能性があることについて述べてきた。そこで次節では、被虐待児に限らず、被虐待経験を持たない児童養護施設入所児にも焦点を当てつつ、それぞれの社会化における問題点と可能性についてまとめていきたい。

¹⁹ 福榮太郎・井上果子 虐待タイプの違いが児童の行動特性に与える影響 心理臨床学研究第27巻第3号 2009年 278-288頁 278頁

²⁰ 西澤哲 『子どもの虐待—子どもと家族への治療的アプローチ』 誠信書房 1994年

第二節 被虐待経験を持つ児童養護施設入所経験者の社会化過程

第一項 被虐待児の社会化における施設入所経験が持つ影響

第一節第一項で述べたように、児童養護施設は深刻な虐待が行われた家族や、家族関係が修復不能な家族などで生活していた被虐待児の養育を担っている。被虐待児にとって施設は本来安全な生活環境であると同時に、新たな「意味ある他者」を獲得し社会化を遂げる機会を与えられる場所でもあると考えられる。たしかに、実際には施設内虐待が問題にされてはいるが、被虐待児と同様にその他の施設入所児にとっても施設入所は社会化を遂げる契機になるだろう。そこでまず、施設での生活経験が社会化にどのような影響をもつのかを整理するために、施設退所者の状況について先行研究などを基にまとめたい。

施設退所者を対象にして行われた先行研究として天羽（2005）²¹を取り上げる。天羽は自らが長年職員として勤めていた児童養護施設の退所者が施設退所後に直面している問題にどのようなものがあるかを明らかにした。天羽の調査結果によると、調査対象となった施設の退所者の半数以上が「経済上、社会上、工作上、家庭上、今なお困難な生活を強いられ、何らかの社会的援助が必要²²」であるとしている。天羽が示した結果に類似した施設退所者の状況について、東京都と大阪市がそれぞれ大規模な調査の報告をしている。

東京都福祉保健局の「東京都における児童養護施設等退所者へのアンケート調査報告書²³」によると、施設経験者が退所後にまず困ったこととして、「孤独感、孤立感」、「金銭管理」、「生活費」、「職場での人間関係」などが多く挙げられていた。また、現在困っていることとして、「生活全般の不安や将来について」、「家族、親族に関すること」、「生活費等経済的な問題に関すること」、「現在の仕事に関すること」が多く挙げられている。大阪市の「施設退所児童支援のための実態調査報告書²⁴」によると、収入・仕事に関することとして、「施設退所者の所得は低く、生活保護等の公的扶助による生活者も2割を越えている。就労に対する意欲の向上も必要で、経済的に厳しい状況であるから早く働きたいという意識を持っている人が多いが、職場での新しい人間関係や厳しさが受け入れられずに退職してしまうケースが多い²⁵」という報告をしている。

²¹ 天羽浩一 施設事例の報告と分析「児童養護施設 A 学園卒園者の生活と進路から」 鹿児島国際大学 福祉社会学部論集 20 (3,4) 2005年 43-54 頁

²² 天羽浩一 同上 48 頁

²³ 東京都福祉保健局 東京都における児童養護施設退所者へのアンケート調査報告書 2011年

²⁴ 大阪市子ども青少年局 施設退所児童支援のための実態調査報告書 2012年

²⁵ 大阪市子ども青少年局 同上 53 頁

以上の天羽や東京都や阪市の調査結果から見えてくる施設退所者が抱える問題として、「①収入の不安定な職業への従事」、「②対人トラブル解決能力の不足」という二点が挙げられる。「①収入の不安定な職業への従事」に関してはまず、単純に施設経験者の学歴が影響を持っていると考えられる。児童養護施設入所児の進学率は一般値に比べて低いと言われている²⁶。江田ら(2009)は「施設の入所児童は高等学校に進学できなければ退所して独立しなければならない現実がある。家族の後ろ盾が期待できないため人一倍の自立を求められるが、中学校卒業時点では精神的にも社会的にも未熟である。(中略)入所児童にとって高等学校への進学は、学業で単に知識を身につけることだけが目的ではなく、精神的にも経済的にも自立に向けて力を養う期間として重要である²⁷」と述べている。この指摘から、入所児にとって高校へ進学するという事は単に学力を得るだけではなく、就労をはじめとするより広く制度的な社会に参加する上で必要となる準拠枠の形成に繋がるということが読み取れる。

しかし、厚生労働省(平成19年度)の調べによると、施設に入所中の中学3年生の内、高等学校(各種学校)への進学を希望する者は84.5%、中高生の内、大学(短大)への進学希望者は25.7%となっている²⁸。実際の高校への進学率について先の東京都(2011)の調査では約7割となっており、98.2%という平成23年度学校基本調査の結果²⁹に比較するとやや低い数値となっている。しかし、施設入所児の高校進学・非進学には「施設に措置されている」入所児の背景が存在する。江田ら(2009)が指摘するように、施設入所児の進学・非進学をめぐるのは低学力に加えて、高校非進学の場合は就労ということになるが、就労すると施設には入れないという条件がある。つまり、施設入所児の高校進学には「施設以外に生活できる場がないため、あるいは自立の準備が整っていないため、高校に行くことで施設生活を確保する」という意図が含まれていると考えられる。このように、施設入所児にとっての高等学校進学は必ずしも将来を見据えた準備のためのステップではなく、現在の生活を維持するための手段であるとも捉えることもできるだろう。これでは、高校生活が先の江田ら(2009)が主張する「自立に向けて力を養う猶予の期間」にはなるとは考えにくい。谷口(2010)は退所後の雇用状況と学歴の関連について、「雇用状況と学歴が直接的に影響しているというよりは、とりわけ自立までの準備期間の少なさとの関連がある。高校非進学をはじめとして非常に短い期間に退所が決定した場合、当事者の職業アスピレーションの高まらぬまま、自立生活への移行過程が「なし

²⁶ 全国児童養護施設協議会 児童養護施設入所児童の進路に関する調査 2008年

²⁷ 江田裕介・中村通雄・田中存・桑原徹也 現在の児童養護施設における教育的な課題と旭学園の取り組み 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要 No.19 2009年 4頁

²⁸ 厚生労働省 児童養護施設入所児等調査 平成19年度

²⁹ 文部科学省 平成23年度学校基本調査

崩し」的であった³⁰」と述べている。以上の点から、「学力不足」や「低学歴」などのみが、不安定な就労状況に影響しているだけではなく、高等学校への進学・非進学が入所児本人の将来を見据えたものになっていないのではないかとこの点が影響しているとも考えられる。そして、入所児本人が将来への展望を持つためには、人生の方向性を見出すための準拠枠が必要である。

このように、本来、学校教育というものが社会化過程において「知識や技能」をはじめとする「準拠枠」を獲得する重要な場であるにも関わらず、入所児に関してはこの重要な機会を十分に活かすことができない可能性がある。さらに、第一節において述べたように、入所児の中でも被虐待経験を有する者はその情緒・行動の問題から特に学校教育に馴染みにくいと考えられる。被虐待経験によって親が「意味ある他者」でなかったり、施設入所という契機をもってしても新たな「意味ある他者」を獲得できていなかったりする場合、学校において教師をはじめとして、級友やリーダー格の生徒やクラブの仲間などを「意味ある他者」として獲得できるとは考えにくい。それはすなわち、学校という社会の成員として必要とされる準拠枠を獲得することが難しいことを指す。東京都社会福祉協議会児童部会調査研究部平成十六年度調査³¹によると、児童養護施設の児童・生徒が学級にいる場合には指導が困難になるという状況がある。このような実態から、上記の施設退所者が抱える問題の「②対人トラブル解決能力の不足」に照らして言えば、学校という社会においてその成員性を獲得できていない者にとって、大人になってから所属することになる複雑な社会においてその成員性を獲得することはさらに困難であることが容易に想像できる。

さらに、上記の二点の問題に加え、施設退所後の問題の一つとしていわゆる「虐待の連鎖（再生産）」を挙げる。鍋倉（2006）の調査によると、母親による虐待が原因で施設入所となった100事例において、不明の25ケースを除くと、「約3割の母親が施設に預けられた経験を有している事実が明らかとなった³²」としている。さらに、鍋倉（2006）の他に、CiCChettiら（2006）³³は、一歳児に対して不適切な養育（maltreating：各種児童虐待）を行った母親137人と、52人の統制群とを比較した結果、不適切養育群は統制群に比べて、子ども時代に母親自身も不適切な養育を受けていたことが有意に多いことが示された。これら二つの指摘から、被虐待経験

³⁰ 谷口由希子 児童養護施設での生活過程からみる退所後の生活の規定要因の分析—生活の連続性に注目して— 日本社会福祉学会 第58回秋季大会発表資料 2010年

³¹ 東京都社会福祉協議会児童部会調査研究部 『入所児童の学校等で起こす問題行動について』 2004年

³² 鍋倉早百合 自分子どもを虐待した母親の研究～養育のための社会保障の充実を求めて～ 創価大学大学院紀要 28 2006年 245-261頁 257頁

³³ CiCChetti,D.,RogosCh,F.A.,& Toth,S,T. Fostering seCure attaChment in infants in maltreating families through preventive interventions Development and PsyChology,Vol.18 p.623-649 2006

のみならず施設入所経験もが虐待の再生産に繋がる危険性を持っていることがわかる。この虐待の連鎖を本研究の最大の関心である社会化に照らして換言すれば、母親自身が子どもの頃に虐待という現象が起きる家族という社会において標準的ではない準拠枠を形成しているということである。推測の域を出ないが、子どもが虐待を受ける中で「どうすれば虐待を受けないか」という観点で親と対峙することになると、自分が親になった際に、子どもに対して自らが親から受けた方法でもって接することが考えられる。さらに、施設入所を経験したにも関わらず、次世代を虐待するということは、施設生活の中で施設職員をはじめとする大人を「意味ある他者」として獲得されておらず、標準的な大人と子どもの関係を身につけることが出来なかったためだと予測される。そのため、施設入所経験を持つ者が虐待の加害者になり得るという点に関しては、次のような要因があると考えられる。「①入所を契機に、本来の親子関係にまでは至らずとも、標準的な親子関係に近い、養育者と被養育者（大人と子どもの関係）としての関係を形成することができなかつたため。」、「②施設の中では常に入所児間による権力争いにも似た力関係が存在する。例えば人を従わせる、あるいは従わされるといった力による支配関係を絶えず経験している。そのために、対人関係を力関係でコントロールするようになっている。」、「③施設内において施設職員から虐待を受けたため。」である

以上から、被虐待児を含む施設入所児の社会化において児童養護施設は、施設入所児に対して、虐待などの危険性を取り除き、元の家族と比べて一般に通じる生活を与えることになる。それと同時に、入所児同士の力関係の中で生きていかねばならない厳しさをも与えられる。ただし、施設内虐待が実際に起こっていることも事実であるため、施設が必ずしも安全であるとは言いきれないが、施設は社会化という生涯にわたって個人に要求される課題を遂げるための新たな出発点としての役割を持つ可能性がある。特に、施設職員の存在意義は大きく、社会化のエージェントとして施設入所児にとっての「意味ある他者」となり得る。一般に通用する標準的な準拠枠を持った施設職員が「意味ある他者」となることで、はじめて施設入所児が生涯に渡って社会化を遂げる可能性が広がると考えられる。

第二項 本研究の目的

ここまで、被虐待児の社会化における問題点を整理してきた。同時に、児童養護施設への入所経験という転機として新たな「意味ある他者」の獲得によって、被虐待児が社会化を遂げるための標準的な準拠枠を形成する可能性を持つと述べてきた。

そこで本研究では、被虐待児がその家族との関わりにはじまり、施設入所経験、さらには施設退所後の進学や就職や結婚といった、人生における様々な経験がどのように社会化への影響を持つのか、その実態を明らかにすることを目的とする。

第二章 研究の枠組み

第一節では本研究におけるキーワードについてそれぞれ関連付けながら概念定義を行う。さらに、第二節では第一項で挙げた用語同士の関係を示しつつ、理論枠組みを説明する。その上で、本研究の問題関心である被虐待児の社会化と理論枠組みを基に仮説を設定する。

第一節 概念の説明

第一項 社会化

社会化の概念は、「個人がその所属する社会や集団のメンバーになっていく過程³⁴」である。社会化は社会から個人に対して成員性獲得を要求する、つまり、「個人に対する社会の優位性が強調される³⁵」のである。他方で、個人の側からすると、自身が所属する社会において標準とされている知識、技能、態度、価値、行動様式を内面化する過程である。

社会化によって個人が準拠する枠組みは、所属する集団によってその成員性に相違点があり、生涯に渡って不断に獲得し再構成するものである。例えば、個人が所属する集団について家族を出発点として並べると、仲間集団、近隣社会（ご近所）、学校（幼稚園・保育園）、職場集団、生殖家族となる。さらに、個人はこれらの集団のどれか一つのみではなく、例えば「家族・近隣社会・仲間集団・学校」のように、常に複数の集団に所属することになる。そして、これらの集団は並列的に繋がっているだけではなく、個人にとっては所属する集団がより大きく複雑に変化する中で様々な成員性を獲得していくのである。つまり、個人が内面化している知識、技能、態度、価値、行動様式などが多彩になりつつ積み重なり再構成されていくことになる。

また、社会化と関連した概念に個性化がある。個性化とは、「各人に特有なパーソナリティを独自の組織化³⁶」することによって自己形成がなされる過程を指す。しかし個性化は、単に個人の性質によってのみ形成されるものではなく、社会化を遂げていることを前提とし、その中で個人がそれまでの社会化によって獲得してきた準拠枠を再構成することでそれぞれの独自性を形成していくものであると考えられる。

³⁴ 高橋均 新教育社会学辞典 日本教育社会学会編集 1986年 378-379頁 378頁

³⁵ 高橋均 同上

³⁶ 柴山昌山 新教育社会学辞典 日本教育社会学会編集 1986年 302頁

第二項 準拠枠

準拠枠とは、「社会的状況における認識や評価や判断の枠組み³⁷⁾」である。前項において社会化の概念定義を行う中で、個人は所属する集団が要求する成員性、つまり知識、技能、態度、行動様式を内面化すると述べた。個人が内面化するこれらの「知識、技能、態度、行動様式」は準拠枠の一部に当たる。そもそも準拠枠とは、基本的に「意味ある他者」との相互行為によって個人に形成される。まず、「意味ある他者」自体が、一般常識に通じる標準的な準拠枠を形成している人物であるという前提があるため、おのずと「意味ある他者」を介して個人が獲得する準拠枠は一般に通用するものになる。そこに個人が対面する集団での社会化や、非対面の人物（思想家、偉人、専門家、有名人など）や集団（慈善団体、NPO など）や宗教準拠することによって獲得された様々な「知識、技能、態度、行動様式」を自身の「知識、技能、態度、行動様式」に再統合することで形成される、個人が持つ一般に通じる判断基準の集合体が準拠枠であると言える。

第三項 「意味ある他者」

「意味ある他者」とは、「個人の自己形成に大きな影響を及ぼす肯定的、具体的な人物³⁸⁾」である。個人はこの「意味ある他者」との相互行為を通して、「自分に対する態度や評価を内面化することによって自己概念を形成していく³⁹⁾」。さらに、個人は「意味ある他者」の自分に対する「期待に応じて行動を規制⁴⁰⁾」したり、「意味ある他者」が持つ枠組を内面化したりすることで自らの準拠枠を形成する。「意味ある他者」の具体的な人物を、社会化の概念説明で挙げた集団に沿って挙げると、「出生家族：親」、「仲間集団：親しい友達、リーダー格の者」、「近隣社会：親戚、近所の大人」、「学校：教師、級友、クラブやサークルの仲間、先輩」、「職場：上司や同僚」、「生殖家族：配偶者」へと変化していく。

このように、「意味ある他者」は個人の準拠枠形成に大きな影響を及ぼす訳だが、その具体的な人物に親が挙げられており、さらに個人がその人の「期待に応じて行動を規制」するほどの対象であるからこそ、基本的には個人が信頼できる人物や尊敬できる人物であると考えられる。

また、「意味ある他者」と対応する概念に「一般化された他者」がある。「一般化された他者」とは、個人がまず「意味ある他者」との相互行為によって自己形成を経た次の段階において、その社会における「全成員の一般的で組織だった態度を提示し、形成される自己に統一性を与

³⁷⁾ 渡辺秀樹 新教育社会学辞典 日本教育社会学会編集 1986年 458-459頁 458頁

³⁸⁾ ²⁹ ³⁰⁾ 飯田浩之 新教育社会学辞典 日本教育社会学会編集 1986年 30頁

える社会の期待や規範の体系⁴¹⁾」である。個人はライフコースに沿って所属する集団において「意味ある他者」を獲得し相互行為を通して枠組を内面化し、準拠人物や準拠集団によって内面化した枠組みを再統合する中で一般に通じる標準的な準拠枠を形成することで「一般化された他者」を内面化していく。

第二節 理論枠組みと仮説

第一項 理論枠組み

前節で説明した、本研究におけるキーワードを再構成して理論枠組みを示したい。先に挙げたように「社会化」は個人の「準拠枠」を形成する過程でもあり、そのためには「意味ある他者」との相互行為が特に重要である。

個人が社会化を遂げるということは、生涯に渡って不断に所属することになる様々な集団に適応していくということである。個人が所属する集団はそれぞれに個別の枠組を有しており、それを個人に対して獲得するように要求する。その際に個人は「意味ある他者」となる人物との相互行為によって所属する集団に通じる枠組を内面化し、さらに自分に対する「意味ある他者」の態度と他の成員の態度とを関連付け、自らの準拠枠を再構成していく。「意味ある他者」の獲得と準拠枠の再構成を繰り返すことで「一般化された他者」を内面化し、社会化を達成し様々な集団への適応を可能にする。

ただし、準拠枠の形成は非対面の個人や社会との関わりにおいても可能だと考えられるが、社会化においては否応なしに具体的な他者との相互行為が必要となる。そのため、所属する集団において自己に向けられる期待を内面化するためには「意味ある他者」の獲得が必要であり、「意味ある他者」の獲得なしには成員性の獲得が難しい、つまりその社会のシステムを維持することが難しいということになる。このように、社会の維持は個人が社会化を遂げることによって可能となるが、実際には維持に加えて個人が社会のシステムを発展させることがある。これは、社会がそれ自体を維持するための戦略として、個人に対して働き掛ける場合と、個人が社会を変革へ導く場合とが考えられるが、いずれにせよ、実質的に社会を変化させる個人にとって最低条件として社会化を遂げていることが要求される。

ここまで、社会化に関する理論枠組みを提示してきたが、これを次頁の図1に示す。また、社会化に関わる社会とそれぞれ対応した「意味ある他者」を図2に示す。

⁴¹⁾ 飯田浩之 新教育社会学辞典 日本教育社会学会編集 1986年 26頁

図1 社会化の構造

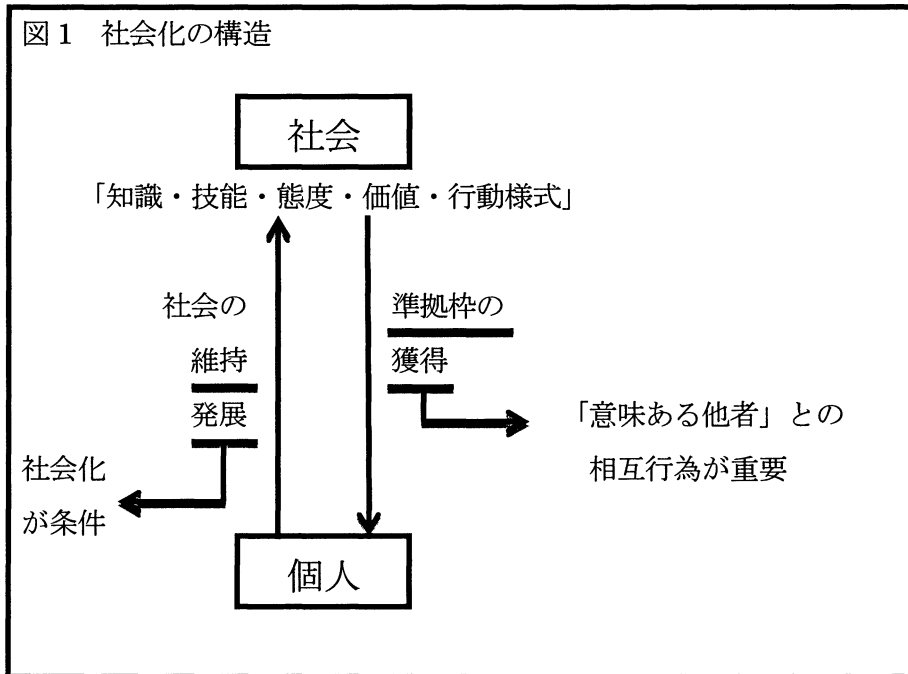
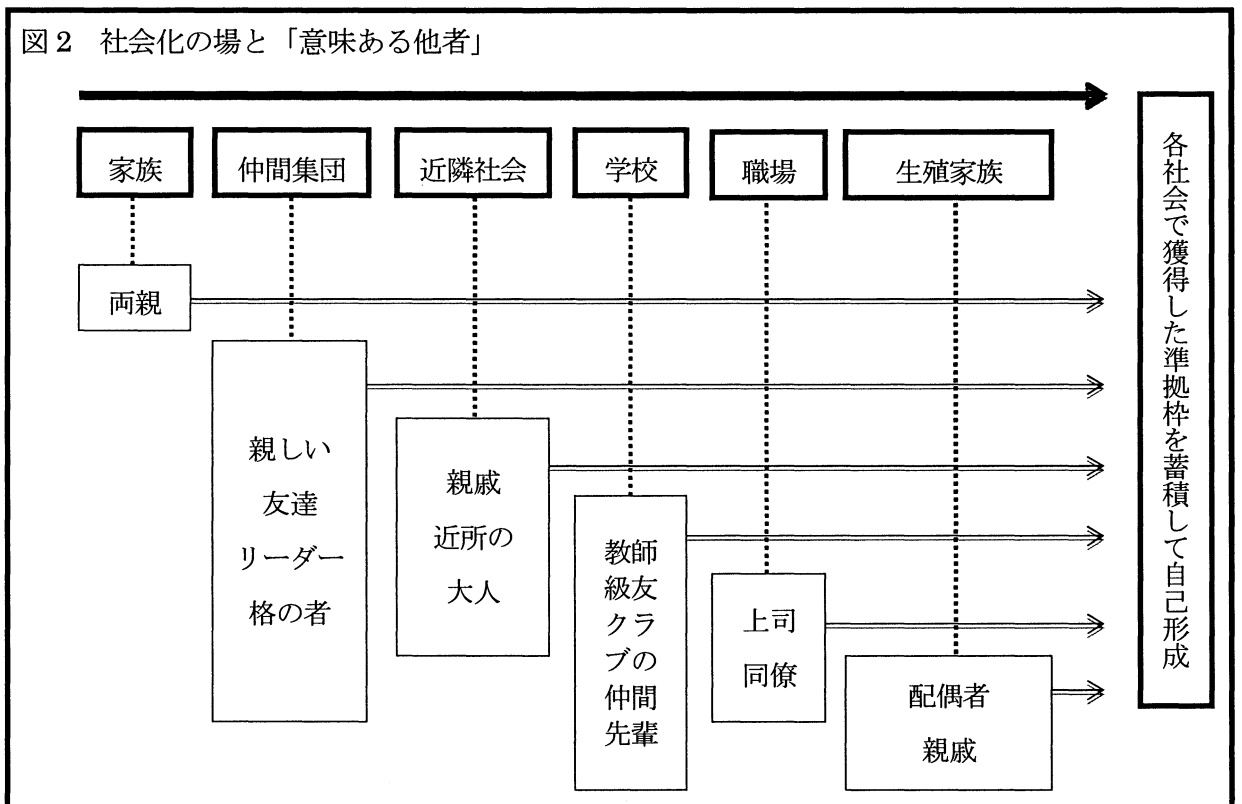


図2 社会化の場と「意味ある他者」



ここまで述べた社会化の理論枠組みを基に、本研究の最大の関心である、被虐待経験を
持つ施設入所経験者（以下、被虐待・施設入所経験者）の社会化過程に照らして述べる。

まず、被虐待・施設入所経験者にとって「意味ある他者」を獲得することは難しく、所
属する集団に適応することが難しいと述べてきた。つまり、成員性を獲得できず、集団の
維持という役割を果たすことができない可能性が高いということである。実際の社会にお
いて個人は所属する社会の維持だけではなく、時には発展にも関わることになるが、被
虐待・施設入所経験者に関しては、まず社会を維持する役割を果たすことが大きな課題と
なる。

次に、所属する集団や「意味ある他者」に注目すると、被虐待・施設入所経験者にとつ
ての「意味ある他者」には一般に「意味ある他者」と言われる人物が挙げられる。しかし、
図2にある集団に加えて被虐待・施設入所経験者は児童養護施設という集団に所属する。
そして、児童養護施設という社会では「意味ある他者」になりうる人物として施設職員が
挙げられる。さらに特筆すべきは、児童養護施設には「職員・入所児」という家族に似た
関係、「同年代・異年齢の入所児同士」という仲間集団に似た関係などがあるということだ
である。つまり、一般に社会化の場における他者関係の要素を兼ね備えている可能性がある。
そのため、児童養護施設が被虐待・施設入所経験者の社会化にとってどのような場として
機能しているのかを明らかにすることも本研究の目的の一つである。

以上から、被虐待・施設入所経験者の社会化には「意味ある他者」を獲得することで、
まず、自分の存在が他者に認められ、同時に所属する社会が期待する役割を担うための枠
組を形成することで社会の成員として認められるという経験が必要である。なぜならば、
被虐待によって、自分の存在を親に認められなかった経験を持つ被虐待・施設入所経験者
にとっては、自分の存在を認め受け入れられるという最低限の他者との関係を形成するこ
とが社会化の第一歩となると考えられるからである。さらに、虐待が起こった家族やその
親は標準的ではない認識枠組みを持ち、そこに準拠した枠組を被虐待児が形成している場
合、生涯に渡って所属する社会に適応するためには新たに標準的な準拠枠を形成する必要
があると考えられる。それは、家族にはじまり、施設や学校など様々な社会に所属する過
程のどこかで「意味ある他者」を獲得することにより可能になるだろう。逆に、「意味ある
他者」を獲得できなければ、標準的な準拠枠の形成がなされず通常社会化が阻害され、
最悪の場合は虐待の再生産に至ってしまうことにもなりかねない。

以上の研究枠組みをもって、被虐待・施設入所経験者が社会化を遂げることができるか
否かという観点から、両者を二分する要因についてそれぞれ仮説を設定する。

第二項 仮説

全体仮説

被虐待経験を持つ児童養護施設経験者が社会化を果たすには、一般に通じる標準的な準拠枠を形成する必要がある。そのためには、「意味ある他者」を獲得し対面での相互行為を通して準拠枠を内面化する過程が必要になる。

下位仮説

1. 施設入所経験者の中でも、被虐待経験を持つの方が持たない者と比べて「意味ある他者」の獲得が難しい。
2. 被虐待経験を持つ施設入所経験者の社会化は、初めに獲得する「意味ある他者」が親以外の人物であっても可能である。
3. 被虐待経験者の場合、標準的な準拠枠を形成していることが生殖家族における虐待の再生産の防止に繋がる。
4. 客観的に虐待を受けていたと考えられる者の中でも、その経験を被虐待として意味づけていない者の方が、被虐待と意味づけている者に比べて「意味ある他者」を獲得し社会化を遂げる余地がある。
5. 児童養護施設は、一般に社会化の場と言われる家族・仲間集団などの要素を複合的に持っている。

以上の仮説を検証するために、本研究では児童養護施設入所経験者に対する調査を実施する。

第三章 調査の目的と方法

第一節 調査の目的

本調査は、被虐待経験を持つ児童養護施設入所経験者の社会化過程を明らかにするために、当事者に対して聞き取りを行うことによって、生涯に渡って所属してきた集団への所属や分岐点などにおいて経験してきた他者関係に対する当事者の意味づけを抽出することを目的とする。

第二節 調査の方法

第一項 調査対象

三重県内にある施設 E の入所児と、同県内の児童養護施設を退所した 18 歳以上の者を調査対象とする。施設退所者の中でも被虐待経験を持つ者と持たない者の両者を対象とする。男女は問わず、年齢に上限は設けていない。

第二項 調査の方法と手順

『調査の方法』

まず、施設入所児が施設生活の中で職員や他の入所児とどのような相互行為をもっているのかを観察し、施設入所児や被虐待児に関する先行研究と照らし合わせるために施設 E においてボランティアの延長として参与観察を行った。参与観察を行う中で、施設職員や施設長らからの理解を得ることができ、退所者への調査実施に関する許可が下りた。

次に、当事者が「意味ある他者」との相互行為をどのように意味づけているのかなど、各事例における複雑な文脈を詳細に抽出するためにインタビュー調査を行った。また、プライバシーの問題や扱う内容がデリケートであり、インタビュー調査へ調査協力者の確保が困難であることが事前に予測されたために、施設退所者に対する郵送法による質問紙調査も実施した。

『調査の手順』

平成 23 年 1 月中旬～平成 24 年 7 月下旬

施設 E での参与観察を開始する。施設 E の施設長には後々、インタビューや質問紙での調査を依頼すると説明した上で了承を得る。調査予定期間は約 1 年半あるが、実際に記録を取りながら参与観察を行うことができた期間は平成 23 年 1、2 月の 2 か月間である。参与観察ではボ

イスレコーダーやビデオカメラによる記録ができず、筆者が入所児と関わりながら合間にメモ用紙を使って逐一行動や発言などを記録していくという方法で行った。平成23年3月以降は、施設E側から記録をとることをやめてほしいとの通達があり、それまで続けてきたボランティアとして入所児と関わる中で気になる出来事などを筆者が帰宅してからなどに回想して書き留めておくという方法を取らざるを得なくなった。そのため、本文中で資料に用いる参与観察記録は、筆者がボランティアを行った日ごとの回想に頼るところが大きい。

平成24年6月上旬

施設Eの施設長に直接会い、インタビュー調査への協力者を紹介してもらえるよう依頼する。A（事例1）を紹介され、7月30日にインタビュー調査を実施する。また、Aには11月26日に二度目のインタビューを実施する。

平成24年10月下旬

三重県下12児童養護施設の内、11施設に質問紙調査の目的を説明した上で協力を依頼する。依頼の結果、8施設からの協力を得る。質問紙と依頼文、返信用封筒を同封した郵送物を各施設から退所者へ送付してもらえるよう依頼する。

質問紙を送付する退所者の抽出については、「自立するまで施設で生活していた者」、「できるだけ男女混合」、「被虐待ケースを含めてその他のケースも選出」の3点を条件に施設に一任する。その上で各施設が、「日頃から連絡をとれていて、かつ、調査に協力可能と思われる」と考えられる退所者を抽出し質問紙を送付してもらう。※巻末に質問紙を添付する。

平成24年10月下旬～11月下旬

調査協力者から質問紙を回収する。同時に、質問紙に同封したインタビュー調査への依頼文を読んで、筆者に返信をした者（B、C、D）に対してインタビュー調査を行う（事例2、3、4）。

第三節 調査項目

本調査に設定した調査項目は以下のとおりである。

〔問1〕 属性に関する項目（性別・年齢・学歴・配偶者や子どもの有無・居住環境）

〔問2〕 仕事に関する項目（仕事内容・雇用形態・勤続年数・仕事へのやりがい・転職経験・職場の人間関係）

〔問3〕 近隣社会に関する項目（近所との交流内容・自治会行事への参加状況・近所や自

治会との関わりにおける問題の有無)

[問 4] 施設退所から現在まで期間に関する項目 (退所時期と理由・退所後に困ったこと・退所後も交流がある人物と交流の内容)

[問 5] 進路に関する項目 (進路の相談相手・進路決定の参考にした人物)

[問 6] 施設入所中の期間に関する項目 (特に自分を「見ていてくれた」と感じる人物の有無とその理由・尊敬できる人物の有無とその理由・信頼できる人物の有無とその理由・辛い時の心の支え)

[問 7] 学校での対人関係に関する項目 (学友との関わり・施設入所を周囲に隠していたか・部活動について・「自分のことを理解してくれていた」と感じる教師の有無)

[問 8] 家族に関する項目 (家族構成・入所時期・きょうだいと一緒に入所したか・入所理由を周囲からどう説明されたか・自分が入所理由をどう考えていたか・自分に対する親の態度とそれに対する自分の対応・入所中の家族との交流・現在の家族との交流・自分が親から虐待を受けていたと思うか否か・被虐待経験をどのように受け止めているか)

[問 9] 自立に関する項目 (自立まで施設で生活することをどのように受け止めていたか)

[問 10] 施設入所経験に関する項目 (施設で生活したことを現在はどうのように受け止めているかとその理由)

第四節 分析対象の概要

まず、この度の調査で得られた事例は、第二項で後述しているように、各施設による調査対象者の選出が大きく影響している。すなわち、分析に用いる全 29 事例は、施設退所者の中でも「施設と連絡がとれており、現在は比較的安定した状況下にある人々」であるということである。

本研究では、インタビュー調査で得られた事例 (事例 1~4) を中心に分析を行うが、質問紙調査で得られた事例 (事例 5~29) についてもそれぞれ個別事例としつつ、事例 1~4 の分析を補足する形で用いる。

第一項 インタビュー調査の詳細と分析対象の概要

インタビュー調査によって得られた事例 (事例 1~4) について、調査実施日時と分析対象それぞれの概要を次頁の表 4 にまとめる。

表4 インタビュー調査の詳細と分析対象の属性

事例 (出身)	調査日 (調査場所) [実施時間]	性別	年齢	学歴	職業	入所期間
事例1 Aさん (施設E)	H24.7.30 (施設E) [2時間52分]	男性	30歳	普通科高校	工員	中学3年～ 高校卒業
事例2 Bさん (施設F)	H24.10.26 (三重大学) [1時間48分]	女性	22歳	4年制大学	管理栄養士	小学2年～ 高校卒業
事例3 Cさん (施設G)	H24.11.19 (喫茶店・ Cさん宅) [36分・ 1時間45分]	男性	35歳	4年制大学	学習塾経営	中学2年～ 高校卒業
事例4 Dさん (施設H) (施設I)	H24.11.22 (喫茶店) [1時間51分]	女性	29歳	中学校	通信制高校 在学	小学5年～中2 (施設H) 中学2年～20歳 (施設I)

第二項 質問紙調査の詳細と分析対象の概要

質問紙調査への協力を得られた8施設それぞれの施設長が指定した部数をまとめて手渡し、もしくは郵送で届ける。8施設合計で115部を配布する。

実際に施設から退所者へ送付された部数は87部となる。施設への配布数と退所者への配布数が異なる理由は、各施設が送付を検討した上で、「把握していた住所にはもう住んでいない」、「施設からの知らせを拒むため断念」、「質問内容から本人への影響を考慮して」などの判断を下したことを筆者が施設からの手紙あるいは電話で確認する。

- ・筆者から8施設に渡した質問紙：115部
- ・実際に施設から退所者へ送付された質問紙：87部
- ・回収：28部（回収率：32.2%）

質問紙調査で得られたデータについて、表5にまとめる。ただし、質問紙で回収した28部の内、3部は事例2、3、4と重複するために残りの25部を事例5～29として記載する。また、これら25事例それぞれの質問への回答結果をまとめたものを巻末資料として記載する(なお、表中の「 」は質問紙の選択肢を示し、「下線部」は自由記述を示す。無回答項目については記載していない)

表5 質問紙調査で得られた分析対象の属性と結果(事例5～29)

事例	性別	年齢	学歴	職業	入所期間
事例5	女性	20代	定時制高校	製造 (非正規)	中学1年～ 高校卒業
事例6	女性	20代	普通科高校	作業所 (福祉就労)	乳児期～ 高校卒業
事例7	男性	40代 以上	中学校	会社勤務 (正規)	幼稚園年長～ 中学校卒業
事例8	女性	40代 以上	4年制大学	不明 (正規)	小学4年～ 高校卒業
事例9	女性	10代	普通科高校	美容師 (正規)	乳児期～ 高校卒業
事例10	女性	40代 以上	職業科高校	経理事務 (正規)	小学2年～ 高校卒業
事例11	男性	20代	職業科高校 卒業	土木業 (非正規)	小学校～ 高校卒業
事例12	男性	20代	職業科高校	フィルムの加工 (正規)	小学3年～ 高校卒業
事例13	女性	20代	不明	赤福 (不明)	乳児期～ 高校卒業
事例14	男性	20代	普通科高校	製造業 (正規)	幼稚園年少～ 高校卒業
事例15	女性	20代	専門学校	障害者福祉 (正規)	高校1年～ 高校卒業

事例 16	女性	20 代	職業科高校	貴金属買い取り (非正規)	小学 1 年～ 高校卒業
事例 17	男性	20 代	普通科高校	介護職 (正規)	幼稚園年長～ 高校卒業
事例 18	男性	10 代	普通科高校	調理師見習い (正規)	幼稚園年中～ 高校卒業
事例 19	男性	10 代	定時制高校	コンビニ店員 (非正規)	小学 3 年～ 高校卒業
事例 20	男性	20 代	4 年制大学 卒業予定	大学生 (3 年生)	幼稚園年長～ 高校卒業
事例 21	男性	10 代	普通科高校	調理 (正規)	高校 1 年～ 高校卒業
事例 22	女性	40 代 以上	普通科高校	調理 (非正規)	小学 5 年～ 高校卒業
事例 23	男性	40 代 以上	職業訓練校 (溶接工 1 年)	会社員 (事務職) (正規)	小学 1 年～ 高校卒業
事例 24	男性	20 代	職業科高校	配管工 (非正規)	乳児期～ 高校卒業
事例 25	女性	30 代	普通科高校	専業主婦 (無職)	乳児期～ 高校卒業
事例 26	男性	30 代	不明	塗装・リフォーム業 (自営業)	不明
事例 27	男性	20 代	職業科高校	土木関係 (非正規)	小学校～ 高校卒業
事例 28	男性	20 代	普通科高校	溶接工 (正規)	幼稚園年長～ 高校卒業
事例 29	女性	30 歳	職業科高校	サービス業 (非正規)	小学 5 年～ 高校卒業

第四章 結果と考察

第一節 分析の手順

まず、全 29 事例を被虐待経験有群と被虐待経験無群とに分ける（表 8）。被虐待経験有群は事例 1、3、5、11、15、16、27、29 である。被虐待経験無群は事例 2、4、6～10、12～14、17～26、28 である。この分別は、「あなたは虐待を受けていたと思いますか」という質問項目への回答を基準にして行った。基本的この両群それぞれを個別に考察した上で比較を行う。

さらに、被虐待児経験無群の内、事例 12、28 については、施設への入所理由に関する自由記述が一般に「虐待」とされる「放任・怠惰」「棄児」「養育拒否」⁴²に該当すると考えられる。具体的には、事例 28 の「父親がトラックの運転手で 1 週間家に帰ってこないから」については放任・怠惰となり、実際には虐待があったと想定されるために被虐待経験想定群とする。また、事例 12 は入所理由について「親に捨てられた」と記述しており、棄児に該当する。さらに、事例 12 は質問紙への記名と施設 E から受け取った退所者名簿とを照らし合わせ、さらに事例 1 の A による確認によって A の弟であることが判明したためにネグレクト事例となるが、本人が被虐待経験と受け止めていないため被虐待経験想定群に分類する。これら 2 事例は、基本的には被虐待経験無群として分析を行い、加えて、被虐待経験有群と比較することによって「自分が虐待を受けたと受け止めているか否か」によって社会化に影響があるのかを考察する。インタビュー事例については、録音したインタビューの逐語記録を、「家族に関する語り」、「学校の教師や学友に関する語り」、「施設の職員や入所児に関する語り」、「進路・就労に関する語り」、「施設生活経験に関する語り」の категорияに分け、さらに固有の categoria を追加する。

第二節 質問紙調査の結果にみる児童養護施設入所経験者

質問紙調査で得られたデータについて単純集計を行った。まず、今回得られた事例の傾向性をつかむために、インタビュー調査のみに対応した事例 1 を除いた 28 事例を集計対象とした。特徴が見られた項目を取り上げ、傾向性などを示していきたい。属性に関する結果を 6 に、就労状況に関する結果を表 7 に、被虐待経験の有無に関する結果を表 8 にそれぞれ記載する（N.A は除く）。本文中の「下線部」は質問項目への自由記述内容を示す。

⁴² 厚生労働省 児童養護施設入所児等調査 平成 19 年度 9 頁

表 6 分析対象の属性（性別・年齢・学歴・結婚・入所時期）

質問紙調査 分析対象(全体 28 人)		
性別	男性 14 人(50.0%)	女性 14 人(50.0%)
	N=28 人	
年齢	10 歳代 4 人(14.8%)	20 歳代 15 人(55.6%)
	30 歳代 3 人(11.1%)	40 歳代以上 5 人(18.5%)
	N=27 人	
学歴	中学校卒 1 人(3.8%)	高校卒 19 人(72.6%)
	職業訓練校卒 1 人(3.8%)	専門学校 1 人(3.8%)
	4 年制大学卒 3 人(11.5%)	高校在学 1 人(3.8%)
	N=26 人	
結婚	未婚 16 人(59.2%)	既婚 11 人(40.7%)
	N=27 人	
入所時期	乳児 5 人(19.2%) 幼稚園・保育園児 6 人(23.1%) 小学生 11 人(42.3%)	
	中学生 2 人(7.7%) 高校生 2 人(7.7%) N=26 人	

表 7 分析対象の就労状況

	質問紙調査 分析対象(全体 28 人)						
	正規雇用	非正規雇用	自営業	無職	その他	不明	合計
会社勤務	3	0	0	0	0	0	3
工場勤め	3	1	0	0	0	0	4
大工・建築業	0	3	1	0	0	0	4
飲食業・調理等	3	1	0	0	0	0	4
商店・デパート勤務	0	3	0	0	0	1	4
福祉	2	0	0	0	1	0	3
サービス業	1	1	0	0	0	0	2
教育	0	0	1	0	0	0	1
専業主婦	0	0	0	1	0	0	1
学生	0	0	0	0	1	0	1
合計	12	9	2	1	2	1	27
							N=27

表 8 被虐待経験の有無

質問紙調査 分析対象(全体 28 人)	
被虐待経験有群	被虐待経験無群
7 (28.0%)	18 (72.0%)
N=25	

「就労に関して」

表 7 のように、正規雇用（自営を含む）と非正規雇用では、やや正規雇用が多い結果となった。雇用条件について男女による差は見られなかった。しかし、被虐待経験有群と被虐待経験無群とを比較すると、前者では 7 人中 5 人が非正規雇用、後者では 18 人中 3 人が非正規雇用であった。

現在の仕事へのやりがいを探ねたところ、全体では「やりがいを感じる」と答えた者が 80.0% おり、その理由としては、「必要とされている」、「任せられている」、「好きな仕事」「人間関係」などが挙げられる。また、「やりがいを感じない」と答えた者が 20.0% となっており、その理由には、「お金をためるだけ」、「目標がない」などが挙げられる。

「転職の経験」についても探ねると、全体の約半数の 55.6% が転職を経験しており、「安月給」や「続かないから」「嫌になってしまう」という理由が挙げられている。転職の経験についても、被虐待経験有群の 85.7%、被虐待経験無群の 52.9% が転職を経験している。転職の理由に「続かないから」と「嫌になってしまう」を挙げているのも被虐待経験有群である。

以上から、施設退所後の生活において基本となる就労に関して、被虐待経験を有する者の方が不安定であるとの可能性が示された。東京都（2011）や大阪市（2012）による施設退所者への調査では、被虐待経験の有無に照らした集計が行われていなかったが、全体の傾向として正規雇用の割合が低いという結果と、今回の調査結果とは類似していると考えられる。ただし、今回の結果にあるように、被虐待経験有群の殆どが非正規雇用という状況から、やはり被虐待経験というものが直接あるいは間接的に社会への適応を妨げているとも考えられる。

「進路に関する相談相手について」

進学や就職など進路を考える際、誰に相談をしていたかを探ねたところ（複数回答可）、全体で最も多かったのは「施設職員」が 85.7%、次いで「学校の先生」が 25.0% という結果になった。男女で比較すると、「施設職員」に相談をしていた割合に差は見られなかったが、「学校の先生」に相談をしていた割合では男子が 71.4%、女子が 21.4% という結果が見られた。被虐待

経験の有無での差は見られなかった。

また、最終的な進路決定の判断基準となったものは何であったかを尋ねたところ、相談相手と同様に「施設職員」が最も多い結果となった。

以上から、やはり施設職員という存在が、入所児に最も影響を与えると考えられる。しかし、実際の進学や就職については、低学力問題や谷口（2010）⁴³が述べるように進学や就職への動機づけが十分でないという状況がある。進路決定に関しては、数値のみでは判断できない部分が多分にあり、本人の意味づけや当時の職員とのやりとりなどを詳細に見ていく必要がある。この点に関しては、インタビュー事例1～4で詳しく見ていきたい。

「尊敬できる人物・信頼できる人物について」

施設にいた当時、尊敬できる人物がいたかどうかを尋ねたところ、被虐待経験無群では「いた」者が53.3%、「いなかった」者が46.7%となった。さらに、被虐待経験有群では全員が「いなかった」と回答している。被虐待経験有群が「いなかった」とする理由には、「人を信じれない」や「他人に興味がない。すごい事をしたとしてもとくに興味はない」などが挙げられた。男女による差は見られなかった。

信頼できる人物がいたかどうかについても尋ねると、被虐待経験無群では「いた」者が68.8%、「いなかった」者が31.3%という結果になった。また、被虐待経験有群では85.7%が「いなかった」と回答している。「いなかった」理由として、「みんな愛想笑い。真剣に話を聞いてくれる人はいなかった」という意見があった。また、被虐待経験有群の中で事例15（父親の知人による虐待）のみが「裏切らないから」という理由で信頼できる人物に「母親」を挙げていた。

以上から、尊敬できる人物についても信頼できる人物についても、被虐待経験を持つ者はこれらの人物を獲得しにくいということが考えられる。これは、親子関係という最も基盤になる関係を「虐待」という歪な形で経験したためのものであり、尊敬や信頼という感覚が育たなかった原因であると考えられる。第一章において、被虐待が子どもに及ぼす影響について説明したが、やはり対人関係を結びにくかったり、結べなかったりする背景には、人と関わる時に攻撃的になってしまったり、距離の取り方が極端であったりということが影響していると考えられる。

他方で、虐待が起きた家族であっても、信頼できる人物も含まれていることが示唆された。虐待は家族内の出来事であるため、その内情は複雑であり、被虐待経験があるからという偏った見方では捉えきれない現実があると考えられる。

⁴³ 谷口由希子 児童養護施設での生活過程からみる退所後の生活の規定要因の分析—生活の連続性に注目して— 日本社会福祉学会 第58回秋季大会発表資料 2010年

「親に対する捉え方」

自分に対する親の態度について尋ねたところ、「一般の親と同じだ」と考えていた者が全体の42.1%、「一般の親とは違うところがある」と考えていた者が57.9%となった。被虐待経験の有無で比較すると、被虐待群は全員「一般の親とは違うところがある」と回答している。非虐待群では、「一般の親と同じだ」と考えていた者が66.7%、「一般の親とは違うところがある」と考えていた者が33.3%となっている。

以上から、被虐待経験を持つ者だけではなく、それ以外の施設入所児も親を「一般とは違う」と捉えていることがある。その上で、両群ともに「親の期待に応えようとする」者や「我慢して親の言うことを聞く」者とがいる。親の態度をどのように捉え、それに対してどのように振舞っているのか、後述のインタビュー事例をもって詳細に見ていく必要があるだろう。

「虐待を受けたことをどう受け止めているか」

虐待を受けていたと回答した7人に対して、その経験をどのように受け止めているかを尋ねた。「親にも事情があったと理解している」と回答した者が1人、「どうして親が虐待を行ったのか理解できない」と回答した者が3人となった。さらに、自分が親になった際に、虐待を「してしまうかもしれない」と「絶対にしない」との両方を選んでいる者が2人いる。

以上から、被虐待経験者がその経験をどのように受け止めるかということは、生涯に渡ってついてまわるだろう。葛藤を抱えつつも、自分が親になることをどのように受け止めるかという点については、事例3でCが「親と同じようにしてしまうとちゃうか」と不安を抱えつつも、親を「反面教師」として、子育てについての不安が「全然なかった」と語る妻に対して「それが強さ」と評価し、夫婦二人が「それでバランスがとれている」と語るように、自分が親になり配偶者との相互行為を繰り返す中で徐々に不安を軽減させていくのではないかと考えられる。

「施設で生活したことをどのように受け止めているか」

施設で生活したことを現在はどうのように受け止めているのかを尋ねた。「よかった」と回答した者は全体の63.0%であった。その理由としては、「規則正しい生活ができた」、「高校などに行けた」、「施設職員などから愛情をもらった」、「貴重な経験になった」、「いろいろな人に出会えた」などの意見が挙げられた。「どちらとも言えない」と回答した者は29.6%で、その理由は、「施設に来たことや家族と離れたことは辛いけれど、それがなかったら出会わなかった人がいると思うと複雑」、「自分の言いたいことが言えなかった」などの意見が見られた。そして、「よくなかった」と回答した者は7.4%で、「同年代を見下すようになった」という理由を挙げている。

以上から、被虐待経験と同様に、施設で生活していたことを単に「よかった」か「よくなかった」ではなく、複雑な感情がそこにはあることが読み取れる。にもかかわらず、「よかった」と判断している者が多い背景には、施設入所中の経験が今の自分にとってプラスに働いているためだと考えられる。今回の調査で返答がもらえなかった者の中には、施設入所経験が今の自分にとってマイナスに働いているとも考えられる。

第三節 インタビュー事例に関する考察

以下の事例 1～4 の考察を行うために、インタビューの逐語記録を先述のカテゴリ、「1. 家族に関する語り」、「2. 学校の教師や学友に関する語り」、「3. 施設の職員や入所児に関する語り」、「4. 進路・就労に関する語り」、「5. 施設生活経験に関する語り」にそれぞれ分類する。その上で、各カテゴリに当てはまるエピソードを時系列（施設入所前、入所中、退所後）に並び替えて、例えば、カテゴリ「○. △△に関する語り」では、「○-1. 施設入所前」・「○-2. 施設入所中」・「○-3. 施設退所後」という具合に分割する。さらに、抽出した語りを再構成し、それぞれに 1-1. ① のように番号を当てはめる。

なお、「下線部」はそれぞれの語りに該当し、「 」は、質問紙の項目や選択肢の内容を指している。また、「 」内の『 』はエピソードの中における人物の発言を表わす。加えて、それぞれの語りの中で補足説明が必要な部分については、筆者が（ ）内に説明を補っている。

第一項 事例 1 A の社会化過程

事例の概要

出生家族構成：父親、母親（行方不明）、A、二男、三男、四男

A の属性：30 歳 男性 未婚 普通科高校卒業

仕事は期間工（H 社。転職前は H 社の子会社である Y 社に勤務）

入所期間は中学 3 年～高校卒業

「入所の経緯」

施設入所前、A の家庭では、「母親がものすごい（中略）借金を作って」しまい、「電気とか、ガスとか止められた」状況にあった。さらに、高校進学を控えていた A は、「高校なんて状況じゃなかった」という理由で自ら施設入所を考えた。同時期に父親から、「お前ら（A と兄弟）あれやでそっち（施設）行け」と言われ、親戚のもとに一時預けられた後に施設入所となった。施設長によると、A はネグレクト事例に当てはまるという。

「1. 家族に関する語り」

「1-1. 施設入所前」

1-1. ① A と父親との関係では、「結構厳しかった（中略）飯食べとる時なんかも箸飛んで来とった」ことがあった。父親の近くにいると、「何か言われる」ために「（父親とは）かかわりたくなかった」ために、「コソコソ（中略）逃げるように生活」をしていた。

1-1. ② 母親は、「厳しくないけど（中略）ごはん以外、全然いませんみたい。いませんっちゅうたらあれやけど、コソコソしとった」という。

1-1. ③ A は「虐待みたいなのは、やっぱあったんちゃうかな」という。

1-1. ④ 施設入所に関して、「親父もこういうとこ（施設に）来とった（中略）。やで、親戚とかもあんまおらんの。行くところこ（施設）しかない（中略）。逃げるように、逃げるようにこっち（施設 E）に来た」という。

「1-2. 施設入所中」

1-2. ① A は施設へ一緒に入所した兄弟とは、小・中高生では「部屋が違う」状況にあり、A が「高校入って 2 番目（二男）が中学入ってこっち（中高生部屋）に来る」ことで初めて関わりを持つ頻度が上がった。さらに、「3 番目（三男）4 番目（四男）なんてどんな生活しとったかそこまで詳しく知とった訳」ではない。

1-2. ② 入所以前に父親が「厳しかった」ことについて、「そんなん（厳しい躰）はよかったと（中略）ここ（施設 E）に来てから思った」と受け止めている。「（厳しい躰が）後に役に立った」という理由は、「ここ（施設 E）におけるやつら箸も持て」ない中で、「そんなん（厳しい躰）がなかったら箸持てやん茶碗持て」ないためである。

1-2. ③ 入所中、父親と面会や外泊（一時帰宅など）をする中で、「何でしゃべるようになったかわらんけど、しゃべとったな。（理由は）特にないんやろな。ほんでもしゃべとった」という。父親は A に対して、「ずいぶん苦しかったちゅう話はしとった」という。父親の言う苦しさの内容は、経済的な面でなく、「子どもがいきなりおらんくなるんやからさ。ほら苦し

い」とAは受け止めていた。

「1-3. 施設退所後」

1-3. ① Aは現在、定期的に父親の家へ行って、「一緒に飯食べたり、話をしたりすることはある」という。

1-3. ② Aは母親について、「死んだるかもしれん（中略）もう15年も前の話やけど、知らんのやわ。生きとるのか死んだるのか知らんの。どこにおるかももちろん知らんし。どこにおるか、生きとるか死んだるかすら知らん。聴きもせんし、探しも」しないという。

1-3. ③ 「（父親は）知つとるかもしれやんけど」、「聴きも」しない。なぜならば、「ここ（施設）に入ってきた連中が何で入ってきたんて聴かんのと同じ」だからという理由と「探しても仕方ない（中略）知ろうが知らまいが、自分で生活し」ているという理由による。

1-3. ④ Aは今後、自分が結婚して子どもを持つことについて、「（願望は）あるよ。（中略）無い方がええかも」しれないと感じている。その理由として、「あーなるんやで、うちの親みたいに、と思うよ。そっくり」だという。それでも、「そうなってみやな（実際に結婚して、子育てをすることにならないと）わからん」としている。

「2. 学校の教師や学友に関する語り」

「2-2. 施設入所中」

2-2. ① 一般的に、施設入所に伴って学校を転校することが普通だが、Aは施設入所後も同じ中学校に通い続けることになった。Aは中学校では「（友達には）ここ（施設E）に来たっつゅうことは隠し」ていた。その理由は「あんま言いたくなかったんやろうな、きっと」という。友達に関して、「よう考えたら（中略）こんなとこ（施設）ある事すら知らん連中やで」という。

2-2. ② Aは高校生になってからは、アルバイトをしたり、高校の同級生と「学校のパソコンでネットサーフィン」をしたり、「帰りに寄り道」をしており、施設へ帰るのはいつも7時前だったという。

2-2. ③ 高校に入ってから、「やっぱ1番（自分が信頼をおいていた先生）はOH先生」だという。さらに、Aは「あの人（OH先生）のおかげで生徒会やらしてもらった」。AはOH教諭との出会いについて、「良かったんちゃうかな、あの人マニアックやし」と感じており、趣味などの共通点については「そんなん無い」と言う。

「2-3. 施設退所後」

2-3. ① Aは高校の友達とは「数カ月に1回とか、年に1回」会い、「たまに家に来る」という。

2-3. ② AはOH教諭との関係については、「何年かに1回会う。個展に行くぐらいやけど」という。

「3. 施設の職員や入所児に関する語り」

「3-2. 施設入所中」

3-2. ① Aは、同じ入所児との関わりについて「やつあたりじゃないけど、(年長児に)殴られたりとかはした」という。それ以外の入所児については「同級生は女の子しかおらんかった (中略) 下(年少児)もあんまない (中略)。基本的に(施設に) おらんからね」という。

3-2. ② Aが最も注意を払っていたのが、「担当(職員)。F先生」だという。F先生については、「一番厳しい (中略)。言うこと聞いとったと思うけどね、多分。1番はF先生、順番つけるなら」という。

3-2. ③ 入所中の他者との関係について、「一匹狼ではあかんしね。きっと、まあ、一匹狼になりたがるんやけど。楽なんやけどね、一人も。あーだこーだ言われることもなかったもんな、きっと、ここ(施設E)におる時って。まずおらんし。全然おらへんし。いない時間が多い」という。

「3-3. 施設退所後」

3-3. ① 当時一緒に入所していた他の入所児との交流については、「全然ない」という。「ここにたまたま来て(会うことがある) (中略)。あとは(施設Eの)祭(で会うことがある)。」

3-3. ② 施設職員との交流については、「しょっちゅう来るでな。ずっとおるんと一緒や」という。

「4. 進路・就労に関する語り」

「4-1. 施設入所前」

4-1. ① Aが自動車関係の仕事に就いたきっかけは、「車ちゅうかF1やね(が好きだった)」ためであり、その影響を与えたのは「親や」という。

「4-2. 施設入所中」

4-2. ① Aは車が好きで、「その頃(高校を選ぶ時期)からH社行くことしか考えてなかった」という。そのために「工業の推薦受けた」けれども合格することができず、普通科のI高校に進学した。その理由として、「ハードル高いとこ行ったら、真ん中に埋もれるか、下に落ちてくか」と考えていたからだという。

4-2. ② 高校時代、Aは学年で「2、3番目くらい」の成績だったが、H社を受けることができず、「寮があるとこじゃないと就職もでき」ないという理由でY社を選択する。

「4-3. 施設退所後」

4-3. ① Aに対して、「この人がいたからここまでやってこれた」と言える人物がいたかを尋ねると、「どうやろな。やっぱあれっちゃう。H社がF1やっとして、当時は速くってみたいな。で、あこがれて、車が好きでこうなるとるんちゃう？きっと」という。その上で挫折の経験を尋ねると、「あるよ。折れ折れや」という。Y社に勤務している頃を振り返って、「何べん電着槽(車の塗装のために約300Vの電流を流している水槽)の中に飛び込もう思ったかね。(中略)何やってもうまくいきませんみたいな。やんやん言われるし」という。この危機をどのように乗り切ったかを尋ねると、Aは「(職員と) 話はせん。せんけど、ここ(施設に)来て、遊んで、はあ、がんばろって思ってた」という。さらに、「(施設は) 家みたいなもんやでね。ここで働いてる人はもちろんそんなこと思わんやろうけどさ。(自分は)遊びに来とるだけやからね。(職員は) なんなんやろなって思っとるかもしれやんけど。施設S(Aが入所していた施設が24年度、新たに創ったもう一つの施設) も行くけど、やっぱ違うかな」という。

「5. 施設生活経験に関する語り」

「5-2. 施設入所中」

5-2. ① Aは入所当時を振り返って、「そんなとこ(親戚の所)、子ども4人も行くわけにはいかず」、「このころ(入所当時) はほんまにここ(施設E) しかないって思っ」いたという。

「5-3. 施設退所後」

5-3. ① Aは施設生活を振り返って、「こういうところ(施設) に来たんが正解やったかどうかはわからんけどね。自分は正解やと思っとるけど、うちの弟らは正解じゃないと思っとるかもしれん」という。Aが施設生活をよかったと感じている理由は、「やっぱ普通に生活できとるのがあれっちゃう、きっと(よかった)」という。

5-3. ② Aは退所後も「休みの日はほとんどここ(施設E) におる」という。そのことについて、「この生活もどうなんちゅう気もするんやけどね。(中略) こんなに来る必要はもちろん無いわけで。(中略) 全く来やんちゅうのはさみしいんやろうけどさ。全く来やん人間の方が多いんやろうけどさ(中略) ここまで来る必要ないやん」という。

「6. おもちゃ屋に関する語り」

「6-1. 施設入所前」

6-1. ① Aは現在でも交流があるおもちゃ屋について「ここ（施設E）に来る前から通った」。

「6-2. 施設入所中」

6-2. ① Aは、休みの日は殆どおもちゃ屋に通っており、「それはそれで甘い汁も吸った」
というようにアルバイトのようなこともしていた。

「6-3. 施設退所後」

筆者がAにインタビューをする中で、おもちゃ屋からAに電話がかかってきた。

6-3. ① Aはおもちゃ屋からの連絡について、「あんまいい電話じゃないやろね。えらいんやわほんまに。ここ（施設E）における時から行つとるからね。だから、ここ（施設E）におけるか、あっち（おもちゃ屋）におけるかどっちかやわ。休みの日は、今でも。（中略）今日も電話の内容いかんでは、この後行かなあかんかもしれやんしね。なんかわからんけど」という。おもちゃ屋の店主について、「むっちゃおばちゃんなんやわ。おばあちゃん。70、もうちよい。もう最近ボケてきたしね。もうあの店もそんなもたない。周りもようやらん」といい、「息子はおるけど、何もしない。忙しいんでって言うて。こっちも忙しいんやけどさ。ほんまに、いらつとずる時もあるけどね。」という。Aはさらに「ああいう店もなくしたらあかんのやけどね、ほんまは。ああいう個人の店。ほんとになくしたらあかん」という。

「施設入所前 ～危機的な家庭状況にありながらAの支えとなったおもちゃ屋と将来の夢～」

Aの父親は共に児童養護施設で育った経験を持っていた。家族は母親が作った借金によって困窮していた。父親はAに対して厳しく、Aは「逃げるように生活」していた。母親は食事の時以外はほとんどいなかったという。このようにして、Aにとっての家は「コソコソ」していなければならない場所であった。しかし、休みの日などはおもちゃ屋へ「しょっちゅう行つた」。おもちゃ屋にいることはAにとって「コソコソ」する必要がない場所として在り、Aの拠り所となっていたと考えられる。

Aが中学3年生の時に母親が失踪し、いよいよ父親だけでは子ども4人を育てることができなくなった。父親自身が施設出身者ということもあって、頼る親戚がいなかったために、父親もAたち兄弟を施設に入れるしかないと考えていた。A自身、父親の影響で「車（中略）F1」

が好きだったために自動車関係企業のH社を目指して工業高校へ行きたいと考えていた。施設に行くしかないという状況と、Aの進学希望が重なって施設入所となった。A自身が具体的な将来の夢を持って、工業高校への強い希望を持っていたことがA自身の拠り所であったと考えられる。

「施設入所中 ～施設経験を通して変化した父親への見方と恩師との出会い～」

Aは施設へ「逃げるように」して来たが、施設でも上級生の入所児から暴力を受けることもあった。しかし、自分が高校へ行くには「ここ（施設）しかない」と考えて生活を送っていた。

Aは施設入所後も依然と同じ中学校へ通っていたが、友達には自分が施設に来たことを隠していた。「こんなところ（施設）あることすら知らん」友達に対して、「あんま言いたくなかった」という。Aは友達にとって得体の知れない施設に自分が入所することで元の友達関係が崩れると恐れたとも考えられる。

Aは予めから希望していた工業高校の推薦を受けるが、不合格になってしまう。代わりに、「ハードル高いところ行ったら、真ん中に埋もれるか、下に落ちてくか」と考えて、普通科高校に進学する。高校生になったAは平日の学校の帰りに友達と寄り道をし、休日はおもちゃ屋に通っていたため、基本的に施設にいなかった。そのため、同じ施設内に弟たちがいながら、彼らの様子については殆ど把握していなかった。

Aは、施設生活の中で他の入所児の食事のマナーを見て初めて、父親の自分に対する厳しさを「よかった」と受け止めた。また、父親との面会や外泊を繰り返す中で、いつしか、父親と話をできるようになっていった。さらに、父親が子どもを手放して苦しい思いをしていることを理解するようになった。家で一緒に暮らしていた頃は殆ど話すことがなく、一方的に厳しくされていた父親に対する捉え方が変わったといえる。

高校では自身が信頼を置いていたOH教諭と出会い、OH教諭の導きで生徒会の役員をこなすなどの経験をした。OH教諭は今回のAの語りの中では唯一、A自身が信頼できると考えている人物である。AはOH教諭との出会いを「よかった」と捉えており、OHと出会ってことによってA自身の高校生活が充実することになったと考えられる。

このような他者関係の中で、一人でいることが楽で「一匹狼」になりたがる自分がいながら、Aは他者と関わることの重要性を理解し、「一匹狼ではあかん」と受け止めるようになったと考えられる。

「施設退所後 ～A が拠り所とする「家」である児童養護施設とおもちゃ屋～」

A は施設を退所してから、当時一緒に生活していた退所者とは連絡をとって会うことはなく、偶然施設の行事などで会うくらいだという。元々、施設の中で他の入所児と関わるよりも、学校の同級生と遊んだり、おもちゃ屋に行ったりすることが日常であったために現在もそのような状況にあると考えられる。そのために、退所者に比べて、学校の友達や教師とは現在でも定期的に交流することがある。

A は施設で生活してきたことについては、自分の家族と比較して「普通に生活」できたために「正解」だったと考えている。高校へ進学するために安定した生活を欲していた A にとって施設は、A が必要としていた環境を提供していたと考えられる。しかし、A は今の自分を形作っているものとして具体的な人物を挙げるのではなく、「車が好き」で「H 社が F1 を」やっていたということを挙げる。A は Y 社に勤務していた時期に自殺することを考えた時期があったが、施設に来て悩みを打ち明けることはしないが、入所児たちと遊んで気持ちをリセットしていたという。なぜならば、施設は A にとって「家」であり、心労を癒すには最適であったからだと考えられる。ただし、現在の施設 E には A が入所していた当時の職員は殆どいないにも関わらず、A が施設 E を「家」と位置付け拠り所としている背景には、そこでの職員や入所児との交流以上に、物理的な「家 (house)」が A にとって支えとなり働いていることが考えられる。

A は、施設入所以前から通っているおもちゃ屋に今でも通っている。それは単に客としてではなく、高齢になる店主の手伝いをしに行っているのである。店主が身内に店の手伝わせるのではなく、自分に手伝いをさせていることについて A は「いらっとする時」があるという。それでも、現在に至るまでずっと関わってきた背景には、「ああいう個人の店」を「なくしたらあかん」という気持ちがあり、なによりも、子どもの頃から通い詰めていた一つの拠り所を残していきたいという気持ちがあると考えられる。

A は将来、自分が家庭を持つことを望んではいるが、同時に、自分も父親のようになるだとうという不安を抱えている。しかし、実際にやってみないとわからないと考えており、決して父親の自分に対する影響について否定的に捉えてはいないと考えられる。

「A の社会化過程」

以上から、A は元の家族で「逃げるような生活」をしており、それゆえに両親が A にとっての「意味ある他者」であったとは考えにくい。確かに、父親の厳しい躰によって A はマナーを身につけ、他の入所児と自分を比べることで、父親のしていた事を肯定的に捉えるようになった。その意味では、A は父親の自分に対する態度を基準にして行動を規制しており、父親が A

にとつての「意味ある他者」であつたと言えるかもしれないが、それは標準的な親子関係ではなかつた。

しかし、施設入所をきっかけに、Aは父親と距離をとれるようになり、OH教諭のような信頼できる、自分を認めてくれる人物、すなわち「意味ある他者」を獲得していく中で、父親のことを理解するようになった。家では関わることを避けていた父親と話をするようになり、現在でも定期的に父親のもとを訪ねている。

このようにAは、施設入所をきっかけに新たな「意味ある他者」を獲得し、幼い頃からの夢を一貫して持ち続け、父親の影響で目指すことになった自動車関連の仕事に就いており、結果的に父親の持つ枠組に準拠したと考えられる。

第二項 事例2 Bの社会化過程

事例の概要

出生家族構成：父親、母親（離婚、別居）、B、長男

Bの属性：22歳 女性 未婚 4年制大学卒業

仕事は管理栄養士（老人ホーム）

入所期間は小学2年～高校卒業

「入所の経緯」

施設入所前、母親が「心の病気になってしまつて」、「育児できなく」なり、父親も「仕事が忙しく」、Bが施設入所する時に離婚する。父親だけでは育てられず施設入所となる。

「1. 家族に関する語り」

「1-1. 施設入所前」

1-1. ① Bは両親の関係について、「(母親が) よくお父さんとケンカして、なんか、泣いてるのも覚えてますし。 (中略) なんか悩んでるんやろなって、子どもなりに (思っていました) という。

「1-2. 施設入所中」

1-2. ① Bは施設入所に関して、「理由は、お母さんが病気ってことを知らされて（中略）長くこういう施設にいるとは思って」いなかった。父親が「一人で施設決めて（中略）あたしらを入れたみたい」と考えており、入所について「わけわからず、何も疑問も持たず」に入所した。「またすぐに迎えに行くみたいな」ことを言われたが、「それが面会とか外泊の事なのか」ははっきりしていなかった。入所中に、父親から入所の期限を言われることもなく、母親は「私が物心ついたころから病気になって」おり、「病気が治るかも」わからず、「だんだん、何年もいる内に18まで（施設に）おるんやな」と自分で解釈したという。

1-2. ② Bは自分の入所理由について、「職員の先生も知ってる」と考えながらも、「ほんとのこと知るのもなんか、ちょっと怖いなってのもあって（母親の病気や父親が一人で育てられないという理由以外に別の理由があるのかもしれない）」、「聞きにくい」状況にあったという。

1-2. ③ Bは一緒に入所した弟との関わりについて、「施設で男子と女子って分かれてるんで。まあ、毎日会うんですけど、そんな家のことで深く話すってことはなかった」といい、「外泊した時とか、そういう時にやっぱきょうだいでって感じで、改めて思った」という。

1-2. ④ Bは入所中の家族との交流について、「月一回ぐらいに外出とか外泊とかあって。（中略）お盆の期間は長めに外泊したり。ほとんどお父さんの方でしたね。お母さんは面会って形で、おばあちゃんと一緒に来て」という。父親との交流について、「やっぱ帰る時は、寂しかったです。外泊から帰る時（中略）、車で送ってってもらんですけど、なんかまだ帰りたくないから『施設のまわり1周しようか』って（父親が言って）（中略）寂しかったですね、帰る時は」と振り返る。

1-2. ⑤ Bは入所中の母親との交流について手紙を例に挙げて、「やっぱり、子育てとか、お母さんの父親が亡くなったのとか色々重なって、それで病気になって。（中略）手紙とか貰うんですけど、字とかがグチャグチャってなったり、今までのお母さんと違うなってのは（感じてました）」という。また、面会について、「病気の関係で、人とコミュニケーションとれないみたいで、子どもっぽくなって意見が通らないと怒ったり、そういう病気だったんで、（中略）普通のお母さんとは接し方が違いましたね。やっぱ、妹見るような感じで」という。

「1-3. 施設退所後」

1-3. ① Bは「家で過ごす期間が短かった」ために、「家族と、親と暮らそうかなと思って」、施設退所後に父親や弟と一緒に生活し始めたが、「やっぱ家での生活になかなか慣れなかった」という。また、祖父母宅で暮らしている母親のもとに「たまに寄ったりして」いる。

1-3. ② Bは、施設退所後に祖母から聞いた自分の入所理由について、「お母さんの病気あつ

て、お父さんが全部決めたってのとか、(中略) まだ知らない事とかあるかもしれないんですけど、なんかいろいろ聞いて。まあ、大人だったんでそんな動揺とかはなくて。もう過去のことと思って」いたという。

1-3. ③ Bに親からの影響について尋ねると、「やっぱ遺伝とかもあるんやろなって思ったり、やっぱそういう、育児とお父さんが亡くなったのが重なったり、ほんとなんか、たまたまの出来事が重なってのことなので、これからも何があるかわかんない」と思うことがあるという。

1-3. ④ Bは将来結婚して、「(自分の子どもは) 欲しい」という。しかし、「離婚とかあったんで、自分の親が。自分はそうならんといいなってのがあったり (中略) 子どももやっぱ辛い思いするから、慎重になったりします」という。

「2. 学校の教師や学友に関する語り」

「2-2. 施設入所中」

2-2. ① Aは施設入所に伴い、小学校を転校することになったが、「たまたま、転校した学校に、前いた小学校の同級生」がおり、「施設の子が小学校に皆いるんで、(中略) 生徒の子ども、この子は学園(施設F)の子ってわかって」いたために、特に問題はなかったという。

2-2. ② 中学校に上がると、複数の小学校が集まるために「学園(施設F)にいる事を知らない子もいたり、小学校からそのまま上がるんで、そういう子が、私がいなとこで(Bが施設にいることを)しゃべって」困ったことがあったという。また、「嫌なことは、授業参観で、(中略) 施設の先生が来るじゃないですか。あれがお母さん?みたいな言われた時に、なんか答えに困ったりして、若い先生とか行くと、お母さん若いな一つ言われたり。いや、違うんですよみたいな。それでもう、ちょっと言いにくいのがありました」という。

2-2. ③ 高校に入ると、「(施設にいることを) 聞かれずにもう済んでしまったり」して、「高校から大学一緒の友達も、高校卒業したくらいに(施設にいたことを)言って、すごいびっくりして」いたという。

2-2. ④ 学校の教員との関わりについては、「担任の先生とは、そういう進路の面接とか、話すときにこういうことしたいですみたいな。クラスの皆もやってること(と同じです)」だけだという。

「2-3. 施設退所後」

2-3. ① 施設を退所してからは「高校一緒に大学も一緒の子がいて、その子はすごい、頻繁に会います」という。

「3. 施設の職員や入所児に関する語り」

「3-2. 施設入所中」

3-2. ① 施設での生活が始まって、「戸惑ったのは、(中略) 知らない人たちとの共同生活が始まって、(中略) もともと人見知りな上に、ほんと知らない人と24時間一緒にいるって感じだったので、なんか心を開けなかったっていうのと、(中略) 子ども同士では打ち解けたんですけど、職員さんとか大人の人は、ちょっと、猫被ったり。はい、あんまりなんか心開いて話とか、怒られてもなんか全然、もう黙っていたり、ありましたね。なかなか、ほんとの自分出せないみたいな」。しかし、「もうほんと小学校高学年とか、分園に入ったぐらいから、しゃべるようになって」、「(分園に入ると) しゃべる人も特定になってくるし、集団だとほんとになんか、何人もいる間の1人って感じで、あんま自分に目向けられてないな〜とか。もう、少人数の生活の方が、一緒に生活してる人と、なんか、すごい関係深くなったり、心開いて話せたり」したという。

3-2. ② 自分を出せなかったという理由について、「今考えると、(中略) 職員さんだけの日誌とかに、自分のことを、今日はこの子こうだったみたいな日誌があるんですけど、そういうのが、自分見られてるって感じが、ちょっと怖かったっていうかなんか、なんか気になって」いたという。しかし、「施設生活がずっと長いことだったんで、慣れたっていうか吹切れたのかもしれない」という理由で「そんなに意識はしなく(中略) なりましたね」という。

3-2. ③ 特定の職員に注意を払っていたわけではなく、「いろんな先生と話して、共感できるところは、参考にして」いたという。

3-2. ④ 同じ入所児との関わりについて、「集団生活してると、ボスの存在の女の子が出てくるといふ。「小学校時代は、グループが出来て、(中略) 私と2つ上くらいのボスみたいな子と、あと1こ上の女の子、ずっと3人で行動してたんですけど、そのボスの人がやっぱり怖くて、いっぱいなんか、ケンカとかもしました」といふ。年少児との関わりについては、「もう、楽しく遊んで、(中略) 面倒見るのも勉強になったし(中略) そんなに苦ではなかったです」といふ。

3-2. ⑤ 施設職員との関わりについては、「(調理員からは) 結構優しくしてもらって、なんか、(スポーツ少年団の) 全体集合写真撮って、(中略) テレホンカードにしてくれたり、こういうおっきい掛けるやつ(額縁に写真を入れたもの) にしたり、そういうのをなんか、ただでいただいたり、ほんと優しく配慮してもらったり」しましたという。

「3-3. 施設退所後」

3-3. ① 同じ入所児との交流は、「最近ありますね。夏とか。同期の、もう入った時くらい一

緒やった子でもう、子どもいる子とかもいて。子ども連れて遊んだり、あと、一緒にその施設に遊びに行ったり」するという。

3-3. ② 施設職員との交流は、「最近は職員の先生とごはん一回、大学卒業して働く前に行ったりしましたね。けっこう若い人なんで、私が高校の時 25 ぐらいの人で、で、そう人たちに親代わりに見てもらって」いたが、「でたら（退所したら）もう友達みたいな感じ」だという。

「4. 進路・就労に関する語り」

「4-2. 施設入所中」

4-2. ① B は「いつから（覚えていないけれど）なんか、大学は行きたいと思って、で、お父さんも賛成してくれて、で、その行く大学がきまらなくて。何を勉強したいかっていうので結構悩みました」という。具体的な進路は決まっていなかったけれど、大学進学を考えて「進学を、行けるところを選びました」という。

4-2. ② 施設生活を送る中で、「調理場とか見てたり、どうやって毎日献立たててるんやろみたいなのが気になったのもありますし、なんか、あんまり自分でごはんつくる機会がなかったので、もう作ってもらって、で、ちょっとやばいなど、で、栄養学を（勉強したいと思った）、（中略）仕事じゃなくても日常生活でも使えるんで、それで興味を持って」という。具体的には、「栄養士の男の先生だったんですけど、栄養士兼指導職員さんでやってる方がいて、で、その男の先生とどうやって立てとんのって、栄養士の仕事聞いたり」していたという。

「4-3. 施設退所後」

4-3. ① 現在は仕事を始めて一年目で、「仕事を覚えるのに必死」だという。同僚については、「年上の方ばかりで、（中略）新人を採るのが6年ぶりとか言って、（中略）同僚の人も付き合いが長いんで、もうなんか、なんていうの、その絆みたいな。そこに入ったんで、ちょっと気遣ったり、仲間に入れない時があります」という。

「5. 施設生活経験に関する語り」

「5-2. 施設入所中」

5-2. ① 施設に入ったばかりの頃の施設の印象は、「人がいっぱいで（中略）幼稚園ってうか、小学校みたいなイメージで、でまあ、初めに先生と話して、で、この施設にはこういう子がいるよとか、歳近い子いるよとかってそういう話で紹介されて（中略）。なんか、子どもが多くて、ガヤガヤした感じ」だったという。

「5-3. 施設退所後」

5-3. ① Bに対して、「ここまでこの人がいたからやってこれた」という人物がいるかを尋ねると、「卒園してから、この人ってのはいないんですけど、卒園してからいろいろ考えて、やっぱ、なんか、施設に入ってよかったな」という。その理由として、「施設に入ってる人の気持ちがちょっとわかるようになったし、なんか、考え方っていうか、やっぱ、辛い、この家族と離れるってのが辛いことですけど、(中略)今はすごい幸せって思えるんで、そういう自分を成長させる訓練みたいな。(中略)自分、なんでこんな家庭に生まれたんやろって思うこともあったんですけど、そんな、今はそういう悲観的にならずに、これでよかったんやって思えるようになりました」という。

「施設入所前 ～両親の不仲と母親の発病～」

Bの母親は、Bが物心ついたころから病気になっており、病因は子育ての悩みや母自身の父親が死亡したことなどが重なったためだとBは理解している。また、家庭では両親がよくケンカをしており、Bは母親が泣いているところを見ており、子どもなりに母親が何かに悩んでいると感じていた。

施設入所前の家族の様子については、B自身にほとんど記憶がなく、これらのエピソードに限られた。施設入所のきっかけは母親の病気と父親だけでは育児困難によるものだったが、B自身が両親の不仲を目撃していることは軽視できないと考えられる。

「施設入所中 ～Bを支えた父親との交流と将来の夢を持つきっかけとなった施設生活～」

Bは、入所当時、自分が施設で生活していくことに何も疑問を感じておらず、母親の病気が治るまでは施設で生活するという説明をされており、すぐに迎えにきてくれると考えていた。しかし、入所中に会っていた母親は「今までのお母さんとは違う」とBは感じ、母親が書いた手紙の文が乱雑になっていたり、「子どもっぽくなって、意見が通らないと怒ったり」する病気だったために、Bは母親を「妹を見るよう」だと感じていた。施設で何年も生活し、病気の母親を見る中で、Bは次第に18歳まで自分は施設で生活することになるのだと解釈していった。しかし、自分が施設に入った理由は他にあるかもしれないと考え、詳しい理由を知っている施設職員に聞こうとしたが、「ほんとのことを知るのもなんか、ちょっと怖い」と考えて聞くのをやめたという。このように、自身の入所理由に対する疑問や、病気の母親と関わる中で、家に帰ることが出来ず施設で生活していくしかないという状況の中で葛藤を抱えていたと考えられ

る。Bが施設生活の中で葛藤を抱える中でも、父親との交流はBにとっての拠り所となったと考えられる。子どもを施設に預けることになった父親ではあるが、外泊の際にはBたちと少しでも長い時間を一緒に過ごしたいがために施設へBたちを送る際に遠回りをしていた。父親もBも外泊の終わりにはお互いに寂しいと感じており、親子としての繋がりを確認するきっかけにもなったと考えられる。

小学校では、転校する前の同級生がおり、施設入所児がいることが当然の環境であったために、すぐに馴染めた。しかし、中学校に上がると、他の小学校からも生徒が集まる為に、施設のことを知らない同級生が増え、小学校の同級生から自分が施設にいることが伝わって困ることがあったり、授業参観で若い施設職員が来ると周りの生徒から不思議に思われたりすることがあり、自分が施設にいることを周りに言いにくかった。高校に上がると、施設にいることを知られることや、自分から話すこともなく過ごしていた。

施設での生活が始まった頃は、Bは自身の人見知りな性格と、見ず知らずの者たちとの集団生活によって緊張していた。他の入所児とは徐々に打ち解けることになったが、職員が入所児たちの様子を記録していることも知って、職員に対しては「心開いて話」ができず、「ほんとの自分が出せない」状況にあった。また、自分は大勢の入所児の中の1人であって、職員からあまり「自分に目を向けられてない」と感じていた。しかし、施設での生活が長くなり、記録をとられていることは気にならなくなり、分園での小規模生活が始まると、限られた人数の中で関わりが深くなり、「心開いて話」ができるようになった。集団生活の中では、入所児の中に「ボスの存在」が現れ、なんどもケンカをしていた。自分よりも年下の入所児とは、面倒をみることで自分の勉強になったと受け止めている。

Bは施設の調理員や栄養士との関わりを通じて、将来の夢を持つようになる。小学校のスポーツ少年団の手伝いをしていた調理員には、様々な面で「優しく配慮してもらい」、Bは施設の調理場を見て、献立の立て方や調理に対して興味を持つようになった。さらに、栄養士兼児童指導員だった職員と関わる中で具体的な献立の立て方や栄養士の仕事について教えてもらっていた。このような経験をする中で、Bは調理や栄養学に対する関心を深め、退所後に父親と生活することを考えていたBは、家に帰ってからの炊事などでも役に立つと考えて管理栄養士になることを目指すことになった。

「施設退所後 ～今が幸せだからこそ肯定的に受け止められる自分の経験～」

施設を退所してからは、それまで「家で過ごす時間が短かった」ために「家族と暮らそう」と思い、現在に至るまで父親と弟と3人で生活している。大学在学中もアパートなどを借りる

こともなく自宅から通っていた。大学を卒業して管理栄養士となったBは現在、老人ホームの調理場で働いている。まだ1年目で、管理栄養士としての仕事はしておらず、調理員に交じって調理をしている。今はまだ手探りの状態で仕事をしている。職場から自宅までの間に母親が住んでいる祖父母宅があるために、仕事帰りに様子を見に行くことある。高校と大学で一緒だった友達とは頻繁に会ったり、施設の退所者や職員とは定期的に会ったりと、施設入所中に獲得した対人関係を現在も維持している。施設にいた頃は自分の「親代わり」をしてきていた職員とは、今となっては「友達みたいな感じ」だという。Bは施設を退所してから現在まで、充実した生活を送ることができていると考えられる。

Bは退所後に祖母から自分の入所理由について改めて話を聞いたが、自分には「まだ知らないこととかあるかもしれない」と感じながら、「過去のこと」だと考えて気にしていない。しかし、母親の病気に関して遺伝することを考えたり、自分自身にも何が起こるかわからないと考えている。将来、自分が家族を持つことについても、両親が離婚していることもあって、葛藤を抱えている。これまでに、「なんでこんな家庭に生まれた」のかと悩んだこともあり、自分が施設にいたことで家族と離れる辛さを経験したことは事実である。しかし、同時に、同じ苦しみを持つ施設入所経験者の気持ちを理解できるようになり、現在の自分は幸せと感じており、施設での生活は自分を成長させる訓練であったと受け止めている。様々な葛藤を抱えながら、「これでよかったんやって思えるように」なり、現在は自分の人生を肯定的に受け止めることができている。

「Bの社会化過程」

以上から、Bは家族と離れて施設で生活をする中で、入所に至る背景の家族関係に対して葛藤を持っていた。見ず知らずの他人との集団生活を始めるなかで緊張を覚えたり、「ほんとの自分」が出せないでいた。しかし、父親が「一人で決めて」自分たちを施設に入れたと受け止めていたBだが、父親が自分のことを考えてくれていると実感できる経験をしてきた。この経験によってBと父親は標準的な親子関係を再形成し、父親がBにとっての「意味ある他者」となったと考えられる。また、調理員から優しく対応してもらい、分園に入る頃には「ほんとの自分」を出せていた。父親を「意味ある他者」として獲得し直すことができたことによって、標準的な他者関係に通じる親子関係という枠組を得る事ができた。さらに、調理員や栄養士から、調理や栄養に携わる職業人としての枠組を内面化することができたと考えられる。

第三項 事例3 Cの社会化過程

事例の概要

出生家族構成：父親（離婚、別居）、母親、C、母方祖父母

Cの属性：35歳 男性 既婚（C、妻、長女） 4年制大学卒業

仕事は学習塾経営（以前は大手学習塾に勤務していた）

入所期間は中学2年～高校卒業

「入所の経緯」

Cが2歳の時に両親が離婚し、Cは母親と母方祖父母と一緒に暮らす。母親が統合失調症で、祖母が死亡、祖父が病気になった。「家庭にいられる筈もないことは中学生の目にも明らか」であった状況に、「叔父が動いてくれた（児相に掛け合ってくれた）」ことで施設入所となる。

「1. 家族に関する語り」

「1-1. 施設入所前」

1-1. ① Cは幼い頃の記憶について、「トンネルっていうか（中略）そんなところがあつて。（中略）真っ暗な中で、で、トンネルの向こう側、（中略）お父さん、お母さんがいてね。で、『どっちに行くんや？』って聞かれて、で、小っちゃい自分は『お母さんの方へ行く』って（言った）。っていうふうに、まあ、お母さんについて行った。（中略）結局母親方に引きとられて、ということになったん。そんな記憶がね、なんかあつて。うん、でも、それが現実やとずっと信じてた」という。

1-1. ② Cは入所直前の家族の状況について、「祖母が死んで、（中略）母親が統合失調症で、もうそんな時もないがいやったからね。（母親が）隣の家に殴り込みに行くとかね、被害妄想でね。（中略）被害妄想でなんか、近所に殴りこんで（中略）祖父も（中略）脳溢血かなんかで倒れた時に、（中略）何しゃべってるかわからん（中略）足も引きずって歩くようになって、（中略）どうにもならんやろって、そんな感じでしたね」という。

1-1. ③ Cは質問紙で、「祖母」から「虐待を受けていたと思う」と回答している。被虐待経験について「殴られたとかそういう記憶はないですね。けれども、まあ、しつけがきつすぎる、（中略）主に祖母ですね。その、自分の気に入るもの以外は認めないみたいだね。（中略）仏教やってたけども、それ、押むのも強制。会合に出ること、集まりに出ることも強制とかね。まあ、いろいろな強制があつて。（中略）それを一般的にね、うーん、虐待やとは多分認めない」というか、思わなくって、まあ、例えば、食べるものに、お菓子は食品添加物が入ってるからそ

んなん食べたらかんとかね。そういうのが虐待として見なされるとは思わないんですけど。でもま、実際に、心に色々影響与えてることではあるから」という。

1-1. ④ Cは母親について、「(統合失調症が) 発症したのがいつかとかはわからないですね」といい、「父親の言い分は、気が付いたら (母親が) おかしくなっていた」で、「母親の言い分は、なんかいろいろ嫌やったとか、暴力があったのかなかったのかとか」だという。しかし、C自身は「どこまでホントかわからない」と思っており、その理由については、「(母親が) 統合失調症ってのもあるし、(中略) 母親自身も押さえつけられて育ってるから、自己主張とか多分、しなかったはずですね。いい子やったと聞かされてますけど、そのいい子ってどうなんやってね。(中略) 母親も必死に耐えて耐えてみたいなことは言うてたけども、その、自分の思ってることをあんまり口にしてなかったようですね」という。

1-1. ⑤ Cは祖母からの抑えつけに関わって、母親の自分への態度について、「抑えつけではなかったけれども、(中略) 統合失調症からかなんか知らんけど、突然機嫌が悪くなるとかね。さっきまでニコニコしてたのに、次の瞬間、『早く勉強しなさい！早く宿題しなさい！』(と怒鳴る)。(中略) そういうことあるとね、ビビるといとか、信じられなくなるというか、ね。まあ、(祖母の抑えつけとは) 形は違いますね」という。そのため、「母親には話す気にもならなかった。(中略) なんかあつきらかにおかしいこと (Cが悪いことをしても) でも、『あんたは悪くない』って。そんなん聞くとね、もう、話したくなくなった」という。

「1-2. 施設入所中」

1-2. ① Cに対して家庭復帰を望んだことがあるかを尋ねると、「戻ろうとも思わない。戻るという選択肢なんて思いつきもしなかった」という。

「1-3. 施設退所後」

1-3. ① 質問紙でCは現在も親と関わりを持っていることについて、「道徳上の義務行為」と表現している。その内容について尋ねると、「道徳上っていうかね、僕もクリスチャンでね。神を信じてる身なんでね。親は、親孝行しない者はいかんうんぬんってのがある訳ですよ。(中略) 関わらんで済むならそれが一番楽なんだけどなーって。でもそういうのはよくないよなー、うーん。でもなー、いろいろ変化もあるよーやし、なんかいい兆しもあるようやし、まあ、嫌、嫌やけども、本音を言ったら嫌やけども、でも、可哀そうやしねーって。母親も父親も可哀そうやし寂しいやろうしねーって。いろいろ複雑」という。

「2. 学校の教師や学友に関する語り」

「2-2. 施設入所中」

2-2. ① Cは中学生の頃について、「学校では呼ばれるたびに怒られてる、そんな印象やね」という。具体的には、教師から「怒られて、殴られて。『お前なあ、授業中発表して、点も取れるけど、宿題出さなあかんぞって』（と言われていた）」という。

2-2. ② Cは質問紙で、自分のことを理解してくれていた人物として「担任の先生」を挙げている。その理由について尋ねると、「高校3年生時の担任はねえ、まあ、なんか理解示してくれはって。（中略）話しぶりからそういうふうに感じとってたんかなあ。（中略）自分の苦勞話もしながら、まあ、大丈夫、頑張れるよみたいな、ね。『俺も家が貧乏やったけども（中略）働きながら大学行きながら家に仕送りしてた、まあなんとかなるよ』って。まあ、そう言ってくれたN先生かな」という。

「2-3. 施設退所後」

2-3. ① Cは施設退所後、4年制大学に進学するが、その当時のことについて、「ギリギリで入って、周りの連中は賢いやつばかりでね（中略）。ほんで僕も、燃え尽きみたいな感じ」だったという。質問紙では、施設退所後に頼れる人がいなかったと回答していたため、その点について尋ねると、自身の燃え尽き経験と関わって、「別に頼ろうとも思わなかった。思わなかったというか、そういう選択肢がなかったというか。まあ、だから、まともな家に生まれた連中がうらやましいなっていうのは何べんも思いましたね」という。

2-3. ② Cは大学時代の危機について、「もう大学も途中で、これもうあかん、やめようかなって時に人が、まあ、僕からしたらその、ね、神を信じるようになったってのもあるけど。そういうタイミングで人が贈られるっていう、そんな感じはありますね。大学で燃え尽きて、もう嫌やって、もうやめよう、やめた方がいい、（勉強に）ついていってもって時もね（人が贈られる）」という。具体的には、「大学で（中略）燃え尽き症候群みたいで（中略）ついて行かれへんわって時も、あるバイト先の先輩がね、夢を熱く語るような人（中略）そんな人に感化されて、俺ももう1回頑張ってみようってね。そうやって立ち直ったってのもあるし」という。

「3. 施設の職員や入所児に関する語り」

「3-2. 施設入所中」

3-2. ① 当時、入所児同士でのいじめなどがなかったかを尋ねると、「僕の知る限りは、そういうのはなかった（中略）ただ僕は、あまり輪の中に入っていかなかったけれども（中略）。（中略）女の子は知らんけど、そんな（中略）嫌な雰囲気感じたことは（なかった）」という。

3-2. ② 進学を希望していたCにとって、施設生活の中で勉強することができていたかを尋ねると、「うるさいのはあったけれども、ただ、自分が神経質になってたから、余計にうるさく感じただけで。いま思ってみれば、多分気遣ってくれてたんやろうな一って。その、まわりの子が。(中略) うるさくすると(Cに) 怒られるから。(中略) そんなんで気がついてくれてたんかな」という。

3-2. ③ Cは、自分と他の入所児とを比べて考えていたことについて、「これはあんまりしゃべりたくないというか、なかったことにしたいけども。もう、毎日が修学旅行状態、まあ、楽しくやってんですわ。まあ、よくも悪くも。ね、毎日遊んで、遊んで、夜も遊んで、ゲームボーイ(中略) なんかしたりとかしてね。『俺はあんなふうにはならん』とか言うてね。(中略) 蔑みながらね。あんなやつらみたいになるかみたい感じでやってたところはある」という。さらに、「あんなふうになりたくない」という理由について尋ねると、「そんな恥ずかしいこと言いたくない。まあ、モチベーションには、やっぱ二つあると思ってね。頑張りたいていいうなんか希望、ハッピーな頑張り方と、競争に勝ちたいとかね、自分の方が優位に立ちたいとか、そういうモチベーションもあって。僕はどちらかというそっち(競争に勝ちたい、自分の方が優位に立ちたい方) やったって思うんですよ。(中略) 両方あったけど、うん、だからそう(あんなふうになりたくないと思っっていた) なんじゃないんですか」という。

3-2. ④ Cは施設職員との関わりについて、質問紙では「話を聞いてくれる方ばかりで心の支えになりました」としておきながら、信頼できる人物については「いなかった」と回答している。その理由について質問紙では、「職員の存在は有難かったが、誰かを信頼するという感じではなかった。育った家庭環境を考えると信頼できる人はおらず誰かを信頼するという考えが育たなかったと思われる」と回答している。その理由については、「こんな話したらあんまよくないんやけども、だから、誰が突然いなくなっても、まあ、そういうこともあるんじゃないみたいだね。(中略) 明日誰か敵になってもまあ、そういうこともあるんじゃないみたいだね。そういうのは、今もあるねえ」という。さらに、「話聞いてくれるのは嬉しかったし、ま、楽しい時間やったと思うけれども、そういう信頼みたいなのは、まあ、今もないね」という。

「4. 進路・就労に関する語り」

「4-1. 施設入所前」

4-1. ① Cは施設に入所する前に「小学校5年生から中学校1年生」の間、「塾に通わせてもらって」いた。その塾の近くにはCが入所していた施設とは別の施設があり、その施設の入所児もCと同じ塾に通っていた。その施設入所児が「(塾の) 休み時間とか外へ出てって、通る子たちにケンカ売るんさ」という。

「4-2. 施設入所中」

4-2. ① Cは施設に入所した当時から「進学する気ばりばりあった」という。Cになぜ進学をしようと思ったのかを尋ねると、「あの人と一緒。オール1先生」という。具体的には、中学校3年生の時に友達から「科学雑誌ニュートン（中略）を奨められて、（中略）特殊相対性理論の記事見て、何べんも何べんも繰り返して、4回くらい読んだ時にわかって、すっげー」と思い、「それで、まあ、なんか科学者になろうと」考えたからだという。

施設に入所してからは塾に通わなかったが、「高校ん時に進研ゼミ」をしたり、「予備校の夏期講習なんか行ってた」りしていたという。Cは夏期講習の先生について、「この先生わかりやすいしおもしろい。そういう憧れみたいなのはありましたね」という。

「4-3. 施設退所後」

4-3. ① Cは施設退所後、希望していた4年制大学の理学部に入学する。科学者になることを夢見て進学したが、「研究してもごちゃごちゃややこしかったから（中略）僕も悪いし、相手もなんかちょっとパワハラみたいな感じにもなりかねん感じやったから。まあ、どっちもどっちということで（科学者になることををやめた）」という。

4-3. ② 科学者になることをやめたCは、「人と関わりたかった（中略）特に子どもと（関わりたかった）」ために、学習塾に就職することになる。

4-3. ③ Cは就職した学習塾について、「その塾でもね、いろんな人がいて、とにかく人の欠点を指摘しまくる人がいて、しかも俺もそれを真に受けるから、俺だめなのかなーって。まあ、でも配置換え（担当クラスの変更）が起こって、（中略）この人すげーって、そういう先輩に会って、（くじけずに）働くようになったり」したという。

Cはこれらの具体的な内容として2人の上司（Mさん、Hさん）を例に挙げている。

4-3. ④ 1人目については、「Mさんも、新人の研修なんかを引き受けてやってらっしゃったけど、（中略）（新人が）授業をやって（Mさんに）見せる訳です。ね、明らかになんか変やろとか、大丈夫かって人にも、こういうところが良かったよって。で、改善点はこれとこれと、んで、最後にまた、（中略）トータルでいうとよかったよと。そんな感じでしめはる人やったから、ああ、すげえな、こうやってするんやなって」と考えたという。

4-3. ⑤ 2人目については、「Hさんって人とおんなじ教室になって、（中略）指導してもらったり（中略）自分がやらかして、へまやらかしたとか、提出するべきものを出さんかったりとか、忘れてたりとか、そういう時にどういうふうに接せられたのかとか、それは大きい（手本にした）ですね。『C君、これはどうやればいいのかわかるのか？』って言われて、『こうじゃないっすかね』（と答える）。『どうやったら忘れへんのかわかるのか』（って聞かれて）、『気を

付ける』(と答えるが)、『気を付けるじゃあまた忘れるぞ』って言われてね、だから僕はいろいろと完璧に物事を覚え、忘れるなどということは皆無になったんですけど」という。

4-3. ⑥ Cは勤めていた学習塾の生徒への指導方法(方針)について、「教え方でいい部分もあれば、この教え方どうよって部分もあり、何故というところまで掘り下げず、いきなり答え(中略)というかやり方(中略)を教えちゃうとかね。(中略)躓いたり、試行錯誤させたりとかしたいけれども、いや、そんなん(はなかつた)」という。そのため、自ら学習塾を開くために勤めていた学習塾を辞め、「はじめはいろんな塾を回って(アルバイトなどをして)、どんな風に教えてるのかなって(調べた)」という。そして自分で塾を開いた。

「5. 施設生活経験に関する語り」

「5-3. 施設退所後」

5-3. ① 施設生活を経験したことをどのように受け止めているかを尋ね、Aを例に挙げて、施設は「普通の生活ができる」場所だということを伝えると、「それは言われて初めてわかった。(中略) ほんとそうやわ(中略)当たり前の生活ができるっていう。言われて初めて、そうやなあ」という。

5-3. ② さらに、C自身の境遇については、「あの家(実家)におるよりはねえ。あの家おったら(自分あるいは人生が)壊れてるしね。(中略)地獄に行かなくて済んだっていうその、地獄に。それはまあ、大げさなのか。(中略)家にいてもなんか、家をごちゃごちゃしてきてね。まあ、中学校に上がった時なんか(中略)ほんまごっちゃごちゃでね。(中略)不登校ってのも1ヶ月くらいあって(中略)なんで不登校なんか、ようわからん。別にいじめられてるわけでもないし、学校が嫌いなわけじゃないし。(中略)なんか、俺こんなふう、なんか人生こんななんか。そうね、思ってたことはちょっとあったけども。(中略)施設に入ってから、そんなんあんま思わなかった。あんまっていうか、覚えのないなあ。(中略)いい環境やったんやろうね」という。加えて、「(施設Gでは) 話聞いてくれる人も有難かったし。ね、ずっと1人でいたから家では」という。

5-3. ③ Cは現在の自分と施設生活を関連付けて、「今こうやってね、幸せと言えるような生活をできてるから(中略)施設にいたこともよかつたって言ってるけども、もしもそうじゃなかったら、施設のせいにしてたでしようね」という。

「6. 駄菓子屋に関する語り」

「6-1. 施設入所前」

6-1. ① Cは、5-3. ③で現在の自分が「幸せと言えるような生活」をできていると述べてい

るが、その背景として、当時通っていた駄菓子屋のことを挙げている。「いつも思うのは出会い(が鍵)。(中略) 施設入る前もそうやったしね。入る前も近所の駄菓子屋さんでね、近所の駄菓子屋さんのおじさんにね、1時間も2時間もべらべらべらべらしゃべってね。何話してたかは覚えてないですけど、ずっと耳傾けてくれる人がいたんですよ。そういう人がいてくれたしね」と話す。当時は「2時間とか平気でおったよ。大したもん買わへんのにね」という。

6-1. ② 駄菓子屋との関係について、Cは中学生の頃の自分を例に挙げている。Cは「中学校の時も最悪やったからね、器物破損くらいしてたからね」といい、「学校とかね、行きかえりの道とか、猫とか殺すレベルまでいかへんかったからまだよかったけどね。サカキバラ生徒のレベルまでいかんくってよかったなって。やから、他人事とは思えへんってね。だから、物・生き物・人ってそうやってレベルアップしてく、そんな気がする。うん。虫はいっぱい殺したけど。まあ、生き物の初級までは」という。その頃のことを、「あの時は僕にとって、最悪な時の一つやった」としているが、「それでも、近所の駄菓子屋のおじいちゃん(に話を聞いてもらうことで)、なんかいろいろ溜まってたもんを吐き出してたんやろうね」という。

「7. 結婚後の子育て・夫婦に関する語り」

「7-3. 施設退所後」

7-3. ① Cに対して、自分が結婚して子どもを持つことについて、不安などはなかったかを尋ねると、「その気持ちはようわかりますね。わかるっていうか、親と同じようにしてしまうんとちゃうかっていうね」という。さらに、「子ども相手じゃないにしても、その、大学の人付き合いで、後輩に対してきつく当たってしまったって、『Cさんあの人怖い』って言われたりして。あれ、自分は親切でしてるつもりなんだけどな一つて。ほんとは僕は優しい人間なんだ、じゃないけども、そうやって言われて。(中略) やから怖い。そうやね、(子どもを) 持っていいのかって思うところはあったけれども、あの、いっぱい失敗をしてきた。その、後輩に対して(中略) (きつく) 当たっちゃったとか。塾で勤めてる時なんか、言い方がまずかったりとか、そういうのがあって、それはやったらあかんのやというのをまあ、たくさん気づかせてもらったのはあります。(中略) 言葉は悪いけど、そういう人たちを踏み台にしちゃったみたいだね。(中略) いい出会いもあってね、その、いいところを見てくれてね。(中略) こういう風にしたらいいよって、失敗を責めるんじゃないくて、こうするとうまくいくって。そういう接し方をしてくれる先輩方もいたから。ま、その人たちの真似をしてみたい、同じことをしてみたいってのはありました」という。

7-3. ② また、自分が読んだ本を挙げて、「例えば、良い叱り方悪い叱り方(という本) みたいな、(中略) 子どもを傷つけない叱り方(という本) とかね、まあ、いっぱい読みました。毒

になる親（という本）とか知ってます？（中略）まあ、同じよう（Cの母親・祖母や本の内容）にするまいとか思ってもね、どうしてもでちゃうとかね。（中略）ましな接し方は（中略）できるとも思うし。まあ、学んでない人よりはできるんちゃうかな（中略）。ただ、今もまだ迷いますね」という。

7-3. ③ Cの妻にも子どもを持つことに対する不安があったかを尋ねると、「迷いとかですか？全然なかったですね」という。この妻の発言に対してCは、「それが強さやわ。この人の強さそれ」という。妻はさらに、「それでバランスとれてるやろ」という。

7-3. ④ Cの妻はCに関して、「多分、本人なりに神経遣ってる部分はあると思うんですけど。ね、自分が受けたようなことは（子どもには）すまいていうような（中略）だから安心というか、うん、横暴なことはしないな一っという。私の方がたしなめられるくらいで。『もっとこう聞いてあげた方が』って」という。さらに、「塾という仕事柄、子どもの話をするんですよ。（中略）そういうのを聞いてても、子どもに対する接し方というか、基本的な考え方、姿勢とかはわかるかなって思って」という。

7-3. ⑤ Cは子育てと自分の母親との関わりについて、「母親がね、（中略）例えば、娘がなんかトコトコトコトコって走ると。（中略）すんごい心配性なんやろね。『危ないよ』とかって（中略）言うわけです。（中略）（Cの娘が）トコトコ走ってこけます。（中略）で、（母親が）『ほらもう、言わんこっちゃない』って（言う）。（それに対してCは）『ええがな、こんな、こけて痛い目にあいながら、ほんでもっと気を付けるようになるんや』って言っても、まったく通じないんですもん。もう、自分の感じてることが全てですから、彼女にとっては。（中略）そういうふうに自分（C）も（中略）接されたって言うのかね、だから（C自身が）へたれみたいなね、勇気が出せないみたいな、過度に失敗を恐れてしまうみたいなところはあったのかなあと」という。

7-3. ⑥ Cは、「母親が（自分の子どもに）接すると、自分は一生懸命子どもを育ててるけども、（中略）それをぶち壊しにされるんちゃうかってことをね、（考えることが）あるんですよ」という。また、「ちょっとそんな気がするんです。（中略）実際そうなるかどうか知らんけど、杞憂にすぎんかもしれんけども、思う」という。

7-3. ⑦ Cは子育てのモデルとして、「反面教師」としての母親・祖母を例に挙げて、「あの人みたいにはしたくない」という強い思いがある。さらに、「良い面」は塾の先輩の影響が強いという。

「施設入所前 ～被虐待経験による情緒行動の不安定化と拠り所としての駄菓子屋店主～」

Cは両親が離婚した時のことについてイメージとして記憶している。Cの自分で母親の方に「ついて行った」と記憶している。まだ2歳と幼かったCにとっては、まだ母親に甘えたい時期だったためと考えられる。結果、Cは母親と母方祖父母と一緒に生活を始める。

家族との生活において、Cは祖母から虐待を受けていたと解釈している。Cは祖母から仏教に関わることから、日常の間食のことに至るまで、様々なことを強制されてきた。そのことをCは一般的に虐待として認められないと考えていたが、自分としては「心に色々影響を与えて」いると解釈しており、これは心理的虐待に当てはまると考えられる。Cは祖母から押さえつけられていたが、母親からの押さえつけはなかったと記憶している。しかし、統合失調症の母親は感情の起伏が激しく、Cはそんな母親を見て驚くと同時に信じられなくなっていった。Cは母親から虐待を受けていたと明言はしていないが、母親の自分に対する関わりを祖母の押さえつけとは形が違ったと受け止めているため、母親の関わり方も祖母と同様に心理的虐待に近い影響を持っていたと考えられる。

Cが施設に入所する直前には、祖母が死亡し、祖父も脳溢血で倒れた後はまともに生活できるような状況ではなく、母親も被害妄想で近所に殴り込みに行くこともあり、「どうにもならない」状況であった。このように不安定な家族の中にいたCは、中学生の時に1ヶ月不登校だった時期もあった。理由はなく、いじめを受けていたわけでもなく、学校が嫌いなわけでもなかったが、自分の境遇を受け入れられずにいた。中学校の登下校時に器物破損をしたり、虫を殺したりしていた。この時期はCにとって「最悪な時の一つ」であり、家族との関係で溜まったストレスなどを外で放出していたと考えられる。しかし、近所の駄菓子屋の店主の所へ行って、何も買わず、1、2時間ひたすら話を聞いてもらうことでも「いろいろ溜まってたもんを吐き出して」いた。家では自分の話をまともに聞いてくれる人物はおらず、駄菓子屋の店主が自分の話を聞いてくれる相手であった。駄菓子屋の店主がいたからこそ、自分は「サカキバラ生徒⁴⁴」のように人を殺すまで至らなくてよかったと考えている。Cはサカキバラ生徒のことを「他人事」とは思えず、傷つけるものが物から生き物、生き物から人とレベルアップしていくと考え、自分は物と「生き物の初級」である虫を殺すまでで留まってよかったと考えている。

44 1997年 神戸連続児童殺傷事件の主犯「酒鬼薔薇聖斗」（当時中学生）

「施設入所中 ～人生の方向を決めるきっかけとなった施設生活とオール1先生～」

家族崩壊下にあったCは、叔父の助けで施設へ入所した。中学校の時には自分の境遇のことで悩み、不登校にもなっていたが、施設に入ってからはそのようなことは無くなり、Cにとって「いい環境」であった。Cは友達に勧められた科学雑誌を読んで科学者になりたいという夢を持った。Cは元々、勉強ができた方だったようで、中学校の先生からは『授業中発表して、点も取れるけど、宿題出さなあかん』と注意されていた。施設に入る前から塾に通っていたCは、高校に入ってから通信教材を利用したり予備校の夏期講習を受講したりしており、勉強熱心だった。夏期講習では、講師の授業に感銘を受けて憧れを抱いたこともあった。

施設では、大勢の入所児がいるために自由にテレビを見ることができず、本をたくさん読んでいた。Cは他の入所児と関わるのが少なく「あまり輪の中に入っていかなかった」。Cは進学に向けて施設でも勉強をしていたが、神経質になっていたために、周囲がうるさいことを余計に感じていた。施設での生活は「毎日が修学旅行」で、毎日遊んで過ごしている他の入所児を蔑んで、「競争に勝ちたい」・「自分の方が有意に立ちたい」という動機づけによって、自分は周りの入所児のようにはなりたくないと思いながら生活していた。

Cが高校3年生の時の学級担任は自分の苦勞話をしており、その「話しぶりから」自分のことを理解してくれていた。しかし学級担任はCにとって、信頼できる人物ではなかった。C自身、話を聞いてくれた職員が「心の支え」にはなっていたが、誰かを信頼することはなかった。なぜならば、当時からCは自分と関わりのある人物が「突然いなくなる」も、「敵になる」こともあると考えていたからである。

Cは施設生活を送る中で、他者とは一定の距離を持って関わっていたと考えられる。それ以上に、科学者になるという夢を持ったCは、当時の副施設長から「オール1先生⁴⁵⁾」のことを教えてもらい感化され、施設生活はCにとって将来の方向性を決めるきっかけとなった。Cは科学者になるために、「オール1先生」と同じように大学の理学部を受験することになり、努力の甲斐あって無事に合格する。

「施設退所後 ～Cの準抛卒形成の要となった先輩講師～」

Cは進学した大学で途中、勉強について行くのが難しくなり、燃え尽きかけていた。しかし、頼るあてもなく、「まともな家に生まれた連中がうらやましい」と何度も思っていた。大学をや

⁴⁵⁾ 宮本延春 『オール1の落ちこぼれ、教師になる』(2009年 角川書店)の著者

めようとも考えた C はアルバイト先の先輩に感化されてやる気を取り戻すことになった。キリスト教徒である C は、苦しいときにこそ人が贈られると感じていた。

再び大学でのやる気を取り戻した C だが、進路を決める際、進路の参考にする「見る親の背中がない」ことで悩んでいたことがある。科学者になるために大学院に進むことも考えたが、指導教官との関係が上手くいかず、就職活動をすることにした。子どもと関わりたいという考えを持っていたために学習塾の講師をするようになった。

就職した学習塾の教育方針は C が考える教育方針とは異なり、それは最終的に C が自ら塾経営をするきっかけとなる訳だが、それ以上に C は学習塾の上司からの影響を多大に受けてきた。M さんの態度を見て自分もそれを取り入れようと考えたり、H さんから直接指導を受ける中で自分の行動を変化させてきたりした。

C は大学卒業後に就職した学習塾を辞めて塾経営を始める。その際に現在の妻と結婚し、現在は 4 歳になる娘を持っている。子どもを持つことに関しては、自分も親と同じようにしてしまうのではないかという不安を持っていた。しかし、塾の先輩であった M さんと関わる中で自分の対人関係のあり方を見直したり、H さんに指摘されて自分の行動を正したり、育児書などを読んで勉強したりする中で、子育てに関する不安や対人関係の持ち方に関する不安を軽減させるとともに、対人関係における行動様式の枠組を形成していった。妻もそのような C の様子を見て、C は子どもに対して横暴なことはしないと信じている。C 夫婦は互いに足りない部分を補い合って「バランスがとれている」と考えている。

現在 C は母親や父親と定期的に会うことがあるが、C 自身はできれば関わりたくないとは思いつつながら親孝行をしなければならぬという義務意識で関わっている面と、親のことを理解しようと努めたり不憫に思ったりと葛藤を抱えている。C 自身は日々、試行錯誤しながら懸命に子育てをしているが、母親が自分の子どもと関わることで自分の努力を「ぶち壊し」にされてしまうのではないかと少しながら危惧している。C 自身の中ではまだ母親を完全に受け入れることが出来ていないと考えられる。

「C の社会化過程」

以上から、C は出生家族において被虐待経験を持ち、当時は情緒不安定で物を壊したり、生き物を殺したりと衝動性や攻撃性があったと考えられる。さらに、中学校では 1 ヶ月間不登校だった時期もあり、自分の人生が受け入れがたいものになっていた。しかし、そのように危機的状況にあった C にとって駄菓子屋の店主が「意味ある他者」となって、相互に受け入れられる関係を形成していたことが、C を「サカキバラ生徒のレベル」になることを防ぎ、対人関係

の基礎となる、他者を受容し自らも受容されるという枠組を形成できたと考えられる。Cはひたすら駄菓子屋の店主に話を聞いてもらっていただけではあるが、家では「ずっと1人」でいて、まともに話を聞いてくれる家族がいなかったため、駄菓子屋の店主はCにとって自分を受け入れてくれる重要な他者であったと考えられる。Cは家族から離れ、施設に入ってから自分の境遇のことで悩むことはなくなった。施設での生活が「当たり前の生活」ができる「いい環境」であり、家族と一緒に生活することがCの標準的な準拠枠の形成を妨げていたと考えられる。

施設に入所してからは、科学雑誌を読んだ経験と「オール1先生」の存在に感化され、科学者になるという夢をもって努力していた。現在になって振り返ると周りの入所児はCの勉強の邪魔をすまいと気を遣ってくれていたと考えているが、当時、神経質であったCは他の入所児の騒がしさを強く感じていた。また、毎日遊んで過ごしている他の入所児を蔑み、自分は同じようにはなりたくないと感じていた。自分が科学者になりたいという夢と、他の者よりも優位でいたいという枠組をもって行動していたと考えられる。大学に進学すると、挫折し、燃え尽きかけることもあった。しかし、アルバイトの先輩やキリスト教の教示に導かれ自らを立て直すことができた。

科学者になることを夢見ていたCだが、大学での挫折経験と指導教官との関係が上手くいかなかったことにより、学習塾に就職することになる。学習塾で出会った先輩講師に導かれて、それまでの自分の人付き合いのあり方を省み、標準的な枠組を獲得することで、さらに自分の行動を正すことができた。C自身、子育てをはじめ、現在の自分の考え方や行動を形作っている要素として、母親・祖母などの「反面教師」と塾の先輩講師Mさん・Hさんとから学んだ「良い面」を挙げている。

現在、Cは「幸せと言えるような生活」ができている。だからこそ、自分が施設に入所したことを肯定的に捉えているが、もしも現在の自分が不幸せであったら「施設のせい」にしている。現在も母親との関わり方について葛藤を抱いており、母親との関わりがプラスマイナスの両面に働く可能性がある。しかし、Cは妻の「強さ」に支えられて、C自身も妻に対して安心感を与えている。夫婦でバランスがとれていることがCの「幸せと言えるような生活」に繋がっていると考えられる。駄菓子屋の店主を「意味ある他者」として獲得し、その後も塾の先輩講師や現在の妻など継続して「意味ある他者」を獲得してきたことによって、Cは対人関係における標準的な準拠枠を形成し、社会化を果たしてきていると考えられる。

第四項 事例4 Dの社会化過程

事例の概要

出生家族構成：父親（離婚、別居）、母親、長女、D、三女、長男

Dの属性：29歳 女性 既婚（夫、D、長女、長男） 中学校卒業

現在は定時制高校に在籍中（現在、1年目）

入所期間は中学2年～高校卒業

「入所の経緯」

Dが小学5年生の時に、母親が入院したために養育者不在となり施設Hへ入所となる。その年の夏に、母親が退院したために一度施設を退所するが、再び母が倒れたために再び施設Hに入所となる。その後、Dが小学6年生の時に母が死亡する。中学校2年生の時に自ら望んで施設Iに移動する。高校へは進学しなかったが、特例として20歳まで施設入所となった。

「1. 家族に関する語り」

「1-1. 施設入所前」

1-1. ① Dは病死した母親について「もともと頑丈な人」だったという。しかし、Dが小学3年生の頃になって、精神科病院に入院を繰り返していた姉が「ちょっと霊的なことを言うようになってきて、仏壇もないのに線香をあげたりとか。(中略)人形がリングを食べるもので、部屋の全てを、その、黒の布で覆わないかんってなって。なんかそういうちょっとおかしいことを言い出すようになったきた」という。そして、「お母さんは娘可愛さかなんか知らんけど、わかって付き合ってたんか、ほんとにそうだったんかはよくわからんけど、おかしなやつたんですよ、二人が。で、私は結構、そういうの目の当たりにして(中略)日に日に(中略)おかしなってる、ノイローゼみたいな。(中略)多分、肉体的にはすごく健康やった(中略)けど、精神的に(中略)まいったってのがあったと(思う)」という。

「1-2. 施設入所中」

1-2. ① Dは母親の死因について、「精神的なもんだと思いますね。(中略)結局は心臓麻痺で死んだんですけど、過労死だと思いますね。最後に会ったときなんかもう、呂律もまわってない(中略)。まあ、最後は家で死んだんですけど(中略)、目もうつろで、なんか、子どもから見とつても、なんかおかしいなって感じやったんで。まあ、なにが、全部がお姉ちゃんのせいだとは思いませんけど、でも、なんかそういうのが原因っていうか、きっかけになったんじ

やないかなって感じですね」という。

「1-3. 施設退所後」

1-3. ① Dは姉に関して、「今もなんか、ずっと施設において、病院っていうか隔離病棟みたいななんにずっとおったんですけど、なんていうか自立するん（ため）に施設にかわって、で、最近出たんですよ。で、今一人暮らしてって感じで。で、お付き合いしとる人がおって、その人となんか、おかしいことになってますけど、元気です。」という。

1-3. ② Dに対して、自分の価値観や人生観に影響を与えた人物に心当たりがあるかと尋ねると、「なにかにつけ、いろんなことを言ってくれたからなんか、うーん、細かいこと言うと、おばあちゃんなんかも、印鑑を人に貸したらいかんっていうのを小っちゃいころから聞いとったし。（中略）今は主人ですよ。一番近くにいて、いろいろ言ってくれたりするんで（中略）あとはまあ、母親。あんまり言葉にしては覚えてないですけど、そう、育ててくれたこととか（中略）、母親がこうしとったとか思い出してやったり（中略）結構してます」という。

「2. 学校の教師や学友に関する語り」

「2-1. 施設入所前」

2-1. ① Dに対して、小学生の頃の友達関係について尋ねると、「小学校は、(Dが) すごい不思議ちゃんやったんで、なんか、友達っていう友達、あんまいなかったですね。一人木に登ってマンガ読んでた」という。「小学校の時は別に、そんなで、別に友達おらんとか、そういううんでは無かったです」という。

「2-2. 施設入所中」

2-2. ① Dは中学校の友達関係について、「中学校に入ってから、あ、自分友達おらんのやっと思って。なんか、皆が友達やないですか、小学校ん時って。まあ、グループもあるけど。なんか、別に、自由に話しかけてって。で、中学校の時はそんなんで、ひとりすごい仲良くなた子がおって、その子とずっと一緒にいましたかね」という。

2-2. ② Dは施設Iに移った際に転向した中学校で不登校にだった。その理由については、「なんとなく、教室に入るのがすごい嫌で」という。

「2-3. 施設退所後」

2-3. ① Dは質問紙で、現在でも「学校の友達」と交流があると回答している。具体的には、「中学校のときの友達が、はい、頻繁にとってる子が一人いて、その子ぐらいですかね。（中略）

他にも連絡っていうか、たまに連絡したりはするんですけど、結構忙しい。まあ、その子が忙しくないわけじゃないんですけど、結構バタバタしてるんで、ゆっくり会えるの子は一人くらい」という。

2-3. ② Dは尊敬できる人物できる人物について、「そういう（尊敬できる人物）のはなかった（いなかった）ですね。私ずっと好きな人は、あの、チャラってアーティストで。あの人がっこいいから、なんか、あんな人になれたらいいなって思いますね。あとはまわりにはいないですね」という。信頼できる人物については、「（当時は）いなかったですね。（中略）（現在は）中学校の時の友達はできるかな。その子と、あと、通信（Dが現在通っている定時制高校）に行ってる子たちですかね。ほんとに、心から笑える。あと（他の人）はね、行っても（会っても）つままないんですよ」という。

「3. 施設の職員や入所児に関する語り」

「3-2. 施設入所中」

3-2. ① Dに施設生活を送る中で辛いことがあったかを尋ねると、「そんなんいっぱいありますよ。（中略）最初の施設（H）に入った時は、とりあえず（他の入所児から）殴られるってのがすごいあったんで、学校から帰るのがすごく嫌でした」という。具体的には、「半径1メートル以上近づくなとか、そんなんわからんから（中略）歩いとるだけでも蹴られたりとか。（中略）皆呼び出されて、（中略）並んで、後ろから皆バーツと蹴られてって、とか、そういう集団暴行みたいな（ことがあった）。（中略）私ひとりだけ（やられた）ってのもあるし、皆が殴られるってのがあったり、（中略）友達同士をケンカさせられたりとか、なんかそういうのがいっぱいあって、（中略）死ぬっていうのも何回も考えました。（中略）親が死んだときも、（中略）親が死んで悲しいってことよりも、（中略）ここにずっとおらんといかんのかって思うことの方が悲しすぎて。（中略）悲しんだる余裕がない。その反面、（中略）カツアゲとかもされ（中略）お母さんの財布から（中略）お金持ってとったり（中略）そういうのをもうせんでいいっていう安心感があったりだとか。なんか、すごい複雑でした、お母さんが死んだときは。（中略）次に行った施設でも、（中略）悪口言われたりとか（中略）ドアとか（中略）ドーンって閉められたりとか。（中略）そういうのがすごいあったんで（中略）人間不信っていうか、なんでそんなことすんのやろっていうことしかもう覚えてないですね。だからもう、すごい、人が怖いっていうか、人の顔をすごい、窺ってしまうこともありますね」といい、インタビュー中に涙を拭う。

3-2. ② Dに対して、上記のような入所児間の暴力について、職員から働きかけがなかったのかを尋ねると、「（職員は）わかってたと思うんですけど、見てみぬふりみたいな感じでした。

(職員が) 一回だけ止めに入ったんは覚えています。でも、まあ、言うたらわからんようにするんでという。それでも、職員が「直接何かしてくれるとかそういうのはないですね」という。しかし、そういった職員の対応について、「やっぱり直接的な解決策ってないから、(職員が)対応しなかったとかじゃなくて、できなかったって感じですね、施設Iの印象では。でも(職員は)必死に話は聞いてくれたって印象はあります」という。このような暴力はDが「中学校3年生ぐらい」になるまでであったという。

3-2. ③ Dに対して、暴力以外での他の入所児との関係について尋ねると、「施設Hにおったころは同級生仲良かったですね。で、施設Iは、同級生、男の子はおったけど(中略)仲良かったかな。下の子は、一人仲いい子がおったんやけど、シャワーの取り合いになってって、それで私が強引にアカンっていったのが悪かったのか、謝ったんやけどそれから仲悪いです。この間もちょっと会ったんですけど、ちらっと集まりで。まだ怒ってました」という。

3-2. ④ Dは他の入所児の中にいた被虐待児について、「あのね、目が違う。すごいね、警戒しとる目してますよ、ちっちゃーい子でも。(中略)私が知らんだけかもしれませんが、(被虐待児は)あんまいなかったですね、昔は。親がおらんからとか、親が借金しとるからとか、そういう感じ(理由)で入ってきとったんやけど、私が中3ぐらいの時からそういう子らが頻繁に入ってくるようになって。(中略)目合わせられなかったりとか、もうね、こんな2歳ぐらいの子でも、なんか、違う。おどおどしとる。なんか、警戒しとる感じがしましたよ、私は。で、(職員に入所理由を)聞いたら、そういう事情(被虐待)で入ってきとるっていうのを聞いたから、(中略)あれ(大変)やったんやなって思って」という。

「3-3. 施設退所後」

3-3. ① Dは最近になって、SNSを介して「施設Hにおったころの同級生の女の子(中略)と連絡取ることができて」、その同級生からSNS上で施設Hの退所者のグループに誘われて入ることになった。そのグループで幹事をしている人物が「(入所当時は) すごい怖い人やったんですよ」という。Dは「(妹に)『この頃、そのメンバーと連絡ととんのさ』って言ったら、『えーっ。嫌やー』って(言われた)。妹にも『来おへん?』って言ったんやけど、行きたくなかって言われて。(中略) きょうだいでもちょっと違うもんで、感じ方が」という。Dはそのグループについて、「(メンバーは) いろんな条件で(施設に)入ってくる子が多いから、(退所者が集まることは)難しいと思う」という。

3-3. ② Dは他に退所者との関わりについて、「何年か前に妹が携帯番号教えた人がおって、(中略)結構仲良くしとった人やで、まあええかなと思って会うとったんですよ。(中略)いつしか、なんか、『携帯をおんなじの持とう』って言い出して、(中略)まあ、別にいいやと思っ

て話をしとったら、『印鑑がいるから送ってほしい』って言い出して、これはちょっと危ないな
と思って、それからは連絡取ってないです」という。その人物からは「妹には、『Dおらへん』
て言うてきた」が、「(妹から)『印鑑のこと言ってきたからもうやめとこうに』って(言われた)」
といい、連絡をとらなくなったという。

3.3. ③ Dに対して、自分の価値観や人生観に影響を与えた人物に心当たりがあるかと尋ねると、「やっぱり、(中略)関わってくれた(施設)職員かもしれない。あとは、天理教の(中略)会長さんとか。(中略)宗教じゃないんですけど、天理教の中で育ってきたんで、何かある
たんびに、こう、そういうのを思い出すんですよ。(中略)説法じゃないけど、あるじゃないで
すか。こういうときは馬鹿にならなあかんとか」という。

「4. 進路・就労に関する語り」

「4.2. 施設入所中」

4.2. ① Dに対して、高校へ進学しなかったことについて、進学する気がなかったのかを尋ねると、「なかったです。中学校1年生の時は目指してた高校ありましたし(中略)。でも、い
つ頃やったか、不登校なりはじめてからは、もう、学校行きたくないってなったので」という。
高校を目指していた理由については、「その学校がよさそう、制服もなんかかわいい感じで
という。具体的な将来の夢があったのかを尋ねると、「その頃はなかった」という。

4.2. ② さらに、Dは高校非進学についての具体的な話として、「中学校の時、不登校やったん
ですけど(中略)皆と一緒にするっていうのがすごく嫌で。一緒にの制服着て、一緒にの学校行っ
て、一緒にの学校で学ぶっていうのが、なんか、すごく嫌やったんですよ。窮屈で。で、私も中
学校の時に願書は出してなかったんですけど、(職員に)勝手に出されとって、(中略)その日
(高校受験)の前日、スキーやったんですよ。で、スキー行って、もう眠たくて眠たくて、入
試どころじゃなかったんで、『もう、行かへん』って言って『もう、寝とる』って言って(中略)
行かなかったん」という。

「4.3. 施設退所後」

4.3. ① Dは高校へ進学しなかったことを振り返って、「それ(高校へ行かなかったこと)はよ
かったなって思いましたね。それは後悔はなかったです、働いてからも。まあ、口では(中略)
『あんどとき頑張っとればよかった』って言いますが、でも、あの時に(高校に)行ってなか
ったから今があるし。(中略)今、高校で通信行っとして、本当に勉強したい時にやれるって
いのが、すごく自分はいいなって思ったから、その時に行かなかったってこと自体には後
悔はないですけど、もっと勉強するってことをしやんかったってことには後悔はありますけど、

行かなかったことに対しては別に（後悔はありません）」という。

4-3. ② Dは仕事に関してはこれまで、「ずっとバイト、正社員、そこも辞めてバイトみたいな感じで」、「10 くらい（の職場で）働いてる」という。Dが18歳の時に、施設への措置を残したまま「施設の指導員の人の借りとり家」の空き部屋で住み始め、「施設にご飯食べに行くことはあった（中略）けど、住むのは一人っていう練習」をしていたという。また、Dはその歳で「洋食屋さんの正社員になって（中略）3カ月で辞めてる」。Dはそこで「行き詰って（中略）もう三重県離れたいなって思った（中略）施設（が）やとった（中略）天理教の学校の（中略）3か月ぐらい行く修養科」に入ることになった。そこには「施設の人もおるし、（中略）変な団体ではないんですけど、（中略）宗教一色やもんで、（中略）『宗教』みたいになってた」という。このようなDの様子を知った友達が、「危ないぞってなって、私を救わなあかんってなって（中略）、とりあえず私を引き取るってなって、そこ脱走した」という。その後は、その友達の家に住むことになった。当時は搜索願が出ていたが、面会をDは拒否し「施設の人に会うこともなく、ずっと自立しながらやとった」という。しかし、「そろそろ一人暮らししやなあかん」と考えたDは市役所の臨時職員を始めた。

4-3. ③ Dは結婚する直前に就いていた車検の会社で「すごいじめられ」ていた。計算が苦手だったDは「男の人であろうとなかろうと、みんな」から「すごい攻撃」をされたという。様々な職場を経験したDにとって、その会社が「一番続いた」が、「いろんな事悩んで」いた。しかし、「それが高校とか行く原動にはなった」という。Dにとっては、「中学校卒業」が「ネック」であった。Dは「高校卒業」の資格が欲しかったが、「勉強する機会も、（中略）勉強するところっていうのも知らなかった」た。当時は、「どんなことでも（中略）とことん悩んどつたし、（中略）生きてくんも嫌になる。でも、（中略）（自分の）境遇のことを言うともわかってもらにくい。（中略）通じやへん、（中略）そういうのを言うとも重くなったりとかして（中略）あんまり言わない自分もおった（中略）寂しさとか（中略）そういう思いをぶつけていったらいいか、全然なかった（わからなかった）んですよ。施設も出とるし、（中略）修養科の時に（中略）脱走とかもして、（中略）（施設の）顔に泥塗ったじゃないけど、そういうので、（中略）誰もおらんくになってたんですよ、（中略）信頼できる人とかも」という。

4-3. ④ Dは現在、栄養士になって飲食店を開きたいという夢をもって、短期大学などに進学するために定時制高校に通っている。栄養士になりたいと思ったきっかけは、施設を出て「一番困ること」は「食やった」という。それは、施設では「皆で食べるごはんで慣れてとるもので、（一人になると）すごく寂しい」という経験による。D自身が結婚後に妊娠して、「実家の親（のところ）に帰らないかんかっていうのを（中略）すごい身に染みたんですよ。（中略）実の親でも気遣うのに、姑さんなんかやともっと気遣うから、そんなんじゃ休めへんから実家に」

里帰りすることの重要性を実感したという。「(施設退所者が) 妊娠しても親がおらへんかったらそういう代わりに里帰りできる場所があったりとか、なんか、面倒見てくれるところがあったりとかしてくれたら、すごくほんとに助かる」と考え、里帰りをするあてのない施設退所者たちが気軽に寄れる場所を創りたいと考えている。自分が栄養士の資格を持っていれば、「栄養とかの指導もできるし」、「一人暮らししとる子らに指導」ができるという。

4-3. ⑤ Dは飲食店について、自分が「おばあちゃんとかになった時に、やれたらいいな」と考えている。「現役の頃は (中略)、土地も必要なあれやし、いろんな連携がないとちょっと難しい」と考え、まずは、給食センターか施設で調理員として就職することを考えている。

「5. 施設生活経験に関する語り」

「5-1. 施設入所前」

5-1. ① Dは施設Hへの入所について、「お母さんが入院する、しとるから、今日から施設Hで (生活することになります)」と児童相談所から説明された。しかし、Dは「施設Hっていうのは (Dが通っていた小学校と) 同じ学区内やったから、そっから (施設Hから) 来とる子がおるっていうのも知っとったし、(中略) 家から (施設Hに) 遊びに行ったこともあったもんで、知ってたんですよ」という。そのため、施設入所の説明をされても「ああ、あそこ行くんや」と思っており、「ウキウキしてました。なんか、親がおらん生活ってのがどんなんなんやろって。すごいウキウキしてました、旅行気分」という。

「5-2. 施設入所中」

5-2. ① Dは二十歳まで施設Iに措置されていたが、その背景については、「中学校出て、すぐ働こうと思ったんですけど、働く先が半年ぐらいみつからなくて、で、見つかったもバイトとかでやってたんですよ。(中略) 施設の措置とかってのが、15とか18とか、そういう学校出ると同時に措置を切らなきゃだめなんですけど、(中略) そこにいた施設の人が児相に掛け合ってくれて (中略)。働いてないし学校も行ってないんやけど、このまま出すのは心配やもんで、特別措置として20歳まで伸びたんですよ」という。

「5-3. 施設退所後」

5-3. ① Dは自分が施設生活を経験したことについて、質問紙では「よかった」とも「よくなかった」と回答していた。その理由について、「家で生活しとったら、(中略) 全然違う人生を歩んどったけど。でも (中略) (施設H) に入って施設Iにくることになって (中略) 出会った人がいる訳じゃないですか。それは、親がおって、(中略) そういう人生はもうないんですけ

ど。親がおって、生活しとったら、出会わなかった人かもしれん。で、出会ったとしても、違う形で出会ったかもしれへん。やから、この子ら（自分の子どもたち）にしても、旦那にしても、この子らだって、私の子で今は出会っとるけど、違う人の子で出会っとるかもしれへん。やからなんか（中略）そういうのが全部なくなるとしたら、複雑ってことです」という。

「6. 施設Hから施設Iへの移動に関する語り」

「6-2. 施設入所中」

6-2. ① Dは施設Hから施設Iに移動した経験した持っている。施設Iに移ることになった背景について、「施設Hにずっといる予定だった」が、「学校で、（中略）無視とかされたことがあって、それがすごい嫌で、それで施設でもそんな（他の入所児からの暴力等があった）」ために自ら児童相談所に相談しに行った。児童相談所に「一か月くらい話し合ってもらって、（中略）『施設Iに行きますか？』って言われて。で、『妹とか弟とかも連れていきますか？』と言われた」。Dは、「妹と弟とか、あんま連れていきたくなかったもんで、もういいです」と答えた。児童相談所に理由を聞かれたが、Dは「私が決めたことやから、あんたら（妹、弟）別に関係ない」という考えを持っていた。具体的には、「私がいじめられて、私が思って、あの、私が移動したいって思った。やのに、なんで兄弟を、そんなこと微塵も思っていないきょうだいをなんで連れてかなあかんのやろ」と考えていた。Dは妹や弟から「『なんで連れてってくれへんだん？』って」言われたという。しかし、Dは「『例えば、あんたら（妹、弟）そこに友達もおんのに、施設Iに連れていきましたってなっても、どっちにしたって絶対文句は出る。なんていうか、お姉ちゃんのせいでここに来たって、絶対なるよって。で、そしたら別に、来たかったら、あんたも直に頼んで来たらええことやん。けど、そうもしてないのに、来るのはおかしいんちゃう』」と言ったという。そのことについてDは「冷たいって言えば冷たいし、まあ、私なりには考えたつもりなんですけど、結局、あんまり、妹やから弟やからってタイプではないんですよ。妹であっても弟であっても、一人の人間やから、その子が思って行動する。じゃないと意味が無いし、お姉ちゃんがこうやでこうとか、弟がこうやでこうっていうのは、絶対おかしいと思うんですよ。きょうだいやけど、いっつもいっつも一緒におらなあかんのかっていうと、そうじゃないから。一緒にきたかったら、別に、そこに言って来ればいいだけの話。せやけど、それができひんのやったら、それはそこまでのことやから、そこにおった方が絶対いいし。なんせ、もう自分で決めなって言って。で、私は、いっつも自分で決めてきたから、だから弟とか妹が決めたことに文句を言うつもりもないし、まあ、いろいろ言うけど、でも、最終的に決めたことやったんなら、弟も遠方に行くって言って、まあ、遠いし、どうなんって言ったこともあるけど、最終的にはあの子が決めたことやから、まあそれでしゃあないし、

自分もそうやって、やってきたもんで、うん、なんか、そうやって思うタイプじゃないです。

(中略) 妹のために弟のためにじゃなくて、まずは自分。自分がちゃんとできてこそ。そりゃできてない事もあるけど、自分のこともやれてへんののに人のことなんか助けられへんし、共倒れになるぐらいやったら、もう、なんていうか、いつそのこと自分だけ頑張った方が、どんだけか、あとからでも助けれる。けど、その助けれへん時に助けたって、なんていうか、なにもできやんから。あの、やから、うん、結局助けへんのやけど、なんとか自分で頑張ってる。まあ、友達を作ってその人に頼るなり、なんなり、自分もそういうふうにしてきたから、だから、そういう力をつけてほしいっていうのはすごいあります」という。

「7. 結婚後の生活・夫婦の関係に関する語り」

「7-3. 施設退所後」

7-3. ① Dに対して、子どもを持つことに不安を感じていたかを尋ねると、「私まったくなかったです。もう、子どもは早く欲しかったし。(中略) 子どもをもって、(中略) 母親 (は子どもが) 4人おったわけやないですか。(中略) 言うたら母子家庭で、もうほんとにこんな大変なことをしとったんかなって思うと、ほんとになんか、感謝の気持ちでいっぱい。それでもやっぱ、私のほんとに幸せなところは、虐待とか、そういう一切なかったもんで。ほんとに一生懸命育ててくれたっていう記憶しかなくて。(中略) そりゃ時々ね、私でもなんか、虐待まがいじゃないけど、バーってやってしまったりとか、ワーって言ってしまったりとかはあるんやけど。まあ、でも、(中略) だんだん日が経ってくるにつれて (無くなっていった)。最初はねえ、子どもがおらんだらとかね、すごい思ったんですよ」という。

7-3. ② さらにDは、「そんなん (子どもを持たなければよかった) とか思って、子どもの前とかでもね、けっこう言ったりとか、しとったんですよ。せやけど、(中略) 飲み会とか行って (中略) 息抜きをしようって言って、(中略) 夜の10時、11時12時とかに家帰ったりとかしてたんですよ。でも、私からしたら息抜きになってないわけですよ、なんか。その時はわからないですよ、それが何でなのとか。でもやっぱり (中略) 子どもと向き合っていないなと思って。子どもが欲しいと思って、望んで産んだのに、どうしても、こう、子どもがおらんだらもっとこうしとれたとか、子どもがおらんだら仕事、もっと好きな仕事を思いっきりやれたとか、そういうことしか思ってなかったから、1年2年とか。で、妊娠中にすごい思ったんですけど (中略) この子を受け入れられんのかなっていうのはありました。一人増えるけど、この人格を認められんのかって、そういうのはありましたけど、結局、生まれてきてほしいし、すごく大事やから。(中略) (息抜きが出来ていない理由を) なんでなんやろって考えたら、やっぱり子どもと遊ぶ時間 (中略) 夜とか一緒に寝たりとか、そういうのがすごい大事やから、今

私ができ、するのは飲みに行って息抜きすることじゃなくて、子育てしながら息抜きしてく（ことだと考えた）。（中略）そういう（子どもを持つことへの）不安はなかったですけど、愚痴はありますね。（中略）でもあんまり言わなくなりました、子どもらがおらんだらよかったとか。昨日も言っていたんですけど、5年前、私は子どもいなかったわけじゃ無ないですか。（中略）5年前ってもう、アホなことばっか考えとったとか。（中略）10年前とかって、ほんとアホやったわって。（中略）せやけど、今、そこに戻りたいかって言われたら、（中略）（自分に）『あんたな、10年後には家族できるでな』ってことは言いたいけど（中略）、戻ってもう一回やりたいかって言われたらそうでもない。やから、ほんとに大事にせなあかんのを、ほんとに見失ったってなって思って。なんか反省することとか、ちょっと見失ったりとか、そういうのはあるけど、（中略）いろんなことを経験して、（中略）そういうのも大事やと思うんですよ、飲み会とかに行くのも。せやけど、昼にね、たまに、そういう人たちで集まって、息抜きってのは行けるんやけど。夜に（中略）（飲み会などに）行ってね、しかも誰が見とるかわからん、男の人も交じるととこで、（中略）周囲の目もあるわけじゃないですか。で、私はもう主人の（実家の）近くで住んでるんで、あそこの奥さんあんなことしとったよとか、あるわけじゃないですか。（中略）そういうことで、家族に迷惑をかけてしまうってことが、すごくいかなーて思ったもんで。（中略）そういうので反省が出来たりとか、（中略）そういうのを一つ一つ考えれるってのは、やっぱり、子どもらがおるとか、家族があるとか（中略）そういうものが無ければ、考える事すらできない現状やから。（中略）親にならしてもらって、すごく有難いです、私は。（中略）その前の生活なんか考えたら、ほんとにアホな事ばかりしとって。（中略）うじうじうじうじ考えとったりとか、まあ、今も考えてるんですけど。なんか、（中略）そういう面ではよかったと思いますね。まあ、いろんな考え方っていうか、（中略）やっぱり虐待されてる人と、虐待されなくて入った人、かなりやっぱり違いますよね。私も施設におって思いましたけど。だから、そういう人は考えてしまうと思う。（中略）虐待を受けてない私でさえも、そういうことを考えてしまうことがあるから」という。

「施設入所前 ～母親の豹変と旅行気分を楽しみにしていた施設入所～」

Dの両親はDが保育園の頃に離婚し母子家庭となった。母親はDたち四きょうだいを一生懸命育てていた。母親自身は丈夫な人ではあったが、精神科病院に通っていた姉の相手をしてる内に、だんだんと精神的におかしくなっていた。Dは日毎に常軌を逸していく母親と姉の様子を目の当たりにしており、D自身にも相当の精神的負荷がかかっていたと考えられる。母親や姉の影響によるものであるかどうかは不明だが、Dは小学生の時は「不思議ちゃん」で

あったために、基本的に学校では一人でマイペースに過ごしていた。

結果的に、母親は精神的疲労と過労から入院することになったが、Dが入所することになった施設HはDが通っていた小学校の校区内にあった。そのため、Dは施設Hに遊びに行ったこともあり、入所が決まった時にも「ウキウキ」しながら「親がおらん生活ってどんなん」なのかと興味を持ちながら「旅行気分」でいた。

「施設入所中 ～過酷な経験の積み重ねによって崩れかけた準拠枠～」

Dは母親の入退院によって施設Hに退所後に再入所している。母親はDが小学6年生の時に心臓まひで死亡した。D自身は母親の死について姉の影響がきっかけとしてあったと考えていた。しかし、当時、他の入所児から殴る蹴るなどの暴力を日常的に受けていたり、カツアゲをされたりしており、母親の財布からお金を抜いて渡していた。このような暴力が日常的にあったために、D自身は母親の死以上に自分が施設で生活し続けなければならない悲しさと、財布からお金を抜いてこなくてもよいという安心感が先行し、複雑な感情を抱いていた。

中学校に上がったDは当初、目指していた高校もあり、小学校とは違って自分に友達がいないということが気になり始めて、一人の友達とずっと行動を共にしていた。しかし、中学校で周りから無視されるようになり、Dにとってはそれがかなりの苦痛であった。その上、施設では毎日暴力を受けていたために、Dは中学2年生の時に自ら別の施設に行きたいことを児童相談所に告げた。結果、施設Iに移ることになり、妹や弟も一緒に施設Iに連れていくかの選択をせまられるが、D自身が考え希望したことであったために自分ひとりで施設Iへ行くことにした。当時はDにとって信頼できる人物もおらず、わが身を守ることで精いっぱいであったと考えられる。

施設Iでの生活を始めたDはそこでも他の入所児からいじめられることになった。施設Hから引き続いて他者から暴力を受けてきたDは人間不信になっていた。施設HとIの職員は入所児間の暴力を止めさせる具体策は持っていなかったが、Dの話を必死に聞いてくれていたことが、唯一の救いであったと考えられる。このようにDは施設を移ってからも暴力を受け続け、情緒不安定になっていたと思われる。中学校では、周りと同じようにしていることが嫌になり窮屈に感じ不登校になった。当時は「なんとなく、教室に入るのが嫌だった」が、それまでの施設で暴力やいじめを受けてきた経験と、学校でいじめられてきた経験が影響していたと考えられる。Dは中学校での不登校を経験してからは、学校へ行く意欲をなくし、高校へ進学する意欲もなくなった。結局、高校へ進学しなかったDはそのまま就職しようと考えていたが就職先が見つからず、施設職員がDをその時点で施設を退所すると心配と考えて児童相談所に掛け

合い、特例として20歳まで措置延長となった。措置延長となってからDは施設で生活をしながらアルバイトをしていた。18歳の時に空き家を使って自立生活への準備をし始め、洋食屋の正社員として雇われるが3カ月で辞めてしまい、天理教の修養科に入るようになった。その修養科も友達の手助けを得て脱走してしまい、その友達と一緒に生活をしながら施設の職員とは会わずに過ごしていた。最終的に、観光地の食品販売の会社に正社員として就職し、施設を退所する。

措置延長となってから施設を退所するまでのDは生活基盤が安定しない状態で過ごしており、それまでの姉や母親の精神状態の悪化や母親の死亡にはじまり、施設での暴力や学校でのいじめなどの積み重なる過酷な経験によって拠り所を無くし、D自身の準拠枠が崩れかけ彷徨っていた時期であったと考えられる。

「施設退所後 ～D自身が母親になることで再形成された準拠枠～」

施設を退所し、食品販売の会社も辞めてしまい、その後はアルバイトと正社員を繰り返す中で、最後の職場となった車検の会社に正職員となった。その会社では主に経理の仕事をしていたが、計算が苦手であったDにとっては難しい仕事であり、同僚からいじめられていた。いじめられたことによって悩みや、孤独感を持ちながら信頼できる人物もおらず誰かに頼ることもできず、生きているのが辛くなった時期でもあった。しかし、職場でのいじめはDの高校卒業資格獲得への意欲を持つきっかけになった。車検の会社を辞めて結婚したDは、自らの経験から栄養士の資格を取ることを決意し、定時制高校へ通うことになった。

結婚し妊娠した直後のDは、念願の子どもを授かった喜びと、自分が子どもの人格を受け入れられるのか不安に感じていた。いざ子育てが始まると、思っていたよりも大変だと感じ、子どもがいなければもっと自分の好きなことをすることができたのというを思っていた。子どもに対しても「虐待まがい」のように接してしまうこともあり、息抜きに飲み会などに参加して夜遅くに帰ることもあった。しかし、子どもと過ごす時間を確保できていないことが自分にとって大切だと考えるようになり、子どもがいなければと考えることもなくなった。さらに、世間体を気にするようになりむやみに飲み会などに行かないように心掛けるようになった。Dはそういった考え方の変化は、自分に家族がいるからこそそのものだと考え、親になれたことをとても感謝している。また、D自身の母親が母子家庭でいながら4人もの子どもを育ててくれたことに対して「感謝の気持ちでいっぱい」で、虐待を受けることもなく幸せだったと振り返っている。

D自身が母親となり、夫という「意味ある他者」を獲得し、葛藤を抱えながら子どもを受け

入れるようになることで家族を持つことの有難さを実感し、出生家族において元々「意味ある他者」であった母親に準拠しなおすことになり、それまでの過酷な経験によって崩れかけていた準拠枠を取り戻したと考えられる。

「Dの社会化過程」

Dは家族と生活していた時点で母親を「意味ある他者」として獲得しており、対人関係において「相互に信頼する」という標準的な枠組を形成していたと考えられる。しかし、姉の病状悪化によって母親自身も精神的におかしくなり、そのまま帰らぬ人となった。さらにDは、施設で暴力を受け続けた経験や学校でのいじめなどによって拠り所を完全に失っていたと考えられる。その後も、不安定な生活を繰り返していたDだが、職場でのいじめがきっかけとなって高校卒業と栄養士の資格を目指すようになり、結婚と出産・子育てを機に葛藤を抱えつつも徐々に安定した生活を取り戻していった。その中で夫が「意味ある他者」となり、「意味ある他者」であった母親に準拠して得た対人関係の枠組を取り戻し、標準的な準拠枠を形成することで社会化を遂げてきたと考えられる。さらに、Dは施設入所当時の職員や天理教の会長などの教示が自分の価値観や人生観などに繋がっていると受け止めている。Dの準拠枠形成には宗教の教えが影響していることが十分に考えられる。

第四節 総合考察

ここまで、全29事例を対象に分析、考察を行ってきた。そこで最後に被虐待経験有群と被虐待経験無群の比較及び、被虐待経験有群と被虐待経験想定群の比較を行い、加えて仮説の検証をしたい。

第一項 被虐待経験有群と被虐待経験無群の比較

被虐待経験有群である事例1、3と被虐待経験無群である事例2、4は共に、家族での生活に始まり施設での生活や施設退所後の生活の中で様々な葛藤を抱えながら結果的に「意味ある

他者」を獲得し、標準的な準拠枠を形成することができたと言える。しかし、いずれの事例についても、比較的早期の段階で「意味ある他者」を獲得していたと考えられる。A、Bにとっては父親が、Cにとっては駄菓子屋の店主が、Dにとっては母親がそれぞれ初期段階の「意味ある他者」となって、その後の「意味ある他者」獲得の素地を築き、その後の「意味ある他者」を獲得するきっかけになったと考えられる。

質問紙の結果では、被虐待経験有群の方が転職の割合が高く、施設入所ときに信頼できる人物や尊敬できる人物が殆どいない傾向が示されたが、事例1～4を見ると、虐待の有無に限らず、施設内では入所児間の力関係が否応なく存在し、程度や内容こそ違ってもそれぞれの入所児が生き抜くための闘いがあることがわかる。

今回の調査結果からは、被虐待経験の有無による社会化への影響に関する差異性についてははっきりとは見られなかった。それ以上に、被虐待の有無に関わらず、施設入所経験が個人にとってプラスにもマイナスにも働き、個人の社会化を促進する要素と阻害する要素の両面をもっていることが確認された。

第二項 被虐待経験有群と被虐待経験想定群の比較

まず、事例1と事例12とを比較すると、二人は兄弟であったが、事例1のAは父親から厳しくしつけられており、事例12の弟は、当時は幼かったので父親から厳しくしつけられることは無かった。兄は、施設入所を通して結果的に父親を「意味ある他者」として獲得することになり、高校の学級担任にも信頼を置いていた。他方で、弟は当時、施設職員が尊敬でき信頼できる人物としており、兄と同様に「意味ある他者」を獲得できていたと考えられる。また、弟は進路決定の基準を「兄」と回答しており、Aが弟にとっての「意味ある他者」であった可能性もある。今回は、弟に関しては質問紙でのデータ収集となったために詳細な考察が行えないが、今後、弟にもインタビュー調査を行い、兄弟間における社会化の相違などについても考察を深めていきたい。

事例28については、施設入所当時、施設職員と「殴り合う位にぶつかった」と回答しており、自分のことを見ていてくれたと考えているが、信頼できる人物や尊敬できる人物はいなかった。さらに、自らの施設生活経験を否定的に捉えており、「同年代を見下すようになった」という。この点に関しては、事例3のCが施設入所ときに他の入所児を蔑み、自分のほうが優位でありたいと考えていたことに共通する部分があると考えられる。事例28については質問紙の回答のみでしかデータが得られないが、今回の調査で明らかになった、施設内における入所児間の力関係は、入所児それぞれが自らのステータスを保つために日々戦略を練り闘うことに

繋がる。そのため、事例 28 については、他者と自分との関係を考える際に、C 同様に相手よりも優位に立ちたいという考えから、相手を蔑み見下すことで自らのステータスを保つようになったとも考えられる。この点においては類似性が示されたとも考えられる。

客観的に虐待が行われたと考えられる事例であっても、本人がそれを被虐待と捉えるか否かによる、「意味ある他者」獲得をはじめとする社会化過程への影響については、さらに質的に深みのある考察を行うために、調査方法などを検討していく必要があると考えられる。

第三項 仮説の検証

ここまで、被虐待経験を持つ児童養護施設入所経験者の社会化過程を明らかにすることを目的として、施設退所者への調査結果で得た 29 事例について分析、考察を行ってきた。それらの考察をもとに、今回設定した仮説の検証を行いたい。

まず、下位仮説 1「施設入所経験者の中でも、被虐待経験を持つの方が持たないものと比べて『意味ある他者』の獲得が難しい」については証明されなかった。質問紙調査の結果では、被虐待経験者の内全員が施設入所中に尊敬できる人物は「いない」と回答し、信頼できる人物については 7 人中 6 人が「いない」と回答している。このことから、被虐待経験者は「意味ある他者」の獲得が難しいと考えられる。しかし、インタビューを通して深く掘り下げ、「意味ある他者」の存在を確認した事例 1～4 とは異なり、質問紙調査の事例については、「意味ある他者」を獲得できていたか否かについて判断することが難しい。そのため、ここでは仮説を証明できたとは言いきれない。しかし、被虐待経験無群については、ネグレクト事例が含まれている可能性があり、さらに掘り下げることで被虐待経験の有無による傾向性をつかむことができると考えられる。

下位仮説 2「被虐待経験を持つ施設入所経験者の社会化は、初めに獲得する『意味ある他者』が親以外の人物であっても可能である」については証明された。事例 3 では、C にとって近所の駄菓子屋の店主が「意味ある他者」としての機能を果たし、C が標準的な準拠枠を形成するきっかけとなった。ただし、C の事例は心理的虐待であり、C はその経験によって多大な負の影響を受けることになったわけであるが、この仮説については、深刻な身体的虐待や性的虐待などは異なった結果が得られる可能性がある。

下位仮説 3「被虐待経験者の場合、標準的な準拠枠を形成していることが生殖家族での虐待の防止に繋がる」については証明された。事例 3 では、自分も子どもに対して親と同じようなことをしてしまうのではないかという不安を持っていた。しかし、塾の先輩講師との関わりや自らたくさんの育児書を読むことによって標準的な準拠枠を形成し、さらには C とは対照的に全く不安を持っていない妻の存在によって C は支えられている。被虐待の事例ではないが、事

例4のDは親から虐待を受けた経験はないものの、長年にわたって施設内で暴力を受けたり学校でいじめられたりした経験を持つ。中山(2011)は、家族から虐待を受けていた者が施設内においても暴力を受けることを「再虐待」とし、その入所児間における暴力を放置することを「ネグレクト」だという⁴⁶。Dの場合、元々虐待を受けていないため「再虐待」ではないが、施設内で虐待を受けていたと捉えることができる。また、職員の対応についてはD自身が職員に対して、必死に話を聞いてくれたが解決策はなかったから仕方がないと受け止めているため、必ずしも放置されていたわけではないが、暴力を長年受け続けていたことは事実であり、現象としてはネグレクトに近い形であると捉えることができる。このように、施設に入所することで虐待を受けたDは、自身が母親になった際に虐待まがいなことをしてしまっていた。しかし、失敗と反省を繰り返し、出生家族において自分を懸命に育ててくれた母親に感謝し、再び標準的な準拠を獲得することができたことにより、虐待まがいなことをすることはなくなった。

下位仮説4「客観的に虐待を受けていたと考えられる者の中でも、その経験を被虐待として意味づけていない者の方が、被虐待と意味づけている者に比べて「意味ある他者」を獲得し社会化を遂げる余地がある」については証明されなかった。今回の調査では証明に足るデータを得ることが出来なかった。そもそも、被虐待と意味づけていない者はつまり、親を肯定的な人物である「意味ある他者」として獲得していると考えられる者である。事例1と事例12の比較では、同じ虐待事例において兄は被虐待と捉え、弟は捉えていなかったが、両者ともに「意味ある他者」を獲得していると考えられる。この点については、施設入所以前に兄は父親から厳しく躰けられ、弟はそうされなかったという点が影響しているとも考えられるが、詳細は不明である。そのため、今後さらなる調査が必要となる。

下位仮説5「児童養護施設は、一般に社会化の場と言われる家族・仲間集団などの要素を複合的に持っている」についてはその可能性が示唆された。まず、施設職員と入所児という家族における親と子に類似した関係については、事例2のBのように施設職員が「意味ある他者」として獲得されることがある。次に、入所児同士という仲間集団に類似した関係については、Bが言うように施設では「ボスの存在」の入所児が出てくるのが普通であり、Dのように行き過ぎた力関係も存在するが、入所児同士には力関係が否応なしにありそこには施設によって個別に枠組みがあると考えられる。筆者の参与観察においても、年長児の作ったルールに年少児など力の弱いものが従うという構図が見られた。このように、他者との関わりを力の支配によって調整することを枠組に準拠して、入所児集団において社会化を遂げていると考えられる。

⁴⁶ 中山万里子 児童養護施設における子ども暴力 白鷗大学教育学部論集 5(1) 155-181 頁 176頁 2011年

以上のように、下位仮説の全ては証明されなかったものの、全体仮説についてはおおむね証明されたと言える。事例 1、3 の A、C それぞれは、これまでの人生において様々な危機的状況に直面してきたが、「意味ある他者」との相互行為によって獲得した準拠枠をもってそれらに対応し、社会化を遂げてきた。加えて、事例 2 は、父親という「意味ある他者」から施設入所後も愛情を受け続け、家族という集団における標準的な準拠枠しており、被虐待経験を問わず、児童養護施設入所経験者にとっての社会化は一般と同様に「意味ある他者」獲得によって標準的な準拠枠を形成することによって可能であることが示唆された。ただし事例 4 のように、出生家族において母親という「意味ある他者」との相互行為によって、家族という集団における準拠枠を形成していながら、家族の崩壊と施設内における仲間からの暴力などの過酷な経験によって、拠り所を失いかけていた。そのため、一般と比較して児童養護施設入所経験者は危機的状況に置かれる可能性が高く、それゆえに準拠枠が崩れてしまう危険性を常に持ち合わせていると考えられる。

第五章 結論

本研究が明らかにしてきた、被虐待経験を持つ児童養護施設入所経験者の社会化には、個人が「意味ある他者」の存在を必要とし、その結果として標準的な準拠枠を形成することが可能になるということが示唆された。事例3のCを例に挙げると、Cは家族において心理的虐待を受け情緒不安定になっており衝動性や攻撃性が強く表れていた。しかし、駄菓子屋の店主との相互行為を通して他者に受容される経験を持ち、対人関係の基礎となる、互いに相手を受け入れようとする施設を獲得することで標準的な社会化を遂げる素地を築くことができた。そのように素地ができていたからこそ、その後も塾の先輩講師との相互行為によって、それまでの対人関係の持ち方を省みることになり、子育てを含む具体的な対人関係の持ち方を再統合していった。

また、事例4から、児童養護施設に入所することは入所児同士の力関係の中で生き抜いていく力となり、人生を生き抜く出発点ともなることが示唆された。大勢の入所児が一緒に生活する環境においては、事例2のBが述べるように、入所児が「自分に目が向けられてない」と感じてしまうことも他の入所児と競い合うきっかけになると考えられる。他者との競争は、兄弟の間や仲間集団においてもあると考えられるが、施設内においてその競争が「度を越える」とDが経験してきたように、上記の中山(2011)の言葉を借りれば施設での「虐待」となるのである。そして、Dがそうであったように、施設内での仲間による虐待は個人の標準的な準拠枠を崩し、対人関係において一般に通用しない枠組みを個人に形成させるきっかけにもなると考えられる。それゆえ、施設入所は入所児の社会化を遂げる分岐点ともなり、このため、ケースによっては社会化を阻害するきっかけともなりうる。だからこそ、今回の量的観察を試みた29事例及び、インタビューによる観察を試みた4事例により示してきたように、被虐待経験者を含む児童養護施設入所経験者には「意味ある他者」がきわめて重要な役割を果たし、その獲得如何が社会化を遂げるために必要となる標準的な準拠枠を獲得する鍵となるのである。

おわりに

この度の修士論文作成にあたって、指導教官の蓮尾直美教授にはご多忙の折にも関わらず、ご指導ご鞭撻いただき、教育社会学ゼミの学生や伊藤幹郎先生には論文の添削などを分担して頂き、この場を借りて感謝申し上げます。また、調査に協力して頂いた児童養護施設と、デリケートな問題にも関わらず、惜しみなく情報を提供して下さった調査協力者の方々、そして参与観察に関わって、私を受け入れてくれた施設の入所児たちに対しても深くお礼申し上げます。

筆者は来年度から、児童養護施設の職員として入所児の社会化過程に直接関わっていくこととなります。本研究では抽出することのできなかつた、リアルタイムでの施設入所経験者の社会化過程を観察することになり、「意味ある他者」となる具体的な人物と入所児との相互行為に接近することになります。今後は、児童養護施設職員として、被虐待児を含む施設入所児の社会化過程についての研究をライフワークにしたいと考えています。

アンケート調査へのご協力をお願い

このアンケートは、児童養護施設で生活しておられた方に現在の状況や施設入所中の出来事、また、入所以前の家庭での出来事等、これまでの様々な経験についてお聞きするものです。

これからお尋ねする設問の中には答えにくいものがあるかと思いますが、お答えいただける範囲でご記入ください。

このアンケートの内容は研究以外の目的で使用することはありません。また、個人情報については慎重にあつまい、個人の特特定ができないようにデータ処理を行います。

平成 24 年 10 月

三重大学大学院 教育学研究科

修士 2 年 山川 将吾

210m006@m.mie-u.ac.jp

以下の質問への答えは、とくに断りがなにかぎり、あてはまる番号 1 つに○をつけるか、() に適切な語句を記入してください。

問 1 あなた自身について教えてください。

- | | |
|----------|---|
| ① 性別 | 1. 男 2. 女 |
| ② 年齢 | 1. 10代 2. 20代 3. 30代 4. 40代以上 |
| ③ 最終学歴 | 1. 中学校 2. 普通科高校 3. 職業科高校 4. 定時制高校
5. 各種学校 6. 専門学校 7. 短期大学 8. 4年制大学
9. その他 () |
| ④ あなたは | 1. 未婚(婚約者・恋人あり) 2. 未婚(婚約者・恋人なし)
3. 既婚(子どもあり) 4. 既婚(子どもなし) |
| ⑤ 現在あなたは | 1. 一人暮らし 2. 両親・兄弟と同居 3. 配偶者(恋人)と同居
4. その他 () |
| 現在の住居は | 1. 社宅・寮 2. 間借り、アパート 3. 賃貸マンション
4. 一戸建て 5. その他 () |

問2 これまでの仕事についてお尋ねします。

- ① 現在の仕事は ()
雇用^{こよう}の形態は 1. 正規 2. 非正規 (アルバイト、パート) 3. 自営業
4. 無職 5. その他 ()
- ② 現在の仕事は 勤続 () 年
- ③ 現在の仕事に 1. やりがいを感じる 2. やりがいを感じない
その理由は ()
- ④ 転職の経験は 1. ある 2. ない
その理由は ()
- ⑤ 職場の人間関係で困っていることや問題はありますか。
1. ある 2. ない 3. その他 ()

問3 近所づきあいについてお尋ねします。

- ① 近所とは 1. 私的な交流がある 2. あいさつを交わす程度
3. ほとんど関わらない 4. その他 ()
- ② 自治会行事には 1. 都合をつけて参加する 2. 都合が合えば参加する
3. 都合が合っても参加しない 4. その他 ()
- ③ 近所や自治会とのおつきあいで困っていることや気がかりなことなどは
1. ある 2. ない
具体的には ()

問4 施設を退所されてから現在までのことについてお尋ねします。

- ① (ア) (イ) の設問それぞれについて教えてください。
(ア) 退所時期 1. 高校卒業 2. 中学卒業
3. その他 ()
- (イ) 退所理由 ()

② 施設退所後、どんなことに苦勞されましたか。

1. 困ったことや問題があった際に頼れる人がいなかった。
2. 施設出身者ということで差別を受けた。
3. その他 ()

③ (ア) 施設退所後、次の人物の中で交流がある人はいますか。※複数可

1. 施設職員
2. 同じ施設経験者
3. 学校の先生
4. 学校の友人
5. いない
6. その他 ()

(イ) また、具体的にはどのような交流がありますか。

1. 頻繁に会うことがある。
2. 1年に1,2度は会うことがある。
3. 会うことがないが、電話・メール・手紙で連絡をとることがある。
4. 全く会うこともなく、連絡をとることもない。
5. その他 ()

問5 進学や就職など進路についてお尋ねします。

① 進路を決める際に、どなたか周囲の人に相談されましたか。※複数可

1. 施設職員
2. 学校の先生
3. 友人
4. 先輩
5. 親
6. 誰にも相談しなかった
7. その他 ()

② 進路の最終決定で最も参考にした考え・意見はどなたのものですか。

1. 施設職員
2. 学校の先生
3. 友人
4. 先輩
5. 親
6. その他 ()

問6 施設入所中の生活についてお尋ねします。

① 入所中、あなたが特に「世話をしてくれた」「見ていてくれた」と感じる人はいますか。
具体的にはどなたですか。

1. 担当職員
2. カウンセラー
3. 学校の先生
4. 親
5. いない
6. その他 ()

② ①のように感じる具体的な理由があれば教えてください。

()

③ 尊敬できる人はいましたか。具体的にはどなたですか（直接、関係がない人物でもかまいません。例えば有名人や歴史上の人物等）。

1. いた（具体的な人物： _____）
2. いなかった

④ ③のように感じる具体的な理由があれば教えてください。

[_____]

⑤ 身近に信頼できる人はいましたか。具体的にはどなたですか。

1. いた（具体的な人物： _____）
2. ③の尊敬できる人物と同じ
3. いなかった

⑥ ⑤のように感じる具体的な理由があれば教えてください。

[_____]

⑦ 辛いときや苦しい時、あなたにとって心の支えは何でしたか

1. 施設職員 2. カウンセラー 3. 学校の先生 4. 親 5. 同じ入所者
6. 学校の友人 7. 趣味や物事（スポーツ・読書等）
8. その他（ _____）

問7 学校での対人関係についてお尋ねします。

① 学校にいる時、「同じ施設の子」と「他の友達」とではどちらと多く行動しましたか。

1. 同じ施設の子の方が多かった 2. 他の友達の方が多かった
3. どちらも同じくらい 4. その他（ _____）

② 周囲に対して、自分が施設で生活していることを隠していましたか。小学校・中学校・高校などについてそれぞれ当てはまる番号を記入してください。

小学校（ _____ ） 中学校（ _____ ） 高校など（ _____ ）

1. 誰に聞かれても隠していた 2. 親密な友人だけには明かしていた
3. 聞かれれば誰にでも明かしていた 4. 周りの人は知っていたため隠すまでもなかった
5. その他（ _____）

- ③ 中学校・高校などでの部活動について教えてください。
1. 興味がある部活に入っていた
 2. なんとなく入っていた
 3. 興味がある部活がなかったので入らなかった
 4. 部活動に興味や魅力を感じられず入らなかった
 5. その他 ()
- ④ あなたが「自分のことを理解してくれていた」と思う先生はいますか。
1. 担任の先生
 2. 部活の顧問
 3. 生徒指導の先生
 4. 保健室の先生
 5. いなかった
 6. その他 ()

問 8 あなたのご家族のことについてお尋ねします。

- ① 入所当時の家族構成を教えてください。当てはまる人すべてに○をつけてください。
1. 父親
 2. 母親
 3. 兄 (人)
 4. 姉 (人)
 5. 弟 (人)・妹 (人)
- ② 入所時期はいつですか。
1. 乳児の時
 2. 幼稚園・保育園の (年長・年中・年少)
 3. 小学 (年生)
 4. 中学 (年生)
 5. 高校 (年生)
- ③ 施設へは他のきょうだいの方も一緒に入所しましたか？
1. 自分だけ
 2. 兄 (人)
 3. 姉 (人)
 4. 弟 (人)
 5. 妹 (人)
- ④ 施設への入所理由を周囲 (親・児童相談所・施設) から何と説明されましたか。
[]
- ⑤ あなた自身は、施設への入所理由を当時どのように考えていましたか。
[]
- ⑥ まだ家族と暮らしていたころ、あなたに対する親の態度^{たいど}に対してあなた自身はどのように感じ、ふるまっていましたか。
- (ア) 親の態度について
1. 自分の親は一般の親と同じだと思っていた
 2. 自分の親は一般の親とは違うところがあると思っていた
- (イ) あなたがどのようにふるまっていたか
1. 親の期待に応えようと (認めてもらおうと) していた
 2. がまんして親の言うことをきいていた
 3. 親に反発していた
 4. その他 ()

- ⑦ 施設入所中、父親や母親とはどのようなやりとりがありましたか。また、それらの交流を通して、家族のことや、あなたが施設で生活することなどについて考え直すことはありましたか。具体的にあれば教えてください。※複数可

1. 電話 2. 手紙 3. 外泊 4. その他 ()

[]

- ⑧ 現在、ご家族とはどのような交流がありますか。また、そのような交流をあなたはどのように感じていますか。

(ア) 交流の具体例

1. 頻繁^{ひんぱん}に会うことがある。
2. 1年に1,2度は会うことがある。
3. 会わないが、電話・メール・手紙で連絡をとることがある。
4. 全く会うこともなく、連絡をとることもない。
5. その他 ()

(イ) その交流をどのように感じているか

[]

- ⑨ (ア) 入所する前の当時を振り返るとあなたは虐待を受けていたと思いますか。

1. 思う 2. 思わない

(イ) 誰から受けていたと思いますか。

1. 父親 2. 母親 3. 継父 4. 継母 5. 養父 6. 養母
7. 祖父 8. 祖母 9. その他 ()

- ⑩ 虐待を受けたということを現在はどうのように思っていますか。※複数可

1. 親にも事情があったのだと理解^{りかい}している
2. どうして親が虐待を行ったのか理解^{りかい}できない
3. 自分が親になった時には絶対に虐待をしないと思っている
4. 自分が親になった時に虐待をしてしまうのではないかとと思っている
5. その他 ()

問9 自立まで施設で生活することが決まった時のことについてお尋ねします。

① あなたはその事をどのように受け止められましたか。

1. 前向きに受け入れた
2. なんとか受け入れることができた
3. どうしても受け入れられなかった
4. その他 ()

② ①のように受け止められたきっかけは何だったと思いますか。※複数可

1. 施設で生活していく他に方法がなかったから
2. 施設で生活していくことが自分にとって良いと思ったから
3. 自分のことを理解し、見守ってくれる施設職員がいたから
4. 自分のことを理解し、見守ってくれる学校の先生がいたから
5. 自分と同じような境遇の施設の人がいたから
6. 学校の友人と離れたくなかったから
7. 家に帰りたくなかったから
8. その他 ()

問10 あなたは施設で生活したことを現在はどうのように受け止めていますか。また、その理由を具体的に教えてください。

1. よかった 2. どちらとも言えない 3. よくなかった

()

以上で質問は終わりです。アンケートに答えていただき、ありがとうございました。

この度の調査結果を知りたい方には、調査終了後に結果をお返しさせていただきます。施設から送る方法(1)と、調査者 山川から送る方法があります。希望しない場合も含めて下記の選択肢に○をつけてください。

1. 希望する(施設から) 2. 希望する(山川から) 3. 希望しない
個人宛送付先()

事例 5	
<p>属性：女性 20代 既婚（夫と同居。子どもは無し） 住居は「間借り・アパート」 学歴：定時制高校 卒業 仕事：製造（非正規） 勤続4年（仕事には、やりがいを感じる。「楽しい」）。 転職経験は無し。職場の人間関係でこまっていることは、「ない」。</p>	
問 3	<ul style="list-style-type: none"> ・近所とは、「あいさつを交わす程度」。 ・自治会行事には、「都合が合っても参加しない」。 ・近所や自治会との付き合いで困っていることは、「ない」。
問 4	<ul style="list-style-type: none"> ・退所後に苦勞したことは、「施設出身者ということで差別を受けた」。 ・退所後も交流がある人物は、「施設職員」、「同じ施設出身者」、「学校の友人」。 ・交流は、「会うことはないが、電話・メール・手紙で連絡をとることがある」。
問 5	<ul style="list-style-type: none"> ・進路の相談をしていた相手は、「施設職員」、「友人」。 ・進路の最終決定で最も参考にしたのは、「友人」。
問 6	<ul style="list-style-type: none"> ・入所中、特に見ていてくれたと感じる人物は、「担当職員」。理由は、「無記入」。 ・入所中、尊敬できる人物は、「いなかった」。理由は、「無記入」。 ・入所中、身近に信頼できる人物は、「いなかった」。理由は、「無記入」。 ・辛い時、心の支えになったのは、「同じ入所者」。
問 7	<ul style="list-style-type: none"> ・学校では、「施設入所児以外と一緒にいることが多かった」。 ・中学校では、施設にいる事を「聞かれれば誰にでも明かしていた」。 ・高校では、施設にいる事を「誰に聞かれても隠していた」。 ・中学・高校の部活は、「なんとなく入っていた」。 ・自分の事を理解してくれていたと思う先生は、「いなかった」。
問 8	<ul style="list-style-type: none"> ・入所時の家族構成は、「母、兄（3人）、姉（2人）、本人、弟（1人）」。 ・施設入所は、「中学1年生」の時。「自分だけ」。 ・施設への入所理由を、「親がいないから世話できない」と説明された。 ・当時、入所理由についてどのように考えていたか、「<u>覚えていない</u>」。 ・家族と暮らしていた頃、自分に対する親の態度は、「一般の親とは違うところがあると思っていた」。 その親の態度に対して、自分は「我慢して親の言うことを聞いていた」。 ・入所中の交流は、「外泊」。 ・現在、家族とは、「頻繁に会うことがある」。その交流を、「<u>自然なことだと思っている</u>」。 ・入所する以前、「父親」から「虐待を受けていたと思う」。 ・被虐待経験から、「どうして親が虐待を行ったのか理解できない」。また、「自分が親になった時に虐待をしてしまうのではないかとと思っている」。
問 9	<ul style="list-style-type: none"> ・自立まで施設で生活することが決まった時、そのことを「なんとか受け入れることができた」。その理由は、「施設で生活していく他に方法がなかったから」、「施設で生活していくことが、自分にとっていいと思ったから」、「家に帰らなくなかったから」。
問 10	<p>施設で生活したことを現在は、「よかったともよくなかったとも言えない」と考えている。その理由は、「無記入」。</p>
事例 6	
<p>属性：女性 20代 未婚 住居はケアホーム（社宅・寮） 学歴：普通科高校 卒業 仕事：作業所 勤続4年（仕事には、やりがいを感じる。「すごく作業の職員さんが私に色々まかしてくれます」）。</p>	

<p>転職経験はあり（バイトをしていた時に病気にかかってしまったから）。職場の人間関係でこまっていることは、「ある」。</p>	
問 3	<ul style="list-style-type: none"> ・近所とは、「私的な交流がある」。 ・自治会行事には、「都合が合えば参加する」。 ・近所や自治会との付き合いで困っていることは、「ある」。具体的には、「<u>部屋がとなりなので、よく注意される</u>」。
問 4	<ul style="list-style-type: none"> ・退所後に苦勞したことは、「人との付き合いがうまく取れない」。 ・退所後も交流がある人物は、「施設職員」、「同じ施設出身者」。 ・交流は、「会うことはないが、電話・メール・手紙で連絡をとることがある」。
問 5	<ul style="list-style-type: none"> ・進路の相談をしていた相手は、「施設職員」。 ・進路の最終決定で最も参考にしたのは、「施設職員」。
問 6	<ul style="list-style-type: none"> ・入所中、特に見ていてくれたと感じる人物は、「担当職員」。理由は、「<u>担当の職員さんは最初から最後まで責任をもって見届けてくれて親身に対応してくれました</u>」。 ・入所中、尊敬できる人物は、「いた」。理由は、「<u>職員さんですごく私やみんなを笑って泣いて怒ってを一緒にして立派に見てくれた人が職員さんであります</u>」。 ・入所中、身近に信頼できる人物は、「いた」。理由は、「<u>やっぱり職員さんの力ってすばらしいです。私は何一つ職員さんに悪い点はありません</u>」。 ・辛い時、心の支えになったのは、「施設職員」。
問 7	<ul style="list-style-type: none"> ・学校では、「同じ施設入所児と一緒にいることが多かった」。 ・小学校では、施設にいる事を「周りの人は知っていたため隠すまでもなかった」。 ・中学校では、施設にいる事を「親密な友人だけには明かしていた」。 ・高校では、施設にいる事を「誰に聞かれても隠していた」。 ・中学・高校の部活は、「興味のある部活に入っていた」。 ・自分の事を理解してくれていたと思う先生は、「保健室の先生」。
問 8	<ul style="list-style-type: none"> ・入所時の家族構成は、「父、母、姉（1人）、本人、妹（1人）」。 ・施設入所は、「乳児」の時。「姉（1人）と一緒に」。 ・施設への入所理由を、「説明されたけど覚えていない」。 ・当時、入所理由についてどのように考えていたか、「<u>施設に入所させるくらいだったら産むなって思った</u>」。 ・家族と暮らしていた頃、自分に対する親の態度は、「一般の親とは違うところがあると思っていた」。 その親の態度に対して、自分は「親に反発していた」。 ・入所中の交流は、「電話」と「外泊」。その中で、「<u>一緒に住んでみたいとは思った事がありました</u>」。 ・現在、家族とは、「会わないが、電話・メール・手紙で連絡をとることがある」。その交流を、「<u>うざい無責任って感じる</u>」。 ・入所する以前、「虐待を受けていたと思わない」。
問 9	<ul style="list-style-type: none"> ・自立まで施設で生活することが決まった時、そのことを「どうしても受け入れることができなかった」。その理由は、「無記入」。
問 10	<p>施設で生活したことを現在は、「よかった」と考えている。その理由は、「<u>職員さんが大好きでいつも職員にあまえていられたし、今こうして生きていられる事すごく幸せです。私もがんばるのでこれから施設に入っていく子どもたちが幸せになって欲しいです</u>」。</p>

事例 7	
<p>属性：男性 40代以上 既婚（妻と同居。子どもはあり。） 住居は一戸建て 学歴：中学校 卒業 仕事：会社員 勤続15年（仕事には、やりがいを感じる。「好きな仕事」）。 転職経験はあり、理由は（給料）。職場の人間関係でこまっていることは、「ない」。</p>	
問 3	<ul style="list-style-type: none"> ・近所とは、「あいさつを交わす程度」。 ・自治会行事には、「都合が合えば参加する」。 ・近所や自治会との付き合いで困っていることは、「ない」。
問 4	<ul style="list-style-type: none"> ・退所後に苦勞したことは、「<u>中卒と学歴問題</u>」。 ・退所後も交流がある人物は、「同じ施設出身者」、「学校の友人」。 ・交流は、「1年に1、2度は会うことがある」。
問 5	<ul style="list-style-type: none"> ・進路の相談をしていた相手は、「施設職員」。 ・進路の最終決定で最も参考にしたのは、「施設職員」。
問 6	<ul style="list-style-type: none"> ・入所中、特に見ていてくれたと感じる人物は、「担当職員」。理由は、「無記入」。 ・入所中、尊敬できる人物は、「いなかった」。理由は、「無記入」。 ・入所中、身近に信頼できる人物は、「いなかった」。理由は、「無記入」。 ・辛い時、心の支えになったのは、「学校の友人」、「趣味や物事」。
問 7	<ul style="list-style-type: none"> ・学校では、「施設入所児以外と一緒にいることが多かった」。 ・小学校では、施設にいる事を「聞かれれば誰にでも明かしていた」。 ・中学校では、施設にいる事を「周りの人は知っていたため隠すまでもなかった」。 ・中学・高校の部活は、「興味のある部活に入っていた」。 ・自分の事を理解してくれていたと思う先生は、「担任の先生」。
問 8	<ul style="list-style-type: none"> ・入所時の家族構成は、「姉（2人）、本人」。 ・施設入所は、「幼稚園年長」の時。「姉（2人）と一緒に」。 ・入所する以前、「虐待を受けていたと思わない」。
問 9	無記入。
問 10	施設で生活したことを現在は、「よかった」と考えている。その理由は、「無記入」。
事例 8	
<p>属性：女性 40代以上 既婚（妻と同居。子どもはあり。） 住居は一戸建て 学歴：4年制大学 卒業 仕事：不明 勤続13年（仕事には、やりがいを感じる。） 転職経験はあり。職場の人間関係でこまっていることは、「ある」。</p>	
問 3	<ul style="list-style-type: none"> ・近所とは、「あいさつを交わす程度」。 ・自治会行事には、「都合が合えば参加する」。 ・近所や自治会との付き合いで困っていることは、「ない」。
問 4	<ul style="list-style-type: none"> ・退所後に苦勞したことは、「無記入」。 ・退所後も交流がある人物は、「施設職員」。 ・交流は、「頻繁に会うことがある」。
問 5	<ul style="list-style-type: none"> ・進路の相談をしていた相手は、「施設職員」。 ・進路の最終決定で最も参考にしたのは、「施設職員」。
問 6	<ul style="list-style-type: none"> ・入所中、特に見ていてくれたと感じる人物は、「担当職員」。理由は、「無記入」。 ・入所中、尊敬できる人物は、「いた」。理由は、「無記入」。

	<ul style="list-style-type: none"> ・入所中、身近に信頼できる人物は、「いた」。理由は、「無記入」。 ・辛い時、心の支えになったのは、「施設職員」、「学校の友人」。
問 7	<ul style="list-style-type: none"> ・学校では、「施設入所児とそれ以外の子どもと同じくらい一緒にいた」。 ・小学校では、施設にいる事を「聞かれれば誰にでも明かしていた」。 ・中学校では、施設にいる事を「聞かれれば誰にでも明かしていた」。 ・高校では、施設にいる事を「聞かれれば誰にでも明かしていた」。 ・中学・高校の部活は、「興味のある部活に入っていた」。 ・自分の事を理解してくれていたと思う先生は、「部活の顧問」。
問 8	<ul style="list-style-type: none"> ・入所時の家族構成は、「母親、姉（1人）、本人」。 ・施設入所は、「小学校4年生」の時。「姉（1人）と一緒に」。 ・入所する以前、「虐待を受けていたと思わない」。
問 9	・自立まで施設で生活することが決まった時、そのことを「前向きに受け入れた」。その理由は、「施設で生活していくことが、自分にとっていいと思ったから」。
問 10	施設で生活したことを現在は、「よかった」と考えている。その理由は、「無記入」。
事例 9	
<p>属性：女性 10代 未婚（一人暮らし。） 住居は間借り・アパート 学歴：普通科高校 卒業 仕事：美容師（正規） 勤続半年（仕事には、やりがいを感じる。「お客様に喜んでもらえるから」） 転職経験はなし。職場の人間関係でこまっていることは、「ない」。</p>	
問 3	<ul style="list-style-type: none"> ・近所とは、「ほとんど関わらない」。 ・自治会行事には、「都合が合えば参加する」。 ・近所や自治会との付き合いで困っていることは、「ない」。
問 4	<ul style="list-style-type: none"> ・退所後に苦勞したことは、「1人でいることになれるのが大変でした」。 ・退所後も交流がある人物は、「施設職員」、「同じ施設出身者」、「学校の友人」。 ・交流は、「1年に1、2度は会うことがある」。
問 5	<ul style="list-style-type: none"> ・進路の相談をしていた相手は、「施設職員」、「友人」。 ・進路の最終決定で最も参考にしたのは、「友人」。
問 6	<ul style="list-style-type: none"> ・入所中、特に見ていてくれたと感じる人物は、「担当職員」。理由は、「退所をしても、心配をしてメールをくれたりする」。 ・入所中、尊敬できる人物は、「いた。施設職員」。理由は、「<u>大変な仕事を楽しんでいるから</u>」。 ・入所中、身近に信頼できる人物は、「いた。施設職員」。理由は、「<u>相談しやすかったから</u>」。 ・辛い時、心の支えになったのは、「同じ入所者」、「学校の友人」。
問 7	<ul style="list-style-type: none"> ・学校では、「施設入所児以外の子と一緒にいることが多かった」。 ・小学校では、施設にいる事を「周りの人は知っていたため隠すまでもなかった」。 ・中学校では、施設にいる事を「周りの人は知っていたため隠すまでもなかった」。 ・高校では、施設にいる事を「聞かれれば誰にでも明かしていた」。 ・中学・高校の部活は、「なんとなく入っていた」。 ・自分の事を理解してくれていたと思う先生は、「部活の顧問」。
問 8	<ul style="list-style-type: none"> ・入所時の家族構成は、「母親、本人、妹（1人）」。 ・施設入所は、「乳児、0歳」の時。「姉（1人）と一緒に」。 ・施設への入所理由を、「説明されたけど覚えていない」。 ・当時、入所理由についてどのように考えていたか、「<u>育児困難</u>」。

	<ul style="list-style-type: none"> ・家族と暮らしていた頃、自分に対する親の態度は、「一般の親と同じだと思っていた」。その親の態度に対して、自分は「普通に接していた」。 ・入所中の交流は、「外泊」と「外出」。 ・現在、家族とは、「年に1、2度は会うことがある」。 ・入所する以前、「虐待を受けていたと思わない」。
問 9	無記入。
問 10	施設で生活したことを現在は、「よかった」と考えている。その理由は、「 <u>いろいろなタイプの人</u> がいたので、 <u>人との付き合い方</u> などがわかってよかった」。
事例 10	
属性：女性 40代以上 既婚（離婚し子どもと同居。） 住居は自己マンション 学歴：職業科高校 卒業 仕事：経理事務（正規） 勤続29年（仕事には、やりがいを感じる。「責任者として任されている」）。 転職経験はあり（今の会社に来る様に誘われた）。職場の人間関係でこまっていることは、「ない」。	
問 3	<ul style="list-style-type: none"> ・近所とは、「私的な交流がある」。 ・自治会行事には、「都合が合えば参加する」。 ・近所や自治会との付き合いで困っていることは、「ない」。
問 4	<ul style="list-style-type: none"> ・退所後に苦労したことは、「特になし」。 ・退所後も交流がある人物は、「施設職員」、「同じ施設出身者」。 ・交流は、「1年に1、2度は会うことがある」。
問 5	<ul style="list-style-type: none"> ・進路の相談をしていた相手は、「施設職員」、学校の先生」。 ・進路の最終決定で最も参考にしたのは、「施設職員」。
問 6	<ul style="list-style-type: none"> ・入所中、特に見ていてくれたと感じる人物は、「担当職員」。理由は、「受験勉強の時に、親身になって教えてくれた」。 ・入所中、尊敬できる人物は、「いなかった」。理由は、「無記入」。 ・入所中、身近に信頼できる人物は、「いた。<u>院長含め職員の方</u>」。理由は、「<u>時に厳しく、時に優しい。親のような愛情を受けていた</u>」。 ・辛い時、心の支えになったのは、「学校の友人」。
問 7	<ul style="list-style-type: none"> ・学校では、「施設入所児以外と一緒にいることが多かった」。 ・小学校では、施設にいる事を「周りの人は知っていたため隠すまでもなかった」。 ・中学校では、施設にいる事を「周りの人は知っていたため隠すまでもなかった」。 ・中学・高校の部活は、「興味のある部活に入っていた」。 ・自分の事を理解してくれていたと思う先生は、「いなかった」。
問 8	<ul style="list-style-type: none"> ・入所時の家族構成は、「父親、姉（1人）、本人、弟（1人）」。 ・施設入は、「小学校2年生」の時。「姉（1人）と弟（1人）と一緒に」。 ・施設への入所理由を、「親の入院」と説明された。 ・当時、入所理由についてどのように考えていたか、「仕方ない」。 ・家族と暮らしていた頃、自分に対する親の態度は、「一般の親とは違うところがあると思っていた」。 その親の態度に対して、自分は「無記入」。
	<ul style="list-style-type: none"> ・入所中の交流は、「無記入」。 ・現在、家族とは、「全く会うこともなく、連絡をとることもない」。その交流を、「お互いに会いたいと思わないのでそれで良い」。 ・入所する以前、「虐待を受けていたと思わない」。

問 9	・自立まで施設で生活することが決まった時、そのことを「前向きに受け入れた」。その理由は、「施設で生活していくことが、自分にとっていいと思ったから」。
問 10	施設で生活したことを現在は、「よかった」と考えている。その理由は、「 <u>姉弟共に生活ができ、今思えば、先生たちにも良くしてもらった。規則正しい生活ができ、退所後、改めてとても良い施設でお世話になったと感謝しています</u> 」。
事例 11	
属性：男性 20代 未婚（一人暮らし） 住居は間借り・アパート 学歴：職業科高校 卒業 仕事：土木業（非正規） 勤続3年（仕事には、やりがいを感じない。「つらい」）。 転職経験はあり（続かないから）。職場の人間関係でこまっていることは、「ある」。	
問 3	<ul style="list-style-type: none"> ・近所とは、「ほとんど関わらない」。 ・自治会行事には、「都合が合っても参加しない」。 ・近所や自治会との付き合いで困っていることは、「ある」。「<u>しらない人は、いややから</u>」。
問 4	<ul style="list-style-type: none"> ・退所後に苦労したことは、「困ったことや問題があった際に頼れるひとがいなかった」。 ・退所後も交流がある人物は、「いない」。
問 5	<ul style="list-style-type: none"> ・進路の相談をしていた相手は、「施設職員」、「学校の先生」。 ・進路の最終決定で最も参考にしたのは、「施設職員」。
問 6	<ul style="list-style-type: none"> ・入所中、特に見ていてくれたと感じる人物は、「担当職員」。理由は、「無記入」。 ・入所中、尊敬できる人物は、「いなかった」。理由は、「無記入」。 ・入所中、身近に信頼できる人物は、「いなかった」。理由は、「無記入」。 ・辛い時、心の支えになったのは、「施設職員」。
問 7	<ul style="list-style-type: none"> ・学校では、「同じ施設入所児と一緒にいることが多かった」。 ・中学校では、施設にいる事を「周りの人は知っていたため隠すまでもなかった」。 ・高校では、施設にいる事を「周りの人は知っていたため隠すまでもなかった」。 ・中学・高校の部活は、「部活動に興味や魅力を感じられず入らなかった」。 ・自分の事を理解してくれていたと思う先生は、「無記入」。
問 8	<ul style="list-style-type: none"> ・入所時の家族構成は、「母」。 ・施設へ入所したのは、「小学校4年生」の時。「兄（1人）と一緒に」。 ・施設への入所理由を、「説明はなかった。<u>親にすてられたから</u>」。 ・当時、入所理由についてどのように考えていたか、「<u>わからん</u>」。 ・現在、家族とは、「全く会うこともなく、連絡をとることもない」。 ・入所する以前、「母親」から「虐待を受けていたと思う」。 ・被虐待経験から、「自分が親になった時には絶対に虐待をしないと知っている」。
問 9	無記入。
問 10	施設で生活したことを現在は、「よかったともよくなかったとも言えない」と考えている。その理由は、「無記入」。
事例 12	
属性：男性 20代 未婚（一人暮らし） 住居は間借り・アパート 学歴：職業科高校 卒業 仕事：フィルムの加工（正規） 勤続6年（仕事には、やりがいを感じる。「仕事に対して、新しい発見があるのが楽しい」）。 転職経験は無し。職場の人間関係でこまっていることは、「ない」。	

問 3	<ul style="list-style-type: none"> ・近所とは、「あいさつを交わす程度」。 ・自治会行事には、「都合が合えば参加する」。 ・近所や自治会との付き合いで困っていることは、「ない」。
問 4	<ul style="list-style-type: none"> ・退所後に苦労したことは、「ない」。 ・退所後も交流がある人物は、「施設職員」。 ・交流は、「1年に1、2度は会うことがある」。
問 5	<ul style="list-style-type: none"> ・進路の相談をしていた相手は、「学校の先生」、「友人」、「親」。 ・進路の最終決定で最も参考にしたのは、「兄」。
問 6	<ul style="list-style-type: none"> ・入所中、特に見ていてくれたと感じる人物は、「担当職員」。理由は、「無記入」。 ・入所中、尊敬できる人物は、「いた、施設の先生方」。理由は、「無記入」。 ・入所中、身近に信頼できる人物は、「いた、施設の先生方」。理由は、「無記入」。 ・辛い時、心の支えになったのは、「施設職員」。
問 7	<ul style="list-style-type: none"> ・学校では、「施設入所児以外とそれ以外の子とは同じくらい一緒にいた」。 ・小学校では、施設にいる事を「聞かれれば誰にでも明かしていた」 ・中学校では、施設にいる事を「聞かれれば誰にでも明かしていた」。 ・高校では、施設にいる事を「聞かれれば誰にでも明かしていた」。 ・中学・高校の部活は、「興味のある部活に入っていた」。 ・自分の事を理解してくれていたと思う先生は、「部活の顧問」。
問 8	<ul style="list-style-type: none"> ・入所時の家族構成は、「父親、兄(2人)、本人、弟(1人)」。 ・施設入所は、「小学校3年生」の時。「兄(2人)と弟(1人)と一緒に」。 ・施設への入所理由を、「特に何も」説明されなかった。 ・当時、入所理由についてどのように考えていたか、「よくわからなかった」。 ・家族と暮らしていた頃、自分に対する親の態度は、「一般の親とは同じだと思っていた」。その親の態度に対して、自分は「親の期待に応えようとしていた」。 ・入所中の交流は、「外泊」。 ・現在、家族とは、「1年に1、2度は会うことがある」。 ・入所する以前、「虐待を受けていたと思わない」。
問 9	無記入。
問 10	施設で生活したことを現在は、「よかった」と考えている。その理由は、「 <u>周囲の人たちの支えが無ければ人は生きていけないと考えるようになった</u> 」。

事例 13

属性：女性 20代 既婚(離婚。子どもは無し) 住居はグループホーム
 学歴：無記入
 仕事：赤福(無記入) 勤続3年 (仕事は「ふつう」)。
 転職経験は無し。職場の人間関係でこまっていることは、「無記入」。

問 3	<ul style="list-style-type: none"> ・近所とは、「あいさつを交わす程度」。 ・自治会行事には、「都合が合っても参加しない」。 ・近所や自治会との付き合いで困っていることは、「ない」。
問 4	<ul style="list-style-type: none"> ・退所後に苦労したことは、「無記入」。 ・退所後も交流がある人物は、「施設職員」、「同じ施設出身者」、「学校の先生」、「学校の友人」。 ・交流は、「会うことはないが、電話・メール・手紙で連絡をとることがある」。
問 5	<ul style="list-style-type: none"> ・進路の相談をしていた相手は、「施設職員」、「学校の先生」。

	<ul style="list-style-type: none"> ・進路の最終決定で最も参考にしたのは、「施設職員」、「学校の先生」。
問 6	<ul style="list-style-type: none"> ・入所中、特に見ていてくれたと感じる人物は、「担当職員」。理由は、「無記入」。 ・入所中、尊敬できる人物は、「無記入」。理由は、「無記入」。 ・入所中、身近に信頼できる人物は、「無記入」。理由は、「無記入」。 ・辛い時、心の支えになったのは、「施設職員」、「学校の先生」。
問 7	<ul style="list-style-type: none"> ・学校では、「同じ施設入所児と一緒にいることが多かった」。 ・小学校では、施設にいる事を「聞かれれば誰にでも明かしていた」 ・中学校では、施設にいる事を「聞かれれば誰にでも明かしていた」。 ・高校では、施設にいる事を「聞かれれば誰にでも明かしていた」。 ・中学・高校の部活は、「興味のある部活に入っていた」。 ・自分の事を理解してくれていたと思う先生は、「担任の先生」。
問 8	<ul style="list-style-type: none"> ・入所時の家族構成は、「母、本人、妹(1人)」。 ・施設入所は、「乳児」の時。「妹(1人)」。
問 9	自立まで施設で生活することが決まった時、そのことを「前向きに受け入れた」。その理由は、「自分のことを理解し、見守ってくれる施設職員がいたから」。
問 10	施設で生活したことを現在は、「よかったともよくなかったとも言えない」と考えている。その理由は、「無記入」。

事例 14

属性：男性 20代 未婚(一人暮らし) 住居は社宅・寮
 学歴：普通科高校 卒業
 仕事：製造業(正規) 勤続3年 (仕事には、やりがいを感じない。「最近仕事内容が変わり、自分の思っている内容と違っているから」)。
 転職経験は無し。職場の人間関係でこまっていることは、「ある」。「上司と上手くいっていない」。

問 3	<ul style="list-style-type: none"> ・近所とは、「ほとんど関わらない」。 ・自治会行事には、「都合が合っても参加しない」。 ・近所や自治会との付き合いで困っていることは、「ない」。
問 4	<ul style="list-style-type: none"> ・退所後に苦労したことは、「困ったことや問題があった際に頼れる人がいなかった」。 ・退所後も交流がある人物は、「施設職員」、「同じ施設出身者」。 ・交流は、「1年に1、2度は会うことがある」、「会うことはないが、電話・メール・手紙で連絡をとることがある」。
問 5	<ul style="list-style-type: none"> ・進路の相談をしていた相手は、「施設職員」。 ・進路の最終決定で最も参考にしたのは、「施設職員」。
問 6	<ul style="list-style-type: none"> ・入所中、特に見ていてくれたと感じる人物は、「担当職員」。理由は、「<u>自分の事を良く考えて見てくれていると感じる事が多かった</u>」。 ・入所中、尊敬できる人物は、「いなかった」。理由は、「<u>性格上人を信じれない自分がいた</u>」。 ・入所中、身近に信頼できる人物は、「いなかった」。理由は、「<u>性格上人を信じれない自分がいた</u>」。 ・辛い時、心の支えになったのは、「施設職員」。
問 7	<ul style="list-style-type: none"> ・学校では、「同じ施設入所児と一緒にいることが多かった」。 ・小学校では、施設にいる事を「周りの人は知っていたため隠すまでもなかった」 ・中学校では、施設にいる事を「聞かれれば誰にでも明かしていた」。 ・高校では、施設にいる事を「誰に聞かれても隠していた」。 ・中学・高校の部活は、「なんとなく入っていた」。

問 8	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の事を理解してくれていたと思う先生は、「担任の先生」。 ・入所時の家族構成は、「母、兄（2人）、本人」。 ・施設入所は、「幼稚園年少」の時。「兄（2人）と一緒に」。 ・施設への入所理由を、「(説明は) 幼い頃だったのであまり覚えていないが、両親が離婚し、父親に引きとられたが育てられなくなった為」。 ・当時、入所理由についてどのように考えていたか、「最初は、ショックだった。でもなんとか受け止めた」。 ・家族と暮らしていた頃、自分に対する親の態度は、「一般の親と同じだと思っていた」。その親の態度に対して、自分は「(どう振舞っていたか) あまり覚えていない」。 ・入所中の交流は、「手紙」、「外泊」。その中で、「母が親権を持っていない事を高校生で知ってショックを受けて、ずっと母は、親権を持っていると思っていたので、もっと早く知っていれば今の自分の性格も変わっていたのだろうと思います」。 ・現在、家族とは、「会わないが、電話・メール・手紙などで連絡をとることはある」。その交流を、「なんか家族じゃないみたいな感じ」。 ・入所する以前、「虐待を受けていたと思わない」。
問 9	<ul style="list-style-type: none"> ・自立まで施設で生活することが決まった時、そのことを「なんとか受け入れることができた」。その理由は、「自分のことを理解し、見守ってくれる施設職員がいたから」。
問 10	<ul style="list-style-type: none"> 施設で生活したことを現在は、「よかったともよくなかったとも言えない」と考えている。その理由は、「正直自分の言いたい事が言えなかった。後、施設で育った事をなかなか言い出せない事が悩みになってしまふことが多かったから」。
事例 15	
<p>属性：女性 20代 未婚（一人暮らし） 住居は間借り・アパート 学歴：専門学校 卒業 仕事：障害者福祉（グループホーム職員）（正規） 勤続5年（仕事には、やりがいを感じる。「必要とされていると感じるから」）。</p> <p>転職経験はあり。「続かない。嫌になってしまう」。職場の人間関係でこまっていることは、「ない」。</p>	
問 3	<ul style="list-style-type: none"> ・近所とは、「ほとんど関わらない」。 ・自治会行事には、「都合が合っても参加しない」。 ・近所や自治会との付き合いで困っていることは、「ない」。「アパートで1人暮らしだし、周りも独居ばかりだから」。
問 4	<ul style="list-style-type: none"> ・退所後に苦労したことは、「とにかくお金が無い」。 ・退所後も交流がある人物は、「施設職員」、「同じ施設出身者」、「学校の友人」。 ・交流は、「1年に1、2度は会うことがある」。
問 5	<ul style="list-style-type: none"> ・進路の相談をしていた相手は、「施設職員」、「学校の先生」。 ・進路の最終決定で最も参考にしたのは、「自分」。
問 6	<ul style="list-style-type: none"> ・入所中、特に見ていてくれたと感じる人物は、「担当職員」。理由は、「誕生日に、ケーキやカードでお祝いしてくれた。学校の三者懇談などに来てくれた」。 ・入所中、尊敬できる人物は、「いなかった」。理由は、「無記入」。 ・入所中、身近に信頼できる人物は、「いた、母」。理由は、「裏切らないから」。 ・辛い時、心の支えになったのは、「親」、「趣味や物事」。
問 7	<ul style="list-style-type: none"> ・学校では、「高校と同じ施設の子がなかった」。 ・高校では、施設にいる事を「親密な友達だけには明かしていた」。

問 8	<ul style="list-style-type: none"> ・中学・高校の部活は、「興味がある部活に入っていた」。 ・自分の事を理解してくれていたと思う先生は、「担任の先生」。 ・入所時の家族構成は、「父、母、兄（1人）、本人、弟（1人）」。 ・施設入所は、「高校1年生」の時。「自分だけ」。 ・施設への入所理由を、「自分で望んで入ったので、特に説明はなかったと思います。中学3年生まで津のあすなろ学園にいて、中学卒業で実家に帰らなくては行けなかったが、どうしても帰りがたくなかったので、自分で入所を希望した」。 ・当時、入所理由についてどのように考えていたか、「自分が高校に通える最善の方法だと思った」。 ・家族と暮らしていた頃、自分に対する親の態度は、「一般の親と違うところがあると思っていた」。その親の態度に対して、自分は「(どう振舞っていたか) 特に親を意識してふるまっていなかった。と思う。がまんしてなかったし、反発もしてなかった」。 ・入所中の交流は、「電話」、「外泊」。 ・現在、家族とは、「1年に1、2度は会うことがある」。その交流を、「盆、正月の恒例行事」。 ・入所する以前、「父親知人」から「虐待を受けていたと思う」。 ・被虐待経験から、「自分が親になった時には絶対に虐待をしないとと思っている」、「自分が親になった時に虐待をしてしまうのではないかとと思っている」、「虐待さえなければ、もっとまともな人間関係を築いたり、もっとまともな人生が送れたのに」。
問 9	<ul style="list-style-type: none"> ・自立まで施設で生活することが決まった時、そのことを「前向きに受け入れた」。その理由は、「施設で生活していく他に方法がなかったから」、「施設で生活していくことが自分にとって良いと思ったから」、「家に帰りがたくなかったから」。
問 10	<ul style="list-style-type: none"> 施設で生活したことを現在は、「よかった」と考えている。その理由は、「もともと不登校児だったので、実家に戻ると学校を休んでしまい辞めてしまうのが目に見えていたから。施設にいたから、高校を卒業することができた。施設にいれば、親にお金がかからないので、実家の経済状況を気にしないで過ごせた。実家よりも、自分のスペースが確保されていた」。
事例 16	
<p>属性：女性 20代 未婚（恋人と同居。） 住居は間借り・アパート 学歴：職業科高校 卒業 仕事：貴金属買い取り（非正規、パート） 勤続4か月（仕事には、やりがいを感じる。「自分のペースで仕事ができる」）。</p> <p>転職経験はあり。「引越し」。職場の人間関係でこまっていることは、「ある」。</p>	
問 3	<ul style="list-style-type: none"> ・近所とは、「あいさつを交わす程度」。 ・自治会行事には、「行事があるかもわからない」。 ・近所や自治会との付き合いで困っていることは、「ない」。
問 4	<ul style="list-style-type: none"> ・退所後に苦労したことは、「困ったことや問題があった際に頼れる人がいなかった」。 ・退所後も交流がある人物は、「施設職員」、「学校の友人」。 ・交流は、施設職員とは「会うことはないが、電話・メール・手紙で連絡をとることがある」。学校の友人は「頻繁に会うことがある」。
問 5	<ul style="list-style-type: none"> ・進路の相談をしていた相手は、「施設職員」。 ・進路の最終決定で最も参考にしたのは、「施設職員」。
問 6	<ul style="list-style-type: none"> ・入所中、特に見ていてくれたと感じる人物は、「いない」。理由は、「私はたくさん児童会の中の1人。特別私に興味を持っている人はいなかった。仕事だからある程度は世話はしてもらえがとくに上記（「世話をしてくれた」「見ていてくれた」）の様に感じる人はいませんでした」。

	<ul style="list-style-type: none"> ・入所中、尊敬できる人物は、「いなかった」。理由は、「<u>他人に興味はなかった。すごい事をしていても興味はない。</u>」。 ・入所中、身近に信頼できる人物は、「いなかった」。理由は、「<u>みんな愛想笑い。真剣に話を聞いてくれる人はいなかった。</u>」。 ・辛い時、心の支えになったのは、「趣味や物事」。
問 7	<ul style="list-style-type: none"> ・学校では、「施設入所児以外と一緒にいることが多かった」。 ・小学校では、施設にいる事を「周りの人は知っていたため隠すまでもなかった」。 ・中学校では、施設にいる事を「周りの人は知っていたため隠すまでもなかった」。 ・高校では、施設にいる事を「聞かれれば誰にでも明かしていた」。 ・中学・高校の部活は、「<u>中学は入らなければならなかった。高校では、部活動に興味や魅力を感じられなかった。</u>」。 ・自分の事を理解してくれていたと思う先生は、「いなかった」。
問 8	<ul style="list-style-type: none"> ・入所時の家族構成は、「母、兄（1人）、本人、妹（1人）」。 ・施設入所は、「小学校1年生」の時。「兄（1人）と妹（1人）と一緒に」。 ・施設への入所理由を、「<u>親が食事をあたえなかった</u>」と説明された。 ・当時、入所理由についてどのように考えていたか、「<u>特に何も感じていなかったと思う。覚えていない。</u>」。 ・家族と暮らしていた頃、自分に対する親の態度は、「一般の親と違うところがあると思っていた」。その親の態度に対して、自分は「（どう振舞っていたか）<u>親は家にいる時はねていたから特にかかわってなかったと思う。</u>」。 ・入所中の交流は、「手紙」。その中で、「<u>いつもごめんと謝っていた。一時期家に戻れる様がんばっていたが実際は口だけだと思う。</u>」。 ・現在、家族とは、「1年に1、2度は会うことがある」。その交流を、「<u>一応親だから。</u>」。 ・入所する以前、「母親」から「虐待を受けていたと思う」。 ・被虐待経験から、「自分が親になった時には絶対に虐待をしないと思っている」。
問 9	<ul style="list-style-type: none"> ・自立まで施設で生活することが決まった時、そのことを「前向きに受け入れた」。その理由は、「施設で生活していく他に方法がなかったから」、「施設で生活していくことが自分にとって良いと思ったから」、「家に帰りたくなかったから」。
問 10	施設で生活したことを現在は、「よかった」と考えている。その理由は、「 <u>施設にいたから今健康に生きている。家にいたら絶対不健康だった。</u> 」。

事例 17

<p>属性：男性 20代 未婚（一人暮らし） 住居は社宅・寮 学歴：普通科高校 卒業 仕事：介護職（正規） 勤続2年（仕事には、やりがいを感ずる）。 転職経験はあり。職場の人間関係でこまっていることは、「ない」。</p>	
問 3	<ul style="list-style-type: none"> ・近所とは、「あいさつを交わす程度」。 ・自治会行事には、「都合が合っても参加しない」。 ・近所や自治会との付き合いで困っていることは、「ない」。
問 4	<ul style="list-style-type: none"> ・退所後に苦労したことは、「<u>金がない。</u>」。 ・退所後も交流がある人物は、「施設職員」、「同じ施設経験者」、「学校の友人」。 ・交流は、施設職員や同じ施設経験者とは「1年に1、2度は会うことがある」。学校の友人は「頻繁に会うことがある」。
問 5	・進路の相談をしていた相手は、「施設職員」、「学校の先生」、「友人」。

	<ul style="list-style-type: none"> ・進路の最終決定で最も参考にしたのは、「施設職員」。
問 6	<ul style="list-style-type: none"> ・入所中、特に見ていてくれたと感じる人物は、「いない」。理由は、「<u>本当の父、母のようにして下さった。</u>」。 ・入所中、尊敬できる人物は、「いなかった」。理由は、「無記入」。 ・入所中、身近に信頼できる人物は、「いた、施設スタッフ」。理由は、「無記入」。 ・辛い時、心の支えになったのは、「施設職員」、「同じ入所者」、「学校の友人」。
問 7	<ul style="list-style-type: none"> ・学校では、「施設入所児以外と一緒にいることが多かった」。 ・小学校では、施設にいる事を「周りの人は知っていたため隠すまでもなかった」。 ・中学校では、施設にいる事を「周りの人は知っていたため隠すまでもなかった」。 ・高校では、施設にいる事を「聞かれれば誰にでも明かしていた」。 ・中学・高校の部活は、「興味がある部活に入っていた」。 ・自分の事を理解してくれていたと思う先生は、「担任の先生」、「部活の顧問」、「保健室の先生」。
問 8	<ul style="list-style-type: none"> ・入所時の家族構成は、「父、母、本人、妹（1人）」。 ・施設入所は、「幼稚園年長」の時。「妹（1人）と一緒に」。 ・施設への入所理由を、「<u>わからない（小さかったので）。</u>」。 ・当時、入所理由についてどのように考えていたか、「<u>特に考えなかった（考える年になるころにはいることが当然でここが実家という感じだった）。</u>」。 ・入所中の交流は、「外泊」。 ・現在、家族とは、「1年に1、2度は会うことがある」。 ・入所する以前、「虐待を受けていたかどうかわからない」。
問 9	無記入。
問 10	施設で生活したことを現在は、「よかった」と考えている。その理由は、「 <u>施設のスタッフ、共に暮らした仲間がいなかったら今の自分がなかったと思ったから。</u> 」。

事例 18

<p>属性：男性 10代 未婚（一人暮らし） 住居は社宅・寮 学歴：普通科高校 卒業 仕事：調理師見習い（正規） 勤続不明（仕事には、やりがいを感ずらない。「目標がさだまっていない」）。 転職経験はなし。職場の人間関係でこまっていることは、「ない」。</p>	
問 3	<ul style="list-style-type: none"> ・近所とは、「ほとんど関わらない」。 ・自治会行事には、「都合が合っても参加しない」。 ・近所や自治会との付き合いで困っていることは、「ない」。
問 4	<ul style="list-style-type: none"> ・退所後に苦労したことは、「無記入」。 ・退所後も交流がある人物は、「施設職員」、「同じ施設経験者」、「学校の友人」。 ・交流は、「頻繁に会うことがある」。
問 5	<ul style="list-style-type: none"> ・進路の相談をしていた相手は、「施設職員」、「学校の先生」。 ・進路の最終決定で最も参考にしたのは、「無記入」。
問 6	<ul style="list-style-type: none"> ・入所中、特に見ていてくれたと感じる人物は、「担当職員」。理由は、「無記入」。 ・入所中、尊敬できる人物は、「いなかった」。理由は、「無記入」。 ・入所中、身近に信頼できる人物は、「いた、施設の職員」。理由は、「無記入」。 ・辛い時、心の支えになったのは、「趣味や物事」。
問 7	<ul style="list-style-type: none"> ・学校では、「施設入所児以外と一緒にいることが多かった」。 ・小学校では、施設にいる事を「聞かれれば誰にでも明かしていた」。

	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校では、施設にいる事を「聞かれれば誰にでも明かしていた」。 ・高校では、施設にいる事を「聞かれれば誰にでも明かしていた」。 ・中学・高校の部活は、「なんとなく入っていた」。 ・自分の事を理解してくれていたと思う先生は、「いなかった」。
問 8	<ul style="list-style-type: none"> ・入所時の家族構成は、「父、本人、弟（1人）、妹（1人）」。 ・施設入所は、「幼稚園年中」の時。「弟（1人）と妹（1人）と一緒に」。 ・施設への入所理由を、「無記入」。 ・当時、入所理由についてどのように考えていたか、「何も考えてなかった」。 ・家族と暮らしていた頃、自分に対する親の態度は、「一般の親と違うところがあると思っていた」。その親の態度に対して、自分は「（どう振舞っていたか）親の期待に応えようとしていた」。 ・入所中の交流は、「電話」、「外泊」。 ・現在、家族とは、「会わないが、電話・メール・手紙などで連絡をとることがある」。 ・入所する以前、「虐待を受けていたと思わない」。
問 9	<ul style="list-style-type: none"> ・自立まで施設で生活することが決まった時、そのことを「前向きに受け入れた」。その理由は、「施設で生活していく他に方法がなかったから」、「学校の友人と離れたくなかったから」、「家に帰らなくなかったから」。
問 10	<ul style="list-style-type: none"> 施設で生活したことを現在は、「よかった」と考えている。その理由は、「他では出来ない経験がたくさんできたから」。

事例 19

<p>属性：男性 10代 未婚（一人暮らし） 住居は間借り・アパート 学歴：定時制高校 卒業 仕事：コンビニ店員（非正規） 勤続1年6か月 転職経験はなし。職場の人間関係でこまっていることは、「ない」。</p>	
問 3	<ul style="list-style-type: none"> ・近所とは、「ほとんど関わらない」。 ・自治会行事には、「都合が合っても参加しない」。 ・近所や自治会との付き合いで困っていることは、「ない」。
問 4	<ul style="list-style-type: none"> ・退所後に苦労したことは、「困ったことや問題があった際に頼れる人がいなかった」。 ・退所後も交流がある人物は、「同じ施設経験者」。 ・交流は、「1年に1、2度は会うことがある」、「会うことがないが、電話・メール・手紙などで連絡をとることがある」。
問 5	<ul style="list-style-type: none"> ・進路の相談をしていた相手は、「誰にも相談しなかった」。 ・進路の最終決定で最も参考にしたのは、「無記入」。
問 6	<ul style="list-style-type: none"> ・入所中、特に見ていてくれたと感じる人物は、「いない」。理由は、「無記入」。 ・入所中、尊敬できる人物は、「いなかった」。理由は、「無記入」。 ・入所中、身近に信頼できる人物は、「いた、施設の職員」。理由は、「無記入」。 ・辛い時、心の支えになったのは、「趣味や物事」。
問 7	<ul style="list-style-type: none"> ・学校では、「施設入所児以外と一緒にいることが多かった」。 ・小学校では、施設にいる事を「周りの人は知っていたため隠すまでもなかった」。 ・中学校では、施設にいる事を「周りの人は知っていたため隠すまでもなかった」。 ・高校では、施設にいる事を「聞かれれば誰にでも明かしていた」。 ・中学・高校の部活は、「なんとなく入っていた」。 ・自分の事を理解してくれていたと思う先生は、「いなかった」。

問 8	<ul style="list-style-type: none"> ・入所時の家族構成は、「母、姉（1人）、本人」。 ・施設入所は、「小学校3年生」の時。「自分だけ」。 ・施設への入所理由を、「母だけでは育てられないから」と説明された ・当時、入所理由についてどのように考えていたか、「何で自分だけ入所しなければならないのか」。 ・家族と暮らしていた頃、自分に対する親の態度は、「一般の親と同じだと思っていた」。その親の態度に対して、自分は「（どう振舞っていたか）無記入」。 ・入所中の交流は、「電話」、「手紙」、「外泊」。 ・現在、家族とは、「月に一度」の交流がある ・入所する以前、「虐待を受けていたと思わない」。
問 9	<ul style="list-style-type: none"> ・自立まで施設で生活することが決まった時、そのことを「前向きに受け入れた」。その理由は、「施設で生活していく他に方法がなかったから」、「帰る家がなかったから」。
問 10	<ul style="list-style-type: none"> 施設で生活したことを現在は、「よかったともよくなかったとも言えない」と考えている。その理由は、「施設で生活していくしか方法はなかったので、親とくらしていないことにも、なにも感じません。自分の将来は自分でしかつくりえないから」。
事例 20	
<p>属性：男性 20代 未婚（一人暮らし） 住居は間借り・アパート 学歴：4年制大学 卒業 仕事：大学生 勤続3年（やりがいを感じる） 転職経験はなし。職場の人間関係でこまっていることは、「ない」。</p>	
問 3	<ul style="list-style-type: none"> ・近所とは、「あいさつを交わす程度」。 ・自治会行事には、「特にない」。 ・近所や自治会との付き合いで困っていることは、「ない」。
問 4	<ul style="list-style-type: none"> ・退所後に苦労したことは、「特になし」。 ・退所後も交流がある人物は、「施設職員」、「同じ施設経験者」、「学校の友人」。 ・交流は、「会うことがないが、電話・メール・手紙などで連絡をとることがある」。
問 5	<ul style="list-style-type: none"> ・進路の相談をしていた相手は、「施設職員」、「学校の先生」、「友人」。 ・進路の最終決定で最も参考にしたのは、「自分の考え」。
問 6	<ul style="list-style-type: none"> ・入所中、特に見ていてくれたと感じる人物は、「担当職員」。理由は、「大学進学まで丁寧にサポートしてもらえた」。 ・入所中、尊敬できる人物は、「いた」。理由は、「無記入」。 ・入所中、身近に信頼できる人物は、「いた、友人、職員」。理由は、「話をしっかりと聞いてもらった」。 ・辛い時、心の支えになったのは、「施設職員」、「同じ入所児」、「学校の友人」。
問 7	<ul style="list-style-type: none"> ・学校では、「施設入所児以外と一緒にいることが多かった」。 ・小学校では、施設にいる事を「周りの人は知っていたため隠すまでもなかった」。 ・中学校では、施設にいる事を「周りの人は知っていたため隠すまでもなかった」。 ・高校では、施設にいる事を「親密な友人だけには明かしていた」。 ・中学・高校の部活は、「興味の部活に入ってた」。 ・自分の事を理解してくれていたと思う先生は、「音楽の教諭（中学校）」。
問 8	<ul style="list-style-type: none"> ・入所時の家族構成は、「父、兄（2人）、姉（1人）、本人、弟（1人）」。 ・施設入所は、「幼稚園年長」の時。「弟（1人）と一緒に」。 ・施設への入所理由を、「よく覚えていない」。 ・当時、入所理由についてどのように考えていたか、「よくわからなかった」。

	<ul style="list-style-type: none"> ・家族と暮らしていた頃、自分に対する親の態度は、「一般の親と同じだと思っていた」。その親の態度に対して、自分は「(どう振舞っていたか) 記憶にない」。 ・入所中の交流は、「外泊」。 ・現在、家族とは、「会わないが、電話・メール・手紙で連絡をとることがある」。そのことを、「<u>それがかまわないと考えている</u>」。 ・入所する以前、「虐待を受けていたと思わない」。
問 9	・自立まで施設で生活することが決まった時、そのことを「なんとか受け入れることができた」。その理由は、「施設で生活していく他に方法がなかったから」、「学校の友人と離れなくなかったから」。
問 10	施設で生活したことを現在は、「よかった」と考えている。その理由は、「 <u>普通に生活する上では経験できないようなことが沢山経験できたり、多くの人との関わりをもつことができたから</u> 。 ・自分の人間としての性格が形成できたように思うから」。
事例 21	
属性：男性 10代 未婚(恋人と同居) 住居は間借り・アパート 学歴：普通科高校 卒業 仕事：調理 勤続1年 (やりがいを感じる。「自分のやりたいことだったから」) 転職経験はなし。職場の人間関係でこまっていることは、「ある」。	
問 3	<ul style="list-style-type: none"> ・近所とは、「あいさつを交わす程度」。 ・自治会行事には、「都合が合っても参加しない」。 ・近所や自治会との付き合いで困っていることは、「ない」。
問 4	<ul style="list-style-type: none"> ・退所後に苦労したことは、「困ったことや問題があった際に頼れる人がいなかった」。 ・退所後も交流がある人物は、「施設職員」、「同じ施設経験者」、「学校の先生」、「学校の友人」。 ・交流は、「頻繁に会うことがある」。
問 5	<ul style="list-style-type: none"> ・進路の相談をしていた相手は、「施設職員」、「学校の先生」、「友人」。 ・進路の最終決定で最も参考にしたのは、「施設職員」。
問 6	<ul style="list-style-type: none"> ・入所中、特に見ていてくれたと感じる人物は、「担当職員」。理由は、「<u>過ちをしてしまったときにはしっかりと叱ってもらったから</u>」。 ・入所中、尊敬できる人物は、「いた、父親」。理由は、「料理がおいしかったから」。 ・入所中、身近に信頼できる人物は、「いた、同じ施設の子」。理由は、「<u>色々話を聞いてくれるから</u>」。 ・辛い時、心の支えになったのは、「同じ入所児」。
問 7	<ul style="list-style-type: none"> ・学校では、「同じ施設入所児と一緒にいることが多かった」。 ・小学校では、施設にいる事を「聞かれれば誰にでも明かしていた」。 ・中学校では、施設にいる事を「聞かれれば誰にでも明かしていた」。 ・高校では、施設にいる事を「聞かれれば誰にでも明かしていた」。 ・中学・高校の部活は、「興味の部活に入っていた」。 ・自分の事を理解してくれていたと思う先生は、「担任の先生」。
問 8	<ul style="list-style-type: none"> ・入所時の家族構成は、「父、本人」。 ・施設入所は、「高校1年生」の時。「自分だけ」。 ・施設への入所理由を、「<u>普通の生活が出来るところ(家での暮らしが金銭的に無理だったので)</u>」と説明された。 ・当時、入所理由についてどのように考えていたか、「<u>仕方ないと思った</u>」。 ・家族と暮らしていた頃、自分に対する親の態度は、「一般の親と同じだと思っていた」。その親の態度に対して、自分は「<u>がまんして親の言うことをきいていた</u>」、「親に反発していた」。

	<ul style="list-style-type: none"> ・入所中の交流は、「電話」、「外出」。 ・現在、家族とは、「頻繁に会うことがある」。そのことを、「<u>特になし。一緒にごはんを食べる仲</u>」。 ・入所する以前、「虐待を受けていたと思わない」。
問 9	・自立まで施設で生活することが決まった時、そのことを「前向きに受け入れた」。その理由は、「施設で生活していくことが自分にとって良いと思ったから」。
問 10	施設で生活したことを現在は、「よかった」と考えている。その理由は、「 <u>集団生活ではわからない事がわかったから</u> 」。
事例 22	
属性：女性 40代以上 既婚(夫と同居。子どもあり) 住居は一戸建て借家 学歴：普通科高校 卒業 仕事：調理 勤続5年 (やりがいを感じる。「楽しい。笑いが絶えない」) 転職経験はある。職場の人間関係でこまっていることは、「ない」。	
問 3	<ul style="list-style-type: none"> ・近所とは、「私的な交流がある」。 ・自治会行事には、「都合をつけて参加する」。 ・近所や自治会との付き合いで困っていることは、「ない」。
問 4	<ul style="list-style-type: none"> ・退所後に苦労したことは、「困ったことや問題があった際に頼れる人がいなかった」。 ・退所後も交流がある人物は、「施設職員」、「同じ施設経験者」。 ・交流は、「1年に1、2度は会うことがある」。
問 5	<ul style="list-style-type: none"> ・進路の相談をしていた相手は、「施設職員」。 ・進路の最終決定で最も参考にしたのは、「施設職員」。
問 6	<ul style="list-style-type: none"> ・入所中、特に見ていてくれたと感じる人物は、「無記入」。理由は、「職員によく、おこられたが、いつもどんな時も奥田のぶ子先生は大きく見守ってくれた。感謝の気持ちでいっぱいです」。 ・入所中、尊敬できる人物は、「いた」。理由は、「無記入」。 ・入所中、身近に信頼できる人物は、「いた、知人」。理由は、「無記入」。 ・辛い時、心の支えになったのは、「無記入」。
問 7	<ul style="list-style-type: none"> ・学校では、「友達はかなり少なかった。その時、性格も暗かった」。 ・小学校では、施設にいる事を「周りの人は知っていたため隠すまでもなかった」。 ・中学校では、施設にいる事を「周りの人は知っていたため隠すまでもなかった」。 ・高校では、施設にいる事を「周りの人は知っていたため隠すまでもなかった」。 ・中学・高校の部活は、「なんとなく入っていた」。 ・自分の事を理解してくれていたと思う先生は、「いなかった」。
問 8	<ul style="list-style-type: none"> ・入所時の家族構成は、「母、本人」。 ・施設入所は、「小学校5年生」の時。「自分だけ」。 ・施設への入所理由を、「<u>親が育てる能力が無い為</u>」と説明された。 ・当時、入所理由についてどのように考えていたか、「<u>親からは愛情は感じていたが育てる能力が無い親だから、しかたのない事であるとクールに理解していた</u>」。 ・家族と暮らしていた頃、自分に対する親の態度は、「一般の親と違うところがあると思っていた」。その親の態度に対して、自分は「<u>仲は悪くなかった</u>」。 ・入所中の交流は、「<u>会いに来てくれた</u>」。その事を「<u>入所中には反発していた。しかし、今はこの母親の子に生まれて良かったと思っています</u>」。 ・現在、家族とは、「<u>8年ぐらい前に亡くなった</u>」。そのことを、「<u>私が結婚する時ぐらいに母と近くで住んだ。もう亡くなってしまったのが母の深い温かな思いを感じた</u>」。

	・入所する以前、「虐待を受けていたと思わない」。
問 9	・自立まで施設で生活することが決まった時、そのことを「なんとか受け入れることができた」。その理由は、「施設で生活していく他に方法がなかったから」。
問 10	施設で生活したことを現在は、「よかった」と考えている。その理由は、「心温かな奥田のぶ子先生と出会えて良かった」。
事例 23	
属性：男性 40代以上 既婚(妻と同居。子どもあり) 住居は一戸建 学歴：職業訓練校(溶接工1年) 卒業 仕事：会社員(事務職)(正規) 勤続37年9か月 (やりがいをを感じる。「14年前、愛知県の職場から東京本社で品質管理監査の業務で全国の交友拠点を訪問し、監査を担当させて頂いています。60歳で定年後同じ職場で再雇用して頂き4年目となりました」) 転職経験はある。「現在の職場に入社する前は、大切な将来のことも考えず自分本意で職場を転々としていました」職場の人間関係でこまっていることは、「ない」。	
問 3	・近所とは、「私的な交流がある」。 ・自治会行事には、「都合をつけて参加する」。 ・近所や自治会との付き合いで困っていることは、「ない」。「平成22～24年 町内の副会長、会長、コミュニティ副会長をさせて頂きました。町内会、自治会、コミュニティの行事運営を勉強させて頂きました」。
問 4	・退所後に苦労したことは、「あまりにも世間知らずで無知であったと反省している」。 ・退所後も交流がある人物は、「施設職員」。 ・交流は、「1年に1、2度は会うことがある」。
問 5	・進路の相談をしていた相手は、「施設職員」、「学校の先生」。 ・進路の最終決定で最も参考にしたのは、「施設職員」、「学校の先生」。
問 6	・入所中、特に見ていてくれたと感じる人物は、「担当職員」。理由は、「施設での生活や学校での出来事について、励まして頂き、また、困ったことがあった場合、暖かく相談に乗って頂いたことが勇氣や希望につながったと思います」。 ・入所中、尊敬できる人物は、「無記入」。理由は、「無記入」。 ・入所中、身近に信頼できる人物は、「いた、施設職員」。理由は、「無記入」。 ・辛い時、心の支えになったのは、「施設職員」。
問 7	・学校では、「施設入所児もそれ以外のとも同じくらい一緒にいた」。 ・小学校では、施設にいる事を「聞かれれば誰にでも明かしていた」。 ・中学校では、施設にいる事を「聞かれれば誰にでも明かしていた」。 ・高校では、施設にいる事を「聞かれれば誰にでも明かしていた」。 ・中学・高校の部活は、「当時、施設の人で部活をやっていた人はいなかった人はいなかったのでは?」。 ・自分の事を理解してくれていたと思う先生は、「担任の先生」。
問 8	・入所時の家族構成は、「父、母、本人、弟(1人)」。 ・施設入所は、「小学校1年生」の時。「弟(1人)と一緒に」。 ・施設への入所理由を、「当時の記憶では、なんと説明されたのか覚えていません」。 ・当時、入所理由についてどのように考えていたか、「当時、私6才、弟3才、義理の姉10才でした。私の記憶では、突然、男の人と女の人が借家(住まい)にきて、義理の姉と話を私と弟をつれて施設に入所したと思います。義理の姉と一緒にだったので、不安はありましたが、ついて行きました。当時、詳しい入所理由はわかりませんでした」。

	・入所中の交流は、「電話」、「時々、新宮市でお会いする」。その事を「私は、施設を2回変わっています。和歌山県新宮市→三重県伊勢市。1回目の施設では、義理のお姉さんと母方の婆ちゃんと交流がありました。2回目の施設では義理のお姉さんと母方の婆ちゃんと交流がありました。※施設で生活することなどについて考え直すことはありませんでした。⇒みんなが大変な時代でした」。 ・現在、家族とは、「8年ぐらい前に亡くなった」。そのことを、「私が結婚する時ぐらいに母と近くに住んだ。もう亡くなってしまったのが母の深い温かな思いを感じた」。 ・現在、家族とは、「2～3年に義理のお姉さんとお会いします。電話は月に1回程しています。父は50年前、母は17年前に亡くなっています。婆ちゃんは15年前に亡くなっています」。 ・その交流を、「父との交流は少なかったです。母との交流は、10年程ありました。親戚の方々や、義理のお姉さん、婆ちゃんには感謝しています。特に義理のお姉さんには、幼いころよく面倒を見ていただきました。恩義のある方です」。 ・入所する以前、「虐待を受けていたと思わない」。
問 9	・自立まで施設で生活することが決まった時、そのことを「前向きに受け入れた」。その理由は、「施設で生活していく他に方法がなかったから」、「施設で生活していくことが自分にとって良いと思ったから」、「自分のことを理解し、見守ってくれる施設職員がいたから」、「自分のことを理解し、見守ってくれる学校の先生がいたから」、「自分と同じような境遇の施設の人がいたから」、「3才年下の弟と一緒にいたから、前向きに受け入れたと思います」。
問 10	施設で生活したことを現在は、「よかった」と考えている。その理由は、「本来は、家族と一緒に生活することがのぞましいことですが、親の事情が原因で、施設生活をしてきましたが、過去をふりかえって見た時に、一般の方が経験しない生活体験をさせて頂きました。人との大切な絆、施設職員様・親への感謝の気持ちなどを受け止めて行ける影響があったと思います」。
事例 24	
属性：男性 20代 未婚(一人暮らし) 住居は間借り・アパート 学歴：職業科高校卒業 仕事：配管工(非正規) 勤続1か月 (やりがいをを感じる。「自分の好きな仕事をしているので」) 転職経験はない。職場の人間関係でこまっていることは、「ない」。	
問 3	・近所とは、「あいさつを交わす程度」。 ・自治会行事には、「都合が合っても参加しない」。 ・近所や自治会との付き合いで困っていることは、「ない」。
問 4	・退所後に苦労したことは、「なし」。 ・退所後も交流がある人物は、「施設職員」、「同じ施設経験者」。 ・交流は、「なし」。
問 5	・進路の相談をしていた相手は、「なし」。 ・進路の最終決定で最も参考にしたのは、「なし」。
問 6	・入所中、特に見ていてくれたと感じる人物は、「なし」。理由は、「なし」。 ・入所中、尊敬できる人物は、「いなかった」。理由は、「無記入」。 ・入所中、身近に信頼できる人物は、「いなかった」。理由は、「無記入」。 ・辛い時、心の支えになったのは、「施設職員」、「同じ入所者」。
問 7	・学校では、「施設入所児もそれ以外のとも同じくらい一緒にいた」。 ・小学校では、施設にいる事を「聞かれれば誰にでも明かしていた」。 ・中学校では、施設にいる事を「聞かれれば誰にでも明かしていた」。 ・高校では、施設にいる事を「聞かれれば誰にでも明かしていた」。

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 中学・高校の部活は、「興味がある部活に入っていた」。 ・ 自分の事を理解してくれていたと思う先生は、「担任の先生」、「部活の顧問」。
問 8	<ul style="list-style-type: none"> ・ 入所時の家族構成は、「姉 (3 人)、本人」。 ・ 施設入所は、「乳児」の時。「姉 (3 人) と一緒に」。 ・ 施設への入所理由を、「なし」。 ・ 当時、入所理由についてどのように考えていたか、「<u>わからない</u>」。 ・ 入所中の交流は、「なし」。
問 9	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自立まで施設で生活することが決まった時、そのことを「<u>しせつに入れられたりゆうがわからないのでよくわからない気持ちでした</u>」。その理由は、「施設で生活していく他に方法がなかったから」、「自分のことを理解し、見守ってくれる施設職員がいたから」、「自分のことを理解し、見守ってくれる学校の先生がいたから」。
問 10	<ul style="list-style-type: none"> 施設で生活したことを現在は、「よかった」と考えている。その理由は、「<u>別にいやな事などがなかったから</u>」。
事例 25	
属性：女性 30代 既婚（夫と同居。子どもあり） 住居は一戸建て 学歴：普通科高校卒業 仕事：専業主婦	
問 3	<ul style="list-style-type: none"> ・ 近所とは、「あいさつを交わす程度」。 ・ 自治会行事には、「都合をつけて参加する」。 ・ 近所や自治会との付き合いで困っていることは、「ない」。
問 4	<ul style="list-style-type: none"> ・ 退所後に苦勞したことは、「<u>たよる人がいない</u>」。 ・ 退所後も交流がある人物は、「同じ施設経験者」。 ・ 交流は、「会うことがないが、電話・メール・手紙をとることがある」。
問 5	<ul style="list-style-type: none"> ・ 進路の相談をしていた相手は、「友人」。 ・ 進路の最終決定で最も参考にしたのは、「施設職員」。
問 6	<ul style="list-style-type: none"> ・ 入所中、特に見ていてくれたと感じる人物は、「担当職員」。理由は、「<u>今思えばおこられたことがよくわかる</u>」。 ・ 入所中、尊敬できる人物は、「いなかった」。理由は、「無記入」。 ・ 入所中、身近に信頼できる人物は、「いなかった」。理由は、「無記入」。 ・ 辛い時、心の支えになったのは、「同じ入所者」。
問 7	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校では、「施設入所児以外と一緒にいることが多かった」。 ・ 小学校では、施設にいる事を「聞かれれば誰にでも明かしていた」。 ・ 中学校では、施設にいる事を「聞かれれば誰にでも明かしていた」。 ・ 高校では、施設にいる事を「聞かれれば誰にでも明かしていた」。 ・ 中学・高校の部活は、「興味がある部活に入っていた」。 ・ 自分の事を理解してくれていたと思う先生は、「いなかった」。
問 8	<ul style="list-style-type: none"> ・ 入所時の家族構成は、「本人、妹 (1 人)」。 ・ 施設入所は、「乳児」の時。「自分だけ」。 ・ 施設への入所理由を、「<u>覚えていない</u>」。 ・ 当時、入所理由についてどのように考えていたか、「<u>なにも</u>」。 ・ 現在、家族との交流は、「全く会うこともなく、連絡をとることもない」。 ・ 入所する以前、「虐待を受けていたと思わない」。

問 9	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自立まで施設で生活することが決まった時、そのことを「<u>なにも</u>」。その理由は、「無記入」。
問 10	<ul style="list-style-type: none"> 施設で生活したことを現在は、「よかったともよくなかったとも言えない」と考えている。その理由は、「<u>今だなんもおり子供もうまれしあわせて子供をすてるおやのきもちがわからない</u>」。
事例 26	
属性：男性 30代 学歴：不明 仕事：塗装業、リフォーム業（自営業） 勤続 3 年 6 か月（やりがいを感ずる。「好きな仕事だから」）。転職の経験はある（給料が安いから）。職場の人間関係で困っていることは（ない）。	
問 3	<ul style="list-style-type: none"> ・ 近所とは、「あいさつを交わす程度」。 ・ 自治会行事には、「都合をつけて参加する」。 ・ 近所や自治会との付き合いで困っていることは、「ない」。
問 4	<ul style="list-style-type: none"> ・ 退所後に苦勞したことは、「困ったことや問題があった際に頼れる人がいなかった」。 ・ 退所後も交流がある人物は、「施設職員」、「学校の友人」。 ・ 交流は、「頻繁に会うことがある」。
問 5	<ul style="list-style-type: none"> ・ 進路の相談をしていた相手は、「施設職員」。 ・ 進路の最終決定で最も参考にしたのは、「施設職員」。
問 6	<ul style="list-style-type: none"> ・ 入所中、特に見ていてくれたと感じる人物は、「担当職員」。理由は、「色々と親身になって、<u>せつしてくれたから</u>」。
問 7	無記入。
問 8	<ul style="list-style-type: none"> ・ 入所時の家族構成は、「不明」。 ・ 施設入所は、「乳児」の時。「自分だけ」。 ・ 施設への入所理由を、「<u>わからない</u>」。 ・ 当時、入所理由についてどのように考えていたか、「無記入」。 ・ 入所中の交流は、「外泊」。 ・ 入所中の交流は、「1 年に 1、2 度は会うことがある。その交流を、「特にあまり考えない」。 ・ 入所する以前、「虐待を受けていたと思わない」。
問 9	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自立まで施設で生活することが決まった時、そのことを「<u>前向きに受け入れた</u>」。その理由は、「施設で生活していく他に方法がなかったから」。
問 10	<ul style="list-style-type: none"> 施設で生活したことを現在は、「よかった」と考えている。その理由は、「無記入」。
事例 27	
属性：男性 20代 未婚（一人暮らし） 住居は間借り・アパート 学歴：職業科高校卒業 仕事：土木関係（非正規、パート） 勤続 3 年（やりがいを感ずらない）。 転職経験はある。職場の人間関係でこまっていることは、「ある」。	
問 3	<ul style="list-style-type: none"> ・ 近所とは、「ほとんど関わらない」。 ・ 自治会行事には、「都合が合っても参加しない」。 ・ 近所や自治会との付き合いで困っていることは、「ある」。
問 4	<ul style="list-style-type: none"> ・ 退所後に苦勞したことは、「困ったことや問題があった際に頼れる人がいなかった」。 ・ 退所後も交流がある人物は、「同じ施設経験者」。 ・ 交流は、「会うことがないが、電話・メール・手紙で連絡をとることがある」。
問 5	<ul style="list-style-type: none"> ・ 進路の相談をしていた相手は、「施設職員」、「学校の先生」。 ・ 進路の最終決定で最も参考にしたのは、「学校の先生」。

問 6	<ul style="list-style-type: none"> ・入所中、特に見ていてくれたと感じる人物は、「担当職員」。理由は、「無記入」。 ・入所中、尊敬できる人物は、「いなかった」。理由は、「無記入」。 ・入所中、身近に信頼できる人物は、「いなかった」。理由は、「無記入」。 ・辛い時、心の支えになったのは、「学校の友人」。
問 7	<ul style="list-style-type: none"> ・学校では、「施設入所児以外と一緒にいることが多かった」。 ・小学校では、施設にいる事を「周りの人は知っていたため隠すまでもなかった」。 ・中学校では、施設にいる事を「周りの人は知っていたため隠すまでもなかった」。 ・高校では、施設にいる事を「周りの人は知っていたため隠すまでもなかった」。 ・中学・高校の部活は、「興味がある部活に入っていた」。 ・自分の事を理解してくれていたと思う先生は、「部活の顧問」。
問 8	<ul style="list-style-type: none"> ・入所時の家族構成は、「母、兄、本人」。 ・施設入所は、「小学校」の時。「兄と一緒に」。 ・施設への入所理由を、「無記入」。 ・当時、入所理由についてどのように考えていたか、「無記入」。 ・家族と暮らしていた頃、自分に対する親の態度は、「一般の親と違うところがあると思っていた」。その親の態度に対して、自分は「がまんして親の言うことをきいていた」。 ・入所中の交流は、「外泊」。 ・現在、家族との交流は、「全く会うこともなく、連絡をとることもない」。 ・入所する以前、「母親」から「虐待を受けていたと思う」。 ・被虐待経験から、「どうして親が虐待を行ったのか理解できない」。
問 9	<ul style="list-style-type: none"> ・自立まで施設で生活することが決まった時、そのことを「しかたなかった」。その理由は、「施設で生活していく他に方法がなかったから」。
問 10	施設で生活したことを現在は、「よかったともよくなかったとも言えない」と考えている。その理由は、「無記入」。
事例 28	
属性：男性 20代 既婚（妻と同居。子どもあり） 住居は間借り・アパート 学歴：普通科高校卒業 仕事：溶接工（正規） 勤続1年（やりがいを感じる） 転職経験はある。（賃金の安さから）職場の人間関係でこまっていることは、「ない」。	
問 3	<ul style="list-style-type: none"> ・近所とは、「あいさつを交わす程度」。 ・自治会行事には、「都合が合っても参加しない」。 ・近所や自治会との付き合いで困っていることは、「ない」。
問 4	<ul style="list-style-type: none"> ・退所後に苦労したことは、「困ったことや問題があった際に頼れる人がいなかった」。 ・退所後も交流がある人物は、「施設職員」、「学校の友人」。 ・交流は、「1年に1、2度は会うことがある」。
問 5	<ul style="list-style-type: none"> ・進路の相談をしていた相手は、「施設職員」、「学校の先生」。 ・進路の最終決定で最も参考にしたのは、「施設職員」。
問 6	<ul style="list-style-type: none"> ・入所中、特に見ていてくれたと感じる人物は、「指導員の先生」。理由は、「殴り合う位にぶつかったため」。 ・入所中、尊敬できる人物は、「いなかった」。理由は、「無記入」。 ・入所中、身近に信頼できる人物は、「いなかった」。理由は、「無記入」。 ・辛い時、心の支えになったのは、「趣味や物事」。

問 7	<ul style="list-style-type: none"> ・学校では、「施設入所児とそれ以外の子とは同じくらい一緒にいた」。 ・小学校では、施設にいる事を「周りの人は知っていたため隠すまでもなかった」。 ・中学校では、施設にいる事を「周りの人は知っていたため隠すまでもなかった」。 ・高校では、施設にいる事を「周りの人は知っていたため隠すまでもなかった」。 ・中学・高校の部活は、「興味がある部活に入っていた」。 ・自分の事を理解してくれていたと思う先生は、「担任の先生」、「部活の顧問」。
問 8	<ul style="list-style-type: none"> ・入所時の家族構成は、「父、母、兄（1人）、本人、弟（1人）」。 ・施設入所は、「幼稚園年長」の時。「自分だけ」。 ・施設への入所理由を、「両親が離婚し弟と離別したため」。 ・当時、入所理由についてどのように考えていたか、「父親に引きとられ、トラックの運転手で1週間家に帰ってこないから」。 ・家族と暮らしていた頃、自分に対する親の態度は、「一般の親と同じだと思っていた」。その親の態度に対して、自分は「無記入」。 ・入所中の交流は、「電話」、「外泊」。その中で、「半年間は母親の所に引きとってもらったが、諸事情により施設に戻った」。 ・現在、家族との交流は、「両親は他界し、兄弟とはメール電話を」。 ・入所する以前、「虐待を受けていたと思わない」。
問 9	<ul style="list-style-type: none"> ・自立まで施設で生活することが決まった時、そのことを「前向きに受け入れた」。その理由は、「施設で生活していく他に方法がなかったから」。
問 10	施設で生活したことを現在は、「よくなかった」と考えている。その理由は、「同年代を見下すようになった」。
事例 29	
属性：女性 30代 既婚（夫と同居。子どもなし） 住居は間借り・アパート 学歴：職業科高校卒業 仕事：サービス業（非正規） 勤続2年（やりがいを感じない。「お金がほしいため」） 転職経験はある（お金）。職場の人間関係でこまっていることは、「ある」。	
問 3	<ul style="list-style-type: none"> ・近所とは、「ほとんど関わらない」。 ・自治会行事には、「都合が合っても参加しない」。 ・近所や自治会との付き合いで困っていることは、「ない」。
問 4	<ul style="list-style-type: none"> ・退所後に苦労したことは、「困ったことや問題があった際に頼れる人がいなかった」。 ・退所後も交流がある人物は、「施設職員」。 ・交流は、「1年に1、2度は会うことがある」。
問 5	<ul style="list-style-type: none"> ・進路の相談をしていた相手は、「施設職員」。 ・進路の最終決定で最も参考にしたのは、「施設職員」。
問 6	<ul style="list-style-type: none"> ・入所中、特に見ていてくれたと感じる人物は、「担当職員」。理由は、「無記入」。 ・入所中、尊敬できる人物は、「いなかった」。理由は、「無記入」。 ・入所中、身近に信頼できる人物は、「いなかった」。理由は、「無記入」。 ・辛い時、心の支えになったのは、「施設職員」。
問 7	<ul style="list-style-type: none"> ・学校では、「施設入所児以外の子と一緒にいることが多かった」。 ・小学校では、施設にいる事を「無記入」。 ・中学校では、施設にいる事を「親密な友人だけには明かしていた」。 ・高校では、施設にいる事を「親密な友人だけには明かしていた」。

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 中学・高校の部活は、「なんとなく入っていた」。 ・ 自分の事を理解してくれていたと思う先生は、「いなかった」。
問 8	<ul style="list-style-type: none"> ・ 入所時の家族構成は、「母、姉（1人）、本人、妹（1人）」。 ・ 施設入所は、「小学校 5 年生」の時。「自分だけ」。 ・ 施設への入所理由を、「無記入」。 ・ 当時、入所理由についてどのように考えていたか、「無記入」。 ・ 家族と暮らしていた頃、自分に対する親の態度は、「一般の親と違うところがあると思っていた」。その親の態度に対して、自分は「がまんして親の言うことをきいていた」。 ・ 入所中の交流は、「無記入」。 ・ 現在、家族との交流は、「会わないが、電話・メール・手紙で連絡をとることがある」。 ・ 入所する以前、「母親」から「虐待を受けていたと思う」。 ・ 被虐待経験から、「どうして親が虐待を行ったのか理解できない」。
問 9	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自立まで施設で生活することが決まった時、そのことを「どうしても受け入れられなかった」。その理由は、「無記入」。
問 10	<ul style="list-style-type: none"> 施設で生活したことを現在は、「よくなかった」と考えている。その理由は、「無記入」。